

歌の詞思は次第に變革なしつつも醍醐天皇の朝よりは一層盛に行はれ名匠偉人も尠からず現れたり。紀貫之、凡河内躬恒、壬生忠岑、紀有則等は其の最なるもの、伊勢、大江千里などもまた其の名を揚ぐるに足るべき高手なりき。醍醐天皇は夙に御心を政治に用ひ給ひ諸廢れたるを興こし給ひしが和歌の道にも深く注意あらせられ前の四人に仰せて『古今和歌集』を撰進せしめ給ひき。是れ勅撰和歌集の濫觴にして和歌獎勵の道はた是れより開けぬ。村上天皇の御代には和歌所を禁中の梨壺(昭陽舍)に設け時の歌人大中臣能宣、清原元輔、源順、紀時文、坂上望城等五人に勅して『萬葉集』の訓點を附せしめまた『後撰和歌集』を撰ばしめたり。以後勅撰の歌集陸續撰進せられ此の時代のみにて『後撰』に次ぎて『拾遺』、『後拾遺』、『金葉』、『詞華』、『千載』の五集あり。鎌倉時代より南北朝にかけては世は殆ど兵亂に忙はしけれど大宮人は暇あれや和歌の集のみは永く廢ることなくすべて十四種の撰集世に出でたり。『古今集』以下是等を併せて廿一代集と云ふ。此の他當時代には私撰の歌集もまた尠からず貫之の『新撰和歌集』、藤原清輔の『續詞華集』、藤原公任の『金玉集』、能因法師の『玄々集』等特に其の名世に高し。また家々の歌集にては業平、素性、躬恒、敏

行、貫之、伊勢、忠岑、能宣、元輔、紫式部、清少納言等の家集今に存せり。

かく歌謡の盛行するに従ひて歌躰も漸く多く旋頭歌、又は連歌等當期の初めには往々物語若しくは草子類の中に散見せるも多かりしが遂には勅撰の集中にも採り入れらるゝに至りぬ。中に就いて連歌は坐興の頓作を旨とせしからに漢吳の音をも俗語をも憚からず用ひたり。又今様の歌といふものも此の時代より折々見えつ僧空海がいろは歌は蓋し此の歌の嚆矢なるべし。既に其の名目の標致する如く今様とは姿も詞も共に古に泥まぬ當世風の歌といふ意にて是れはた時俗の言語をも吳漢の音をも敢て嫌ふことなく梵語をさへ其のまゝに混用したるもありき。その他神祇を祭る神樂歌あり、俗謡を唐樂の音調に合して歌ひし催馬樂あり、詩賦に曲節を附して吟誦する朗詠といふものもありき。但し是等の中には純然たる歌謡(所謂和歌)の躰を脱して歌曲に屬すべきものもありと知るべし現に催馬樂朗詠、今様等は總稱して郢曲とも又唱歌とも呼べり。かゝれば歌はますます進みたるに似たれども其の實末技に流れて名歌次第に減じ大かた巧緻纖細の風を以て最上なるものと心得たるが如し。殊に此の時代の中頃よりかけて詠歌

を教ふる書冊出で各自門戸を立て、一定の方式を守株するに及びては模型に従ひて作爲する外何事も知らざる一種の機械的技術に過ぎざる有様となりぬ。藤原清輔の『奥儀抄』『袋草子』及び『和歌初學抄』藤原基俊の『悦目抄』藤原公任の『新撰髓腦』等は孰れも當代を風靡したる歌學の書典なり。元來是等歌學の書といへど若し歌道の原理さては修辭の法などにも教ふるものならんにはさまでの弊害もなかるべかりしに彼の言葉は忌むべし此の句は用ふべからずなど瑣々たる無用の詮索に詠歌の自由を奪ひしかば遂に歌道の衰微を招く基とはなりしなり。况や當時の歌人は雕琢の一點には熱心なりしも其の精神をば顧みることなく一種の遊戲と心得たるが如き觀ありしをや。彼の能因法師の「白河の關」の歌を實にせんとて閑居して顔を日に晒しつゝ以て旅せし様を裝ひしが如き又は待賢門院の女房加賀といふもの「ふしまば」の歌にわざと操行を汚し如き眞個に歌謡の精神を領知せるものゝ爲すべきわざならんや。既にかく其の精神を誤る歌道の衰頽せしこと偶然ならずと謂ふべし。なほ精しくはつきりに歌集の優劣、歌思、歌躰の變遷さては重なる歌人等につきて下せる評論と合せて考ふべし。

其の一 『古今和歌集』

『古今和歌集』は醍醐天皇延喜五年四月に御書所、預名紀貫之を棟梁とし大内記紀友則、前甲斐、莊官凡河内躬恒、右衛門、府生壬生忠岑等に仰せて撰ばしめ給ひたるものなり。此の集は『萬葉集』に入らぬ古歌及び編者等の自詠を網羅して其の卷二十、春夏秋冬、賀、離別、羈旅、物名、戀、哀傷、雜、長歌、旋頭歌、俳諧歌、大歌所等の部門に分ち歌の數は千百首に滿つ。年代の上より云へば『萬葉集』に載れる歌のをはり淳仁天皇の天平寶字三年正月より以後延喜五年四月まで大凡百五十年の間に亘る。但し讀人知らずといふ歌の中には『萬葉』時代の歌人なるもありぬべしといふ説あり歌躰を見るに洵に然るべし。されば此の集は其の本領専ら當代の初期に存するを以て和歌衰微の時より漸く再興の期に入る過渡時代の歌界を標致せるものと見るも可ならん。則ち六歌仙の稱ある僧正遍昭、在原業平、文屋康秀、喜撰法師、大友黒主、小野小町等は孰れも暗黒なる歌界に曙光を放てりしもの、在原行平、素性法師らはた然り。藤原敏行、紀友則、凡河内躬恒、大江千里、清原深養父、伊勢等相つぎては歌界漸く明かに紀貫之、壬生忠岑等出で、は旭日まさに三竿に昇りしにも喩へつべし。

是等を此の集中に見えたる歌人の重なるものとす。後の撰集はた是等の歌人の詠をとりたるもありと雖も此の集が『萬葉集』時代の歌人をも撰せしとあなぞく其の本領はあつから他にあり精しくは後に云ふべき折あればとて今は略しつ。さて右云へるが如く此の集は延喜年中に撰進せられたるものなりと雖も其の歌は『萬葉集』以後の分を蒐集せたるものなり。故に其の詞思に就いて仔細に稽査する時は年代の遷移につれて多少の變易ありしは勿論なれども其の間あつから集中を貫通せる一種の特色なからずや。此の集の歌が漢學佛教の影響を受けて其の感想を表現せしものゝまゝ見ゆるは既に奈良朝の歌謳若しくは當代の狀勢を知れるものに向ひては殊更に絮説する要を見ず蓋し是等の影響は早く奈良朝の歌謳にも見るべかりしが當代の人心が漢學佛教の感化を受けしことは前代の比にあらずれば其の反映の著く現せしは問はずして明なればなり。さはいへ『萬葉集』に在りては漢學若しくは佛教の思想を詠せしもの押なべては直譯めきて露骨なるを免れざりしに此の集にありては能く其の意を翻して斧鑿の痕跡を止むることなし。一二の例を掲げて其の一斑を示さん。紀友則櫻の花のものとに

て年の老いぬることを歎きてよめる歌に

色も香もあなじ昔にさくらめど年ふる人ぞあらたまりける

と詠せるは宋之問が「有所思」と題せる古詩の中に「年々歳々花相似歳々年々人不同」といへる句を翻したる想にあらずや。また或人の詠める「寛平の御時后の宮の歌合の歌」に

雪ふりて年のくれぬる時にこそつひにもみぢぬ松も見えけれ

といへるは「論語」なる「子罕篇」に「歳寒然後知松柏之後凋」とあるをもてよめりとあはし。是等一にはかゝる思想の漸く我が人心に渾和融合せるに基きまた一には措辭の法一段の巧を加へたるにもよるなるべし。若しそれ『萬葉集』をして異采あらしめたる敬神的若しくは忠君的感想は此の集にてはやゝ形式的に流れたる觀ありといへども其の鬱勃たる氣概は勢振として集中に尋ねべし。されど此の集は既に部門の立て方にては四季の詠並びに戀歌の多數を占めたるにても容易に知らるゝ如く雪月花等自然の美を歌へるもの又は男女相思の情を抒べたるもの他に越えて盛なり因に云ふ『萬葉集』にては「相聞」といふもの男女の間に限らず親子兄弟朋友等を思慕する情を歌へるものなりこきは

前へ云へる如くなりしが此の集にて戀歌といひ而して此の集の歌人等が自然の美を歌へる多くは怡樂の調を帯びぬといへども譬へば花を見て人生の果敢なきを嘆ち月を見て無常の感を寄するが如き悲愁の聲は前代に比して一層加はりたるが如し。

うつ蟬の世にも似たるか櫻ばな咲くと見しまにかつ散りにけり
櫻花の開落迅速なるを人生の榮枯不定なるに比して咏嘆せるなり。

やよやまて山時鳥ことづてんわれ世の中に住みわびぬとよ

月見ればちいに物こそ悲しけれ我が身ひとつの秋にはあらねど

前なるは山時鳥に後なるは月に孰れも人生のうかるよしを寄せたりかゝる例なほいと多し。されば離別、羈旅、戀、哀傷等の歌に悲感を歌へるもの多かるよしは殊更に云ふを要せじ。是はもとかゝる歌の本來の性質としてさるべき傾向もありぬべけれど當代の人心既に孱弱浮靡に流れしこと重なる因由なるべし。

着想は純ら趣を設けて思を凝らし意を練るが多かりしかば『萬葉集』時代の實際に聞睹せる事情につきて起れる美感をうたへるとは趣異り餘程緻密複雑となりぬ。

されば歌躰も隨うて質實なりしは繊細巧緻となりし觀あり。特に贈答の歌又は歌合の詠にありては對者を醜弄せんとする希望より奇巧なるもの多く中には詩的感想を離れて一片の理窟に走れるものまゝ見えたり。歌詞は前にもいへる如く此の時代の言語の既に優美艶麗に赴きしに剩へ俗を避けて雅を擇ばんと努めしからにいよ／＼華麗なり。但し猶此の時代には平生の俗語もそのまゝまた直に歌詞たるを得たりしことを忘るべからず則ち雅言と俗語との懸隔差異はさまざま甚しからざりしなり。

要するに此の集の歌は『萬葉集』に比べては其の詞も姿も優美の邊に傾き雄渾壯絶の氣力は著く減少せり。加茂眞淵翁歌躰の變遷を評して曰く大和は男子の國にして山城は女子の國なり遷都のゝちは丈夫の雄々しき手ぶりは失せて手弱女のめゝしき姿とぞなれりけると。此の評幾何か過當の嫌あれども概しては至適の見なるべし。

されども此の集に就いて特にいふべきは長歌の順に衰微したるにあり。部門に殊更長歌の一頂を設けたるにても大方其の數の僅少なるべきは知らるれど長歌

の此の集に載れるもの僅に五首、而も其の想といひ調といひ趣も『萬葉集』の比
 すべくもあらず。想ふに其の想の下れるは常に短歌の作にのみ馴れたる身のた
 まく長歌をものせんとするに當り早く其の感想の欠乏を告ぐる事あるを強
 ひて長からしめんと志たる結果にてもあるべし。されば稀には面白き着想の散
 見せぬにあらねども苦作の痕跡歴然として平語めきたるところ多きによりても
 推測せらる。試に壬生忠岑が「ふる歌に加へて奉れる長歌」一篇を引用して其の一
 例とせん

吳竹の冠よのふること なかりせば 伊香保の沼の いかにして
 思ふ心を のばへましのべまじあはれ古へ ありきてふ 人麻呂こそ
 は うれしけれ 身は下ながら ことの葉を 天つ空まで きこえ
 あげ 末の世までの あととなし 今もあほせの くだれるは 塵に
 つげとや 塵芥の如く 軽き身を 人ちりの身に つもれることを とはるら
 ん 此れを思へば いにしへも くすりけがせる けだものゝ 雲に
 吠えけん神仙傳に仙なる薬を飲みて其の鳴き犬は雲中に吠えたり薬の有り

故事を引心地して ちのなさけり おもほえず 一つこゝろぞ ほ
 こらしき かくはあれども 以下わが身の上をてるひかり 近きまもりの
 身なりしを 誰れかはあきの くるかたに あざむき出て みかきよ
 り どのへもる身の みかきもり をさく敷も おもほえず こゝ
 の重の うちにては 嵐のかぜも きかざりき 今は野山し 近か
 ければ 春はかすみに たなびかれ 夏はうつせみ なきくらし 秋
 は時雨に そでをかし 冬は霜にぞ せめらるゝ 加ふる佗しき 身
 ながらに つもれるとしを 老るれば いつの六に なりにけり
 これにそはれる わたくしの 老のかずさへ やよければ 多くなりた
 身はいやしくて としたかき ことのくるしさ かくまつゝ ながら
 の橋の ながらへて なのはの浦に たつ浪の なみの志はにや
 おぼれん さすがに命は命はの 命はの 命はの をしければ 越のくになる 志ら山
 の かしらは白く なりぬとも あとはのたきの おとにきく さい
 ら死なずの くすりもが きみの八千代を わかえつゝ見ん

君が世に逢坂山の岩清水こがくれたりと思ひけるかな

忠岑は此の集中にても優れたる歌人なり、さるに其の長歌は猶かくの如し。學者此の中に幾何の詩的感想を包有せりと思ふぞ。全篇九十一句唯、縁語と冠辭とを配合して平凡なる事實を布陳したるに過ぎずといは、或は苛刻に失する恐れあらんかなれども、贊辭を呈するよりも、復に妥當の見ならん。調の『萬葉集』のと異りて五七若しくは七五の亂調となりしは、段落の異常なるにても知らるべし。蓋し此の亂調は五七の古調自然に七五の今様風に變移し行く過渡にある故なるべければ、強ち是を非難すべきにもあらざめれど、五七の長歌體に配列せしものが調の上にも想の上にも斯かる亂調となり行きしは、特に注意を要すべき必要あり。後世古調の長歌全くすたれて今様歌の如き七五の新調のみとなりぬべき前兆は早く是に見えそめたればなり。

さて長歌はかく見るかげもなき有様なりしかども、短歌に至りては措辭の巧妙なると着想の複雑なるとよりして、或は『萬葉集』の歌に優れたるもありぬべし。『古今集』の短歌は文に過ぎず、質に偏せず、花實を兼備せるものなりとは、古來學者の唱

道せる言なるが能く當れる評なり。されば此の集の獨特の長所はいづくにありやと問は、短歌にありと答へんのみ。後世撰集の數は二十に餘れども、歌を詠ずるもの大抵其の模範を此の集に取れりしも、理なるかな。されども此の集にして歌體の遊戯的の文字となるべき傾向のほの見えたるは、我が歌界の弊なるべきか。遊戯的の文字とは何ぞ。短歌は誰れも知る如く、僅々三十一音に過ぎざるにかゝる中に或種の事柄若しくは文字を詠み入れて、其の巧に誇らんとする兆あること、是れなり。實之が、朱雀院の女郎花あはせの時をみなへしといふ五文字を句のかしらに置きてよめる

を倉山みねたちならしなく鹿のへにけん秋を志る人ぞなき

又紀のめのだがさままつびはせをばの名をかくして

いさゝめにかの思時まつまにぞひはへぬる心ばせをば人に見えつゝ見入

のれ
意つ

又僧正聖寶がはをはじめるをはてにてながめをかけて時の歌よめと人のいひければよめる

はなのなか花の多く咲けるめ。目に飽くやとて分け行けば心ぞ共に散りぬべらなる。

此の集の「物名」と題する一部門すべて此の種の歌をもて滿つ右は其の重なるものなり。是等歌謡を一種の藝術としてのみ見る時は其の巧妙驚くべきものありといへども歌謡の詞意を害すること尠少にあらじ然らば其の本義を距ること又益遠しと謂ふべきなり。予輩が是等の歌を指して遊戯的の文字となるべき傾向見えつと云ひしも此の故にぞある。

以上は『古今和歌集』に關する大體の解説なり。予輩は學者の必ず是れによりて此の集の如何なるものなるかを理解したらんと信ず。さるに此の集の序は能く其の編修の由來と性質とを明示するのみならず或は編者が歌を擇べる用意の程をも知らるべく或は歌人の特質をも窺ふに足るべし。故に其の全文を轉載して予輩の見解の足らざるを補綴せん。

やまき歌は人の心を種として萬の言の葉とぞなれりける。世の中にある人亦わざしげきものなれば心におもふことを見るもの聞くものにつけていひ出だせるなり。花

に鳴く鶯、水に棲む蛙の聲をきけば生きとし生けるもの、いづれか歌を詠まざりける。力をも入れずして天地を動かし目に見えぬ鬼神をもあはれさおもはせ男女の中をも和げ、たけき武士の心をも慰むるは歌なり。此の歌天地のひらけは下まりける時よりいで來にけり。まかはあれども世に傳はることは久方の天にしては下照姫には下まり、あらかねの地にしては須佐乃男命よりぞおこりける。千早振る神代には歌の文字も定らず、すなほにしてこそ心のわきがたかりけり。人の世となりては須佐乃男命よりぞ三十字あまりひき文字はよみける。かくてぞ花をめで鳥をうらやみ霞をあはれび露をかなしふ、心言葉多くさま／＼になりけり。遠き所もいでたつ足もさより始まりて年月をわたり高き山も麓のちりひぢよりなりてあま雲たなびくまで、おひのほれるが如くに此の歌もかくのごさくなるべし。浪花津の歌は帝の御は下めなり、あさか山の言の葉は采女のたはむれよりよみて此のふた歌は歌の父母のやうにてぞ手習ふ人のほしめにもまける。抑歌のさま六つなり、からの歌もかくぞあるべき。此の六種のひきつにはそへうた、大鷗鷗のみかごをそへ奉れる歌。

なにはづに咲くやこの花冬ごもり今をはるべきさくやこの花
さいへるなるべし。二つにはかぞへうた

咲く花に思ひつくみのあどきなく身にはたつきの入るもまらすて
さいへるなるべし。三つにはなすらいうた

君にけさあしたの霜のおきていなば戀ひしきこまにきえやわたらむ

さいへるなるべし。四つにはたさへ歌

我が戀はよむともつきとありそ海の濱のまさこはよみつくすとも

さいへるなるべし。五つにはたいこさうた

いつはりのなき世なりせばいかばかり人の首の葉うれしからまし

さいへるなるべし。六つにはいはひうた

この殿はむべもさみけりさきくさのみつはよつはにこのつくりせり

さいへるなるべし。今の世の中いろにつき人の心花になりけるよりあだなるうた、はかなきものみ出でくれば色このみの家に埋木の人まれの事となりてまめなる所には花舞ほに出だすべき事にもあらずなりなり。其の始めを思へばかゝるべくなむあらぬ。古への代々のみかど春の花のあした秋の月の夜毎にさぶらふ人々をめして事につけつゝ歌を奉らしめ給ふ。あるは花を弄ぶてたよりなき所にまごひあるは月を思ふてまるべなき闇にたどれる心々を見給ひてさかしおろかなりさあらしめしけむ。まかあるのみにあらずさざれ石にたさへ筑波山にかけて君を願ひ喜び身にすぎ樂しみ心にあまり富士の煙によそへて人をこひ松虫の音に友を忍び高砂住の江の松もあひおひのやうに覺え男山の昔を思ひいで、女郎女の一時をくれるにも歌をいひてぞ慰めける。又春のあしたに花の散るを見秋の夕暮に木の葉の落つるをき、あるは年毎に鏡の影に見ゆる雲と波とを歎き草の露水の泡を見て我が身を驚き、あるは昨日は榮えおどりて時を失ひ世にわび親しかりしも疎くなり、あるは松山の波をか

け野中の水を汲み秋萩の下葉を詠め曉の鳴のはれがきをぞへ、あるは吳竹のふきふしを人にいひ吉野川をひきて世の中を恨みきつるに今は富士の山も煙たすなり長柄の橋もつくるなと聞く人は歌にのみぞ心をなぐさめける。かの御世や歌の心をまろしめしたりけんかの御時におほきみつのくらぬ榊本の人麻呂なん歌のひとりなりける。これは君も人も身を合せたりと云ふなるべし。秋の夕龍田川に流るゝ紅葉をばみかどの御目に錦と見給ひ春のあした吉野山の櫻は人麻呂が心には雲かこのみなむ覺えける。又山部の赤人といふ人ありけり歌にあやしくたへなりけり。人麻呂は赤人が上に立たん事かたく赤人は人麻呂が下に立たん事かたくなむありける。此の人々をおきて又すぐれたる人も吳竹のよりにきこえ片糸のよりに絶えずぞありける。是れよりさきの歌を集めてなむ萬葉集となづけられたりける。かの御時よりこのかた年は百年あまり世は十つぎになむなりける。こゝにいにしへの事をも歌の心をもまねる人わづかにひざりふたりなりき。まかばあれど、これかれ得たる所得ぬ所たがひになむある。今此の事をいふに官位高き人をばたやすき様なればいれず。其の外に近き世に其の名聞えたる人はすなはち備正通昭は歌のさまは得たれどもまことすくなしたさへば笛にかける女を見て徒らに心を動かすが如し。在原業平は其の心あまりて詞足らす萎める花の色なくて匂ひ残れるが如し。文屋康秀は詞たくみにて其のさま身におほすいはゞ商人のよき衣着たらんが如し。宇治山の喜撰は詞かすかにして、はとめをばりたしかならず、いはゞ秋の月を見るに曉の霞にあへるか如し、

よめる歌おほく聞こえれば彼れ此れを通はしてよく知らず。小野小町は古への衣通
 姫の流れなり、あはれなるやうにて強からず、いはゞよき女のなやめる所あるに似たり、
 つよからぬは女の歌なればなるべし。大友黒主は其のさまいやし、いはゞ新買へる山
 人の花の蔭にやすめるがごとし。此の外の人々其の名聞ゆる野へにおふるかづらの
 延ひ廣ごり林に茂き木の葉の如くに多かれど歌さのみ思ひて其の機まらぬなるべし。
 かゝるに今すべらぎの天の下ふるじめす事四の時九かへりになむなりぬる。あまれき
 御うつぐじみの波八島の外まで流れ廣き御惠の陸筑波山の麓よりまげくおほしま
 して萬の政事をきこしめす暇もろく、の事を捨て給はぬあまりに古の事をも忘れず、
 ふりにし事をも起し給ふとて今も見そなはし後の世にも傳はれきて延喜五年四月十
 八日に大内紀紀友則、御書所、預紀貫之、前甲斐、目凡河内、躬恒、右御門、府生壬生、忠岑らに
 仰せられて萬葉集に入らぬ古き歌、みづからのを奉らしめ給ひてなむそれが中にも
 梅をかざすよりはぞめて郭公を聞き紅葉を折り露を見るに至るまで又鶴龜につけて
 君を思ひ人をも祝ひ秋萩、夏草を見て妻を戀ひ逢坂山に至りてたむけを祈り、あるは春
 夏秋冬にも入らぬ種々の歌をなむ撰ばせ給ひける。すべて千歌二十卷名づけて古今
 和歌集と云ふ。かく此のたび集め撰ばれて山また水のたえず流の眞砂子の數多くつ
 もりぬれば今は明日香川の瀬になるうらみも聞えず、さぐれ石の巖さなるよるこびの
 みぞあるべき。まぐら昔葉は春の花にほひすくなくして空しき名のみ秋の夜の長き
 をかこてれば且は人の耳におそり、かつは歌の心にはち思へど、たなびく露のたらしめ、啼

く鹿の起き伏しは貫之らが此の世におなぐく生れて此の事の時にあへるをなむよる
 こびぬる。人麻呂なくなりたれど歌の事さゞまれりかな。たさひ時うつり事去り
 樂しび悲しび行きかふさも此の歌もし宵柳の糸絶えず松の葉の散り失せすして、まさ
 きのかつら長く傳はり鳥の跡久しく止まらば歌のさまをも知り事のこゝろを得たら
 ん人は大空の月を見るが如くに古を仰ぎて今をこひざらめども。

其二 重要なる歌人

『古今集』に其の名を列ねたる歌人の數は甚た多し故に其等に對して一々精細なる
 批評を試みんは素よりかゝる略史の能くすべきにあらず。されば予輩は其の中
 に就きても特に當代の歌界を代表するに足るべき重要なる歌人のみを探りて略
 評を加へんとす。重要なる歌人とは則ち前にしては在原業平、小野小町、僧正遍正
 等後にしては凡河内躬恒、伊勢紀貫之等を云ふなり。先づ在原業平より始めて次
 第に年序を追うて紀貫之に論及せん。

業平は淳和天皇の御宇天長二年四月一日奈良の舊都に生れき。嵯峨天皇の皇子
 四品彈正尹阿保親王の第五子にして正三位中納言行平の異母弟なり母は桓武天
 皇の皇女伊登内親王なりきとぞ。天長三年に父親王の奏請によりて兄行平と共

に初めて在原朝臣の姓を賜はり人臣の列に降りぬ。嘉祥三年正月從五位下に叙せられ貞觀四年三月從五位上に進み同五年二月左兵衛權佐を拜し後數年を経て左兵衛少將となり尋いで右馬頭に任ぜられ更に從四位下に昇りぬ。元慶元年右近衛權中將となり明年相摸守を兼ね後また美濃權守に轉任し從四位上を授けられき。世に彼れを在五中將と呼べるは在原朝臣の第五子にして中將たりし故なり。業平容姿閑雅美男のきこえ後世にまでも高し壯時は頗る放縱にして操行脩らざりき。或は云ふ當時藤原氏の驕慢甚しかりしより憂憤のあまり此に出でたるものなりと。さればにや放縱なりし中にも常に王室の衰微を憂ふる念と藤原氏の跋扈を惡む心とは絶えず胸中に往來したりと見えて言行に現れたり。業平嘗て歌ひけらく

おもふ事いはでぞたゞに止みぬべき我れにひとしき人しなければ

と万斛の不平鬱結したりしこと想像するに堪へたり。元慶四年五月行年五十六歳にして逝りぬ。

かく業平は一面に世を憤り一面に放縱を事とせし人なりしからに其の詠歌はた二様の方面を具へて優婉妖冶なると悲憤激切なるとありてさながら別人の口より出でしかと思はるゝ趣あり。されども其の詠多くは優柔にして壯絶の感に乏し。餘韻の深きは彼れの歌の常のさまなれども殊に纏綿たる情思を歌へるものには更に一段巧妙なるもの多かり例へば前に掲げたる「思ふ事」の歌の如きも餘韻極めて深けれども

五條のきさいの宮の西の對に住みける人にははいにはあらでものい
ひ渡りけるを睦月の十日あまりになん外へ隠れにける在所は聞け
れどえ物もいはで又の年の春梅の花さかりに月の面白かりける夜
去年を戀ひて彼の西の對にいきて月の傾くまであばらなる板敷に
ふせりてよめる

月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身ひとつはもとの身にして
といへる歌の更に深きには及ぶべくもあらず。蓋し業平性來情熱強盛なりしに豊富なる想像をも併有し加ふるに脩辭の技能にも富めりしかば斯くは言外に餘韻を持たせて而も流麗なるを得たりしものか。故に彼れの歌は押なべて其の意

味深長なるもの多し。

二〇六

渚の院にて櫻を見てよめる

世の中に絶えて櫻のなかりせば春のこゝろはのどけからまし

二條の後の東宮の御息所と申しける時に御屏風に龍田川に紅葉流

れたるかたを書けりけるを題にてよめる

ちはやぶる神代もきかず龍田川からくれなゐに水くゝるとは

是等は其の中の最も上乘なるものゝみを擧げたるなれば勿論さるべき筈なれども管に表面に見えたるよりも裏面に深き意味を含有して妙趣云ふべからざるを覺ゆ。まかのみならず聲調はたよく其の質に合ひて流麗なり。さはれ業平の歌は其の短處もまた此の餘韻深き邊に存せり則ち意餘りありて詞足らざるが故に詠歌せる事情を知悉してのち迎へて解するにあらずば其の歌の本旨を會得まがたきものゝある事是れなり。かゝるはすべて我か短歌の大方通有せる欠點なりと雖も業平の歌の如き只管意味を深からしめんと努めたる者には格別多き次第にてもありしなるべし。さて又彼れの歌の往々纖巧に失し浮靡に流れたる觀あ

るも一の弊と見るべからん。彼れの歌には元來自然を詠せるにも人事を歌へるにも同情の感を抒べたるもの多きに拘はらずかゝる弊を免れざりしは道念堅固ならず情操はた高潔ならずりし當代の影響を享けたるに依るなるべし。則ち浮靡といひ纖巧といふも一般に當時の社會を風靡したる氣風に過ぎざりしを以て業平の詠歌の其の風ありしは當然の現象といはんのみ又やがて來るべき文學の狀況を豫告せるものとも謂ひつべし。されば其の頃有名なりし小野小町の如き殊に纖弱優婉の姿を帯び想はた艶妖浮靡の致を具ふ。小町歌ひけらく

題をらす

色みえでうつらふ物は世の中の人心の花にぞありける

女屋康秀が參河の掾になりて縣見には得出で立たじやと云ひやれ

りける返事に詠める

わびぬれば身を浮草の根を絶えてさそふ水あらばいなんとぞおもふ

題をらす

花の色は移りにけりないたづらに我が身世にふるながめせしまに

右は僅に一斑を示さしに過ぎざれども姿思共に柔和の趣あること想像せられなん。かく柔和の態嬌々としてよき女の惱める所あるに似たりしこと一には「つよからぬ女の歌なれば」とてさる理もありけんかし、さはれ女性の詠すら猶一般に率直雄偉の風を帯べりし奈良朝時代のに比して差異の度如何ばかりぞ。彼の時代にありても其の末葉にかけては既に稍當代の特質を離れて纖巧なるも稀には見えきと雖も是等に較すれば其の間一大溝渠を越えたる感あり。

小町の閨歴は傳説まち／＼にして詳ならず或は參議小野篁の孫なりといひ或は小野良實の娘なりともいへり。彼の在五中將との艶聞は勿論謠曲雜劇等又さまざまの俗説を傳ふれども孰れも作話めくものゝみにて信を措きがたし。されども文屋康秀僧正遍昭等と時代の同かりしことは贈答の歌遺れるにて明白なり。又後世我が國にて美人としいへば必ず指を衣通姫か、さらば小町に屈するにても美人をもて有名なりしを證すべし。歌人として名高きは六歌仙の一人に數へられ『古今』『後撰』等の諸歌集に其の詠歌の數多出でたるを見ても知られなん。其の生死の年月素より知るべからず。

僧正遍昭は良峰安世の子なり俗名を宗貞といひき。遍昭風仁明天皇の殊遇を蒙り承和五年に従五位下左兵衛佐に任せられ同十三年に備前介兼左近衛少將に進みぬ良將の譽高かりし人なり。嘉祥三年天皇崩御あらせられしより塵世を脱する志ありしが深草山に葬られける夜遂に妻子を捨て、比叡の山に登りて僧となりぬ。僧名を遍昭と號せり。其の後雲林院に住みまた元慶寺の座主となりき。其の寺花山の地にありければ當時の人彼れを花山の僧正と呼び又單に良僧正とも呼びたりとかや。遍昭在俗の時は丰姿端麗容儀閑雅にして美貌宮中に冠たりしも好色の行爲少く戀歌の如きも只一時の戯作に出で、眞實其の事ありしにはあらずといふ。

かゝれば其の詠せる歌も佛門に歸しての後は勿論在俗の頃詠せしものにて何處となく瀟洒の風ありて業平小町等の婉約なりしには似るべくもあらず。彼の『小倉百人一首』に載りて誰れも知れる

五節の舞姫を見てよめる

あまつ風雲のかよひぢ吹きとぢよ乙女のすがたまばしといめん

といへるは殿上の節會に窈窕たる舞姫の姿容を嘆美せるものなれども洒然たる高潔の念隠然蘊蓄するを見る。其の他も概してはかゝる傾向を有す、さるにかゝる傾向は當世の濃密なる氣風と反せるを以て讀者の見方によりては或は貫之が云へる如く「まこと少しとも思はるゝことあらん。削髮してのちは殊に道念堅固に行ひしため光孝天皇其の高徳を賞せらるゝ餘り仁和二年禁中の仁壽殿に七十の賀を賜はりし程なれば詠せる歌も當時の世にありては珍らしきまで流俗を離れたるものあり。

題まらざ

末の露もどのまづくや世の中のおくれ先だつためしなるらん

三月ばかりの花の盛に道まかりけるに

折りとれば手ぶさに穢る立てながら三世の佛にはなたてまつる

蓮の露を見てよめる

はちす葉のにごりにままぬ心もて何かは露を玉とあざむく

其の詠概ね此の如し。措辭に至りてはさすがの暹昭も當代の風をば脱離するを

得ざりけん奇巧なるさままたるも稀に見えたり。

又是等の人々と殆ど時を同じうして世に出でたる歌人尙數多ありしよしは既に述べたり。されば名歌の賞すべきものはた勢からざりき。今其の中より俊秀なるもの一二を擧げて大要を示さん

題まらざ

在原行平

春のきるかすみの衣ぬきをうすみ山風にこそみだるべらなれ

三條の東宮の御息所ときこえける時正月三日御前に召して仰せこ

とある間に日は照りながら雪の頭に降りかゝりけるをよませ給ひ

ける

女屋康秀

春の日のひかりにあたる我れなれどかしらの雪となるぞわびしき

題まらざ

大友黒主

春さめのふるは涙かさくら花ちるを惜まぬ人しなれば

題まらざ

喜撰法師

わが庵はみやこのたつみ鹿ぞすむ世をうじ山と人はいふなり

是等は最も高名なる歌人の傑作ともいふべきものなり。詠者異なるに随ひて多少其の風姿を異にすといへどもわざ／＼論述すべき程にあらざ且上に品評したる三家に比しても設令ひ優劣はあるにもせよさまで異様なるものとは見えず想の上にしても大抵通常の歌人が口にすべしと思はるゝかぎりを抒べたるに過ぎざれば是れはた兎や角云ふに及ばじ。さるに寛平延喜の前後に輩出したる歌人に至りては稍、獨特の妙處を有せりしものもありき例へば藤原敏行の歌が雅びたる想の中に一種の趣味を具へたるは

是貞の親王（ミコノミカド）の家の歌合によめる

白露の色はひとつを如何にして秋の木の葉を千々に染むらん

何人かきてぬぎぬけし藤ばかりかま來る秋ごとに野邊に匂はす

等の歌にてもまろく索性法師が熱誠物に感じ易き狀は

櫻の花の散り待りけるを見て詠みける

花散らす風のやどりは誰れか知る我れに教へよ行きて恨みん

題をらず

はかなくも夢にも人を見つる夜はあしたの床ぞ起きうかりける
等にて知るべし。また紀友則が歌の雅趣妙想に富めるは

櫻の花の散るを詠める

ひさ方のひかりのどけき春の日にまづ心なく花の散るらん

雪の降れるを見てよめる

雪ふれば木ごと花ぞ咲きにける何れを梅とわきて折らまし

等にて卜知するを得ん。さはいへども是等とても唯大跡の傾向を示すに止まりて詳細なる替查を行はし勿論さらぬさまなるもありぬべし。想の上に就きても彼の雪を花に見立て祝賀を松に寄するなど異るところは僅に配する事物乃至措辭の上にあるのみ。ことに漏れたる歌人にしても大方は之れらに類す稍異采ありきと思惟せらるゝは凡河内躬恒、伊勢紀貫之等數人に止まれり。聊か之れが論評を試みん。

凡河内躬恒は父祖つまびらかならず宗祇法師の説には行氏（ユキノ）の孫繼利の子なるべしといへども又一説には良高の子なるべしとも云へり。寛平六年二月甲斐權少

目となりしが延喜七年正月御厨子所に候し後丹波權大目を経て同廿二年正月和泉權掾となり尋いで又大掾となり從六位を授けられき。生死の年月定かならず芳賀矢一氏編纂の『文學者年表』には紀元云一五一九—一五六七と見え、たれども其れに附く未詳に芳賀矢一氏編纂の『文學者年表』には紀元云一五一九—一五六七と見え、たれども其れに附く未詳

躬恒は和歌に勘能の聞と高かりければ醍醐天皇召して紀貫之等と共に『古今和歌集』を撰せしめられし事前に去へり。『大鏡』に躬恒が歌に秀でられし事を記して「延喜の御時に御あそびありし夜御前の橋のもとに躬恒を召して月を弓張月といふ心は何の心ぞ是れがよし仕うまつれど仰せありしかば（中略）てる月を弓張月といふことは山へを指していればなりけり」と申したるをいみじう感ぜさせ給ひて大うちぎ給ひて肩に打かくるまゝに

えら雲のこの肩にしもをりあるは天つ風こそ吹きてきぬらし
いみじかりしものかなさばかりの者を近う召しよせて勅祿給はるべき事ならぬ
と誹り申す人のなきも君のおもくちはしまじ又躬恒が和歌の道の世にゆるされ
たるところを思ひ給へしかと見ゆ。二首もと一時の頓作名歌と稱するに足らずと

雖も當代の名匠たりし事は此の記事にても明瞭なり。さるに又鴨長明の『無名抄』にも「三條の大相國非違（檢非）の別當と聞こをける時三條の帥と二人の人躬恒貫之が劣優を論ぜられけりかたみにさまゝの詞を悉くして争はれければ更（下）に言（下）るべくもあらざりければ帥いぶかしく思ひて（中略）（俊賴に）語られければ俊賴聞きて度々打ちなづきて躬恒をばなあなづらせ給ひそ」と云はれしこと見えたり。おもふに是は二人が伯仲の間にある事をほめかせるにてやがて又躬恒の歌に秀でたる事を證明せるものと謂ふべし。

其の詠は想像を以て優るよりも寧ろ見聞きたる事情に其の折りよとの感を添へて言表きたるもの多し。故に稀には一見詩致に乏しき観あるものなきにあらざるも其の中に一種の重みありて讀誦諷詠の際何となき妙味を覺えしむ。是れ一には聲調の能く整ひたるに依るべしと雖も情熱の言裡に籠りたるぞ猶一段此の妙あらしむる所以なるべき。例へば

題を知らず

吉野川よしや人こそつらからめはやくいひてしことは忘れじ

古歌なが月のつごも女の日よめる。道知はばたづねても行かんもみぢ葉を幣と手向けて秋は往にけり

櫻の花の咲けりけるを見に詣うできたりける人によみて贈りける

わが宿の花見がでらにくる人は散りなんのちぞ戀しかるべき

の如き孰れも各首の中に言表せられたる感想は簡單なるものなるに却りて業平

等の歌の意味複雑なるよりも感深き心地す。彼方は意味複雑なれども奇巧に失

するがために人を動かす力に乏しく此方は感想簡單なれども自然なるを以て同

情を惹き易きによるならん。されば單に山川草木等を見たるながらに詠せる歌

にもまた

月夜に梅の花を折りて人のいひければをるとてよめる

月夜にはそれをも見えず梅の花香を尋ねてぞ知るべかりける

白菊の花を見て詠める

心あてに折らばやをらん初志ものおきまどはせる白菊の花

等韵致に富むもの其の例いと多かり。其の他措辭の上に奇巧を構へて縁語を亂

用せる又は想の邊に諧謔を旨とせる俳諧歌の如きものあるも唯時世の然らしめ

たるもの彼れの長所にあらず。要するに躬恒の歌は大跡につきてを平易に云は

ば實情を素直に抒べて力あるものとも謂ひつべし。伊勢が作に至りては少しく

之れと異なるところあり。

伊勢は藤原繼蔭の女なりき生誕の年月今は知られず光孝天皇の朝なる仁和の頃

既に宮中に奉仕したるよし逝りしは朱雀天皇の天慶二年なりきとぞ。伊勢と呼

ばれしは父繼蔭伊勢守たりし故にやあらん。宇多天皇の御宇七條皇后に近侍せ

しが後天皇に召されて皇子桂宮と申すを生み奉りぬ。是れより世の人尊びて伊

勢の御または伊勢の御息所とも呼べり。天皇御禪位のしちは世を憂くおもひて

五條のあたりは閑靜なる家を求めて只管風雅に志しけるが晩年は淋しく暮らし

けるどなり。

伊勢は頗る和歌の道に長じぬ延喜の歌人としいへば伊勢貫之と並べ擧ぐるにて

も知られなん。其の歌また押なへては情を以て優れり躬恒に比べて華麗なるは

流石に女性なりし故にやあらん。

新水の邊に梅の花の咲けりけるを詠める

春ごとに流るる川を花と見て折られぬ水に袖やぬれなん
 春のあひにわひて物おもふ頃の我が袖にやどる月さへぬる顔なる
 年漸く老境に近づき其の身また昔の榮華を夢むるところとなりては其の聲次第に
 悲哀の調を交ふるに至りぬ。例せば

あすか川淵にもあらぬ我が宿も瀬にかはり行く物にぞありける
 といはるは現世に於ける無常の感を歌ふるもの又
 女郎花を折りて硯の上に置きけるを見て
 女郎花見るに心はなぐさまでいとむかしの春ぞ戀ひしき
 と詠ざるは今の境遇の見るかげなきを悲む餘り曠昔の榮華を追慕せるにやあら

ん。それ佛説的哀感を歌へるは殆ど當時の歌人の常にして只一時の失望若しは
 落膽の場合にも尙針小棒大に絶叫悲鳴することありきといへども伊勢が晩年の

境遇には心から斯く感ぜしめたる事情もありけんかし。さるからに其の一代の
 詠歌を通観すればさながら嬋妍なる麗女の年老ゆるに随ひて色のうつろひ行く
 らんさまにも似たり姿は勿論心さへ何時とはなしにさびれつゝ活氣は次第に失
 せて沈重の風其の跡を襲ひぬ。さはれ予輩は伊勢の詠歌を評するに當りて精細
 に其の作の年代を追ふこと能はざるを遺憾とす。前掲二首の詠の如きも正確に
 は何時の作と知るべからぬを序詞と歌思とを見て晩年に屬すべきものと見立て
 たるのみ。歌の姿は言詞よく整ひて苦作の跡、奇巧の僻もなくいはし新柳の東風
 に飄るか如く意暢び素直にして多少華やかなるところあるが此の人の特長なる
 べし。中大
 されば躬恒を以て伊勢に比す彼れと是れとの差異は句の力あると力なきと姿の
 稍質なると稍文なると之れあるのみ而も是は兩極の端をとりて比したる見、多數
 の歌の中には全く此の反對の相あるもありぬべし。若しそれ想の情熱に富みて
 浮靡に流れざるは二者とも同じく寧ろ業平小町等と異なる所なり。此の頃、更に能
 く是等の長所を兼備して優に當時の詩壇に將星の名を博せるを紀、貫之とす。

貫之は陽成天皇の朝元慶六年に生れき父を望行といひ祖父を長谷雄といひぬ。父望行は和歌を以て世に聞こえ祖父長谷雄は詩文を以て其の名高かりき。貫之が後年和歌に巧にして兼ねて文章に妙を得たりしも一には父祖の教育又遺傳の影響に依れるものならん。延喜中御書所預越前權少掾内膳典膳少内記等の諸官を経て大内記に轉じ從五位下に叙せられ又加賀並びに美濃介等に任せられき。延長中大監物右京亮等を拜し尋いで土佐守となり承平中任滿ちて京に歸へりぬ。天慶中玄蕃頭となり從五位上に進み又木工權頭に遷り從四位下に叙せられたり。其の九年といふに逝りぬ。延喜五年四月勅を奉じて友則躬恒忠岑と共に『古今和歌集』を撰ぜるよしは既に讀者の知了せらる所ならん。此の外貫之の撰せる書に『萬葉鈔』『新撰和歌集』『土佐日記』等あり『新撰和歌集』は醍醐天皇の勅を承けて撰修せるものなりしが書成りて未だ進めざるに天皇崩せられしかば其のまゝに留め置かれしもの『土佐日記』は貫之が土佐守の任滿ちて京に歸れる時の紀行なりといふ。貫之は漢學に通じ併せて治民の術將帥の才にも長ぜられし事古書に見えたり。さはれ女壇に於ける功勞の偉大なりし事はなとか彼等と同日に歸り得べき。

き。散文に假名文の一體を創始して將來に於ける斯文の發達を導き歌謡に『古今集』の編纂を擔當して既往幾十年の衰微を興し、は共に千古の偉業にあらずや。况や其の詠せる歌數百首は皆に後人の嘆美を博せしのみならず永く摸範として欣仰せられしものをや。散文の事は後に云ふべし歌謡に就きてを論評せん。貫之の歌は『古今集』に載れるもの百首あり特に勅命を蒙りて編入せられたるものよし其の他『後撰』以下の歌集にも許多見えたり。別に『貫之家集』と名つくるもの自家全體の詠を蒐録す則ち上の諸集に見えたるは勿論尙他の數百首を網羅せり。『古今集』に出でたる歌は自撰に係るをもて秀逸なるものゝ多かるは云ふまでもあらじ。さはれ貫之が彼の集を撰進せるは年まさ廿四の頃なれば其の後尙四十年間も生存したるもの如何に早才なりきとするも其の後の作に秀逸なるものなからずやは。予輩は『古今集』に載れるもの以外の作に就きて孰れを其の後の作に係れりとは確知するを得ざれども實に彼の集の歌にも優りて妙なるものありと信ず。されども予輩は此にかく管々しき詮索を行ふこと能はざるが故に姑く『古今集』に載れる歌を主として其の家集をも參照しつゝ其の特質のあるところを

窺ふべし。

古來謂ふ貫之は人麻呂以來和歌の名人なりと、現に藤原公任卿の撰なる『三十六人歌合』にも歌仙中人麻呂に對して左の第一位を占むるは貫之なりき。貫之は洵にさるべき名人なりしか。予輩は先に躬恒の歌に就きて彼れの歌は想像よりも寧ろ實情を寫せるからに一見詩致に乏しき觀あるも押しなべて情熱に富むを以て人を感動せしむる妙力ありと云ひにき。貫之の歌も實情を寫せる又は情熱に富めることは躬恒に異ることなし唯想像の一點はやゝ彼れに優るものありしが如くさる歌も拙からず。さはいへど其の詠全粹に就きていはゞ想像の豊富を以てよりも尙實情を抒べたる邊に於いて優なりと謂ふべし。かるが故に貫之の歌には自然の風光又は人事に對して同情を表せるもの多し而して其の同情を表するや躬恒が常に直覺を以てするものを此方にては考察により然する傾あり隨うて其の弊は時に理に奔らんとすることあるを免れず。實例に就きて之れを證せん。

紀友則がみまかりにける時よめる

明日まらぬわが身と思へど暮れぬ間の今日は人こそ悲しかりけれ

の如きげに人の真情なり實感なり則ち何人も他の死を見ては明日まらぬ我が身と思へども悲歎の涙に暮ること常なり。貫之はかゝる實際の感想を其のまゝに詠嘆するものなれば真情の充溢することは素よりなれども多少其の中には理窟めきたるところあるにあらずや。更に一層理に近かしと思はるゝは

亭子院の歌合に

櫻ちる木の下風はさむからで空に知られぬ雪ぞふりける

といへる如き是れなり。予輩は實に爛熳たる櫻花の開落を見ては雪と思ひ雲とまがふ事あり貫之の此の歌も則ち櫻花を雪と見立てたる想像より發せし詠なれども雪と木の下風の寒からぬよしとを配合せる間には理窟めきたる感なくばあらず。是を以て貫之の詠には想像を主とせるものにも亦多くは

延喜の御時歌合よける

春かすみ棚引きにけりひさ方の月のかつらも花や咲くらん

歌奉れど仰せられし時によみて奉れる

櫻花咲きにけらしなあしびきの山のかひより見ゆるまら雲

などの如く何處にか多少の理窟を包藏せざるものすくなしされば想像の荒唐感情の愚痴に陥ることなきはあつからなる結果なるべし。さもあらばあれ予輩は貫之の歌を以て詩致に乏しきものとなすにあらず。彼の流麗和諧せる詞藻の妙はあつからぬ唱の中に趣味を覺えしめ彼の真率なる實情は常に誦者の同感を誘ひて不識の間に其の詩致を認めしむ。况や彼れの歌は其の格調の變化自在なるものあるに於いてをや。

八月駒迎

逢坂の關の清水にかげ見えて今や引くらんもち月の駒
 優美なる中に雄渾なる意氣の見えたるさながら勇士の緋威の鎧着て櫻花の下に
 佇むに似たり。是は其の一例に過ぎざれども大貳高遠が

おふ坂の關の岩かど踏みならし山立ちいづる霧原の駒

といへる歌(名歌なるには)の東蝦夷アムエシの膝節叩いて怒れる如き雄壯一片なるさまに

比して變化の妙更に幾何ぞ。想ふに格調の流麗にして變化に富むは彼れが後世の嘆美を博せし一因にあらざるか。彼れの歌は一氣呵成の作と思はるゝは却く

苦意刻思の餘り成れるが多し。其の詠歌の往々考察理窟に偏せんとするは此の故にや而も其の詞藻の巧妙なる能く苦作の痕跡を没了して見えしむることなし。貫之が『古今集』の序に『花に鳴く鶯水にすむ蛙の聲を聞けば生きとしいけるもの孰れか歌をよまさりける』とあるを見て貫之の詠に人巧の加はるもの少く自然なるべしと思ふは却りて彼れの苦心を無視する僻事ヒキゴトなるべし。

其の歌の人心を惹くに足るべきこと右の如し然れども一層世の人をして仰慕せしめし所以は彼れの『古今集』を撰せしと是れなり。此の集は勿論醍醐天皇の御意に出で且貫之一人の撰にあらずと雖も予輩は彼れの功に重きを置かずばあらず。見よ彼れの此の集に盡せる心勞の程を醍醐天皇の特旨を以て彼れの詠百首を編入せしめ給ひしも一は其の功の多きを賞せしなるべし。『萬葉集』出で、百餘年歌道將に廢れんとするに臨み銳意此の舉に従ひつる熱心賞すべきものならずや。又『古今集』中一首も醍醐天皇の御製を撰し奉ることなかりしは天皇のふかく詠歌に巧ならざりしにもよるらめど其の間注意すべきべきことなからずや。或は云ふ貫之は極めて氣慨ある人一意斯の道を思ふのいたすところとげにさもあり

けんかし。土佐守として功績ありしは『土佐日記』に見えられどさまではとて略しつ。

其の子時文も和歌を能くし能書の聞こえあり『後撰集』の撰者の一人たりき。娘の内侍も鶯宿梅の和歌さては『六帖』の作に其の名を傳へて其のほまれ今に高し。

其の三 『古今集』以後歴代の勅撰歌集

『古今集』の撰進せられて後四十六年を経て村上天皇の天曆五年十月に至り新に成れる歌集を『後撰和歌集』といふ源順、大中臣能宣、清原元輔、紀時文、坂上望城等五人を禁中の梨壺、昭陽舎に召されて『萬葉集』の訓點を考覈せしめ給ひし序に撰ばしめ給ひたるなり。『後撰集』と名づけられたる所以は『古今』に入らぬ歌を昔のも今のも撰ぜさせ給ひ後に撰ずとて名づけたる者なるよし『榮花物語』に見えたり。されば此の集主としては『古今』以後の歌を載するものから尙上代に溯りて古歌を採れるも多かり。卷の数は總じて二十部門の類別大方『古今集』になじ唯異なるは物名、長歌、旋頭歌、俳諧歌、大歌所等の數項を缺ける點あるのみ。これ摸範を彼の集にとりて撰ぜる故にやあらん。此の集以下の撰集はた是等と大同小異なり。集中の主

なる歌人は『古今集』に見えたる俊秀なる歌人を除かば他に其の名を擧げて云ふべき程のもの殆どなし。されば隨うて此の歌集の特色として見るべきものも亦無き筈なれども撰者の用意さすがに異なるからにものづから他の集とまがふべからざるものあり則ち此の集は歌の姿よりも心を先とせるが如き風あること是れなり。故を以て其の歌『古今集』の風姿風情共に兼ね備はれるに比しては劣れること云ふを要せず。鴨長明の『無名抄』に曰はく『古今』の時花實共に備はりて其のさまざまち／＼に分れたり『後撰』には宜しき歌『古今』に取りつくされて後幾程も經ざりければ歌得がたくて姿を擇ばずして心をさきとせりと。又阿佛尼が『夜の鶴』にも曰はく『後撰』にはやさしき歌多く又みだりがはしき歌も多く交りたり梨壺の五人心々やかはりはんと。實に此の集の歌の撰擇の亂雜なるは戀若しは雜の歌と見ゆるが四季の内に入りたる又歌の序次、古歌の詠者を違へたるなどを見ても知るべし。老かのみならず詞書などにもみだりなるふし多くして其を以ては歌の意を求むるに往々心得がたき事ありとは世の定論なり。さはいへども斯くみだりなる中にも『古今』の歌にもをさ／＼劣らぬ名歌も許多交りてぞ見ゆめる。故に大體こそ

は彼の集に劣りても見ゆれ彼此の集に同じき歌人さては同じき歌の多かるにても推測せらるゝ如く其中の或歌をとり出で、彼の集に比べんに如何でさばかり劣りてんや。此の集の頃にも尙その折りくゝの景物に對して心に感じたるまゝを詠ぜるが多かりしを以て縱令ひ詞姿聲調にはまゝ惡しきもあるにせよ大方真情流露の趣ありて人心を感動せしむるもの尠からず。

月の面白かりける夜花を見て

源 信 明

あたら夜の月と花とを同じくは心忘れらん人に見せばや

八月十五夜

藤原雅正

いつとても月見ぬ秋はなきものをわきて今宵の珍らしきかな

人の許より歸りて遣はしける

貫 之

あかつきのなからましかば白露のおきてわびしき別れせましや

かへし

讀人志らず

あきて行く人の心を去ら露のわれこそ先づは思ひきえぬれ

事いできて後に京極御息所につかはしける

元良親王

佗びぬれば今はたおなじ難波なるみをつくしても逢はんぞおもふ

『後撰和歌集』はかくの如く姿よりも心のまさりたる歌多し故を以て韻致あるものなきにあらざと雖も次に成りたる『拾遺和歌集』は全く之れに反し大方意義明白に文字の上に露れて搖曳の致を缺けり。されば又『無名抄』にも此の集の歌評をもつて『拾遺』の頃より其の舛殊の外ちかくなりてとわり隈なくあらはれ姿すなほなるをよしとすと云はれき。されども此の集の歌は必ずしも彼の集に劣れりと云ふべからず彼れに一長あれば是れにも一長あり彼れの韻致あるは是れの流麗なるを以て償ふべく此の韻致乏しきは彼の風姿あしきに對すべし。『古今集』に比べて風姿風情の及はざるところ多きは二集共におなじ。

此の集は一條天皇の長徳年中大納言藤原公任卿の撰せりとも或は花山法皇の御撰なりとも云へり。則ち『後撰和歌集』序には『花山の法皇はさきの二つの集』古今後撰に入らざる歌を採り給ひて『拾遺集』と名つけ給へりとありて花山法皇の御撰なる由をいひ『新古今集』の序には『延喜の聖の御代には四人に勅して『古今集』を撰はしめ天曆のかしこき帝は五人に仰せて『後撰集』を集めしめ給へり。その後『拾遺』『後撰和歌集』

『金葉』『詞華』『千載』等の集は皆一人之れをうけたまはれる故に聞きもらし見及ばぬ所もあるべしと見えて誰れとは明示せぬと臣下の一人うけたまはりて撰せるよしをほのめかしぬ。かゝれば『八雲御抄』にも有説々未決と記させ給へりしが如く何れ當れるにかあらん。されども花山法皇の御撰に別に『拾遺抄』と名づけられたる十卷の書ありし由『袋草子』に見えたるにて考ふれば偶其の題號の類似せるより此の集をば花山法皇の御撰なりと誤りたるにはあらじか眞淵翁なども公任卿の撰なりといふ説に従はれたり。此の集撰ばれしは『後撰集』よりまだ幾程も經ざりしかば其の撰擇精からず玉石混淆の趣ありても而も『萬葉集』の歌を讀みあやまり古歌の詠者を違へしなど『後撰』にもまして枚擧すべからず。此の集に載せられたる歌の評は略前に其の大要を述べたれども尙數首を掲げて參考の料とせん。

冷泉院御屏風の繪に梅の花ある家に客來たる所

平 兼盛

わがやどの梅の立ち枝や見えつらむ思の外に君の來ませる

屏風に八月十五夜池ある家に人遊びたる所

源 順

水の面にてる月なみを數ふれば今宵ぞ秋の最中なりける

顯しらす

大中臣能宣

紅葉せぬときはの山は吹く風の音にや秋をきゝわたるらん

藤原爲頼

おぼつかないづこなるらむ虫の音ぞ尋ねば草の露やみだれん

元 輔

清慎公五十賀し侍りける時の屏風に

青柳のみどりの糸を繰りかへしいくらばかりの春を經ぬらん

『古今』『後撰』の二集に此の『拾遺集』を加へて之れを『三代和歌集』といふ後世歌をよむものにて重寶とせり。その初めは『萬葉』『古今』『後撰』の三集を『三代集』と呼びけるが此の集成りての後かく改めたるなりといふ。おもふに華實兼備せる『古今集』は勿論質を以て優れる『後撰集』文によりて名高き『拾遺集』は孰れも一の特長を有せるからに歌躰變遷ありしのちまでも永き世の撰範なりけるにこそ。『後撰』と『拾遺』とは世を隔だつること凡そ四十年此の集に載れる歌人は『古今』『後撰』に見えたるものゝ外重なるは『後撰』の撰者と赤染衛門等數人に過ぎず。

『後拾遺集』は白河天皇の應徳三年九月中納言藤原通俊卿の撰進せられしところなり。是れより先通俊卿は承保二年九月此の集撰すべき旨勅命を蒙れりといへども公務まげきに妨げられて果ざりしが九年を経て漸く成功せるものなりと其の序文に見えたり。されば此の集は『拾遺集』より十餘年を経て撰ぜられたるなり。撰者通俊は小野宮左大臣實頼公の末裔にして従二位權中納言治部卿たりき。彼れ全く歌道の心得なき人にはあらずしかど當時源經信卿とて殊の外名人の聞こえあるものありしを措きて此の集を撰ばれしかば世の誹謗は人の上のみならず集の上にも及びけるとなん。

此の集撰ばれてのち四十年にして『金葉和歌集』の撰ありき崇徳天皇の天治元年白河法皇の院宣を以て前木工頭源俊頼朝臣一人にて撰せるところなり。俊頼勅命を承りて三たび稿を更へ初めて裁可を得たりき。此の時第一巻のみ草案のまゝにて先づ試奏せられしに太く御意に協ひて其のまゝ留め置かれしかば今世間に流布するは其の巻のみ第二回目の稿本なりといふ。

『後世編』むさし野の草の巻に曰はく俊頼の君金葉集撰びて奉りたりけるに、はしめに貫

之春たつ事を春日野のさいふ歌其の次に覺雅法師とて入給ひけるを貫之もめでたし
さいひながら『三代集』にもれ来てあまりふりたり。覺雅法師もげにさもつゞきおほえ
ずさ仰せられければ古き上手ども入るまおかりけり。又いさしもなく思し召す人の
ぞくべかりけりさて、おほえの人のみいれて次の度奉りければ是れもげにさも覺え
ずさ仰せられければ又つくり直して源重之はしめに入りたるをぞ留めさせ給ひける
は、かくれて世にひるまらで中たびのが世には散れるなるべしと

其れより又二十年ばかりを経て近衛天皇の仁平年中藤原顯輔『詞華集』を奉りぬ。顯輔天養二年崇徳院御讓位の後勅を承りて撰録に従事せられしが此の年はじめて成りて奏上せるなり。院御覽の後返へし給はりて御製少々、藤範綱、頼保、盛經等の歌を除き給へりまよし。まかるに顯輔の子清輔彼の奏覽の、ち崇徳院の御使として此の集を持参またる時父に申して古歌あまた入りたるをも除かれきといふ。

『千載集』は又それより四十二年を経て後鳥羽天皇文治三年藤原俊成卿後白河法皇の院宣によりて撰び奉りぬ。此の集は『後拾遺集』に撰び残されたる歌、かみは一條天皇の御宇正暦の頃より下文治に至るまで大凡二百年間の歌を網羅せり。

此の集の序に曰はく『後拾遺集』に撰び残されたる歌のみ正暦のころほひより下文治の
今に至るまでの倭歌を撰び奉るべき仰せごさなんありける。彼の御時よりこの方年
は二百あまりに及び世はさつきあまり七世になんなりける。過ぎにし方も年ひさ
しく今行くさきもはるかにさゝまらんため此の集を名づけて『千載和歌集』といふ。か
の『後拾遺集』の後同く勅撰に准へて撰べるさころ『金葉』『詞花』の二つの集あり然れども
部類ひろからず歌の數少くして残れる歌多し。その外今の世までの歌をさり擇べる
ならし。

さて此等の歌集は孰れも前に出でたる歌集を模範として作れるものから其の歌
の風は次第に古調を放れて繊細卑俗に陥り自然に遠さかりて人巧やうやく加は
りぬ。その中にも『後拾遺集』は載せたる歌人に大中臣能宣、源順、清原元輔等を初め
とし藤原公任、源經信、藤原範長、能因、良暹の二法師さては赤染衛門、紫式部、和泉式部、
清少納言、相摸、大貳三位等の名人許多あれば随うて秀逸なる歌なきにあらず。さ
れど撰者の識見の低かりしと時俗の然らしめたるによりて其の歌流麗快暢の
姿あるには似て幽玄の致を欠き輕浮なるもの多し。

早苗をよめる

曾根好忠

みたやもり田守社けふはさ月になりけりいそげやさ苗老いも社すれ

宇治前太政大臣家に三十講の後歌合し侍りけるに五月雨をよめる

相摸

五月雨はみづのみ牧のま菰草蒔りほすひまもあらじと思ふ

題をらざ

能因法師

ひとへなる蟬の羽衣夏は猶うすしといへどあつくぞありける

の如きは其の好例となすに足る。されば當時の人も之れを後拾遺體と呼びて排
斥せしむ。『金葉』『詞花』の二集に至りては後拾遺體の卑俗淺近を嫌ひ稍古躰
の高調を慕ひしも猶全く繊細巧緻の風を脱すること能はず只管其の詞姿の面白
からんを求めしからに其の歌の俳諧歌めきたるも見ゆめり。例へば

侍郭公といへる事をよませ給へる

院崇御製

郭公まつにかゝりてあかすかな藤の花とや人は見るらん

郁芳門院根合にあやめを詠める

藤原孝善

菖蒲草ひく手もたゆく長き根のいかであさかの沼に生ひけん

京極前太政大臣家の歌合によめる

源頼綱朝臣

秋の夜の月に心のひまぞなき出づるをまつと入るを惜むとの如し巧に縁語を用ひ句を列ねたるも中に真情の籠ることなきを以て其の云ふところ輕浮に流れて或は諧謔の聲とも聞かるべく或は理屈の語とも思はるべし。且たま〜ありと見ゆる想像の如きも散漫若しは荒唐なる殆ど妄想と別かつべからざるものあり。さもあらばあれ『金葉』『詞花』の二集必ずしもすべてかゝる輕浮若しくは妄想の風を帶ぶるにあらざ中には

新院の御前にて花契週年といへる事をよめる 藤原顯輔朝臣

萬代に見るべき花の色なれど今日のにはひをいつか忘れん

源師俊朝臣

けふくれぬ明日も来てみむ櫻花こゝろして吹け春の山風

水邊納涼といへることを 藤原家經

風吹けば川邊す〜しくよる波の立ちかへるべき心地こそせぬ

月のあか〜りける夜まうで來たりける男のたちながらかへりにければ朝アサにいひ遣しける 和泉式部

泪さへいでにしかたを詠めつゝ心にもあらぬ月を見しかな

家に歌合志侍りけるによめる 在京太夫顯輔

夜もすがら富士の高嶺にくもきえて清見が關にすめる月かげの如き熱あり涙あるもの、さては眞率掬すべきもの自然の景致を繪の如く描寫して神韵の縹渺たるものも見えたり。阿佛尼の『夜の鶴』に『金葉』『詞花』などは歌の姿かはりて一ふしをかききころある歌多く侍り今めきたるがちに候ふやらんとあるは大躰より二集を見たる評としては至適の言なりと謂ふべし。『千載集』の歌にありても大かたは之れに似たり、さはいへ此の集の撰者藤原俊成卿は後に云ふ如く斯道の達人なりければおのづから歌謡の上にも一個の見識を有し隨ひて歌集の撰進にも意を用ひしかば其の所撰の歌ども風姿風情ともに多少前の二集に比して優るところあり。但し此の集につきても風姿風情何れが重きかと問はゞ勿論質よりも文の方に心を用ひたりとおぼしく押なべては姿こそ優りたれと答へん。まかして其の姿は優美なるをもて佳なるものとしたるが如し。

堀河院の御時百首歌奉りける時早蕨を 藤原基俊

みやま木のかげの、下の下わらびもえいつれども知る人もなし

加茂社の歌合に花の歌とて 藤原公衡

花ざかり四方の山べにあくがれて春はこゝろの身にそはぬかな

三月つごもりにも 式子内親王

ながむれば思ひやるべきかたぞなき春のかぎりの夕ぐれ空

題まらず 藤原家隆

山ふかき松の嵐は身にまめて誰れか寐さめに月を見るらん

かく此の集は姿を重んじたる風あり而も『後拾遺』の姿のみ美しくて其の實の卑俗なるとは異り優美なる姿の中にも流石に餘情綿々として雅趣深遠なる筆致を具ふ。更に此の集を以て『古今集』以後の歌集に比較せんに『後撰』の質に富みて文に貧しき『拾遺』の華に過ぎて實に乏しき又は『後拾遺』の卑俗なる『金葉』『詞花』二集の稍高雅なるものから未だ纖巧を免れざる共に一長一短ありと雖も此の集の文質其の中を得たるに近きには比すべくもあらず。古來此の集の歌體を以て『古今集』の歌の細くなれる姿して『後拾遺』の風に少しく實の添はりたらん趣ありとやうに云ひ

けるぞよく其の當を得たる。前諸集は『萬葉』『古今』を距る遠からぬ時代の歌人を列ねる事多ければ流石に其の中には秀歌も見えたれど全體の上より見渡せば撰擇粗雑にして批難も多かるに此の集には非常に秀でたる名歌少きかはりに全篇能く整ひて甚しく粗笨なるものなし。長明が『無名抄』に歴代勅撰歌集に就きて下したる評は素より粗大の見なれど洵にさるべしと覺ゆるものあり殊に當代に於ける歌人の着想の奇巧に流れたる狀を説けるあたりは其の要を悉くして予輩をして更に再説する必要なからしむるものあり。其中『古今』及び『後撰』につきての評は既に掲げたる事あれど便宜のため列ねて引用せん。

中國『古今』の時花實共に備りて其のさままましくに分かれたり。『後撰』にはよるしき歌『古今』に取りつくされて後いく程も經ざりければ歌得がたくして姿をば撰ばす心を先とせり。『拾遺』の頃より其の味殊の外にもの近くなりて理^{トク}限なく現はれ姿すなほなるなよるしきすそのうち『後拾遺』のとき今すこしやはらぎて昔の風を忘れたり。稍其の時のふるき人などは是れをうけざりけるにや後拾遺姿を名づけて口をしき事にまけるさぞある先達かたり侍りし。『金葉』は又わざとをかしからんとして輕^{キヨク}なる歌多かり。『詞花』『千載』大略『後拾遺』の風なるべし。歌の昔より儼はり來たるや、此の如し。かゝれば『拾遺』よりのち其の様ひとつにして久しくなりけるゆゑに風情やうく、堀き

詞代々にふりて此の道時に去たがひて衰へ行く。昔はたゞ花を詠にまがへ月を氷に
よせ紅葉を錦によするたぐひをかきしき事にせしかど今は其の心云ひつくして霞の中
にさまよひの霞をもさめ氷にこりて珍らしき心をそへ錦に異なるふしを尋ね。かや
うに容易からずたしなみて思ひ得れば珍らしき風情もかたくなり行く。まれく得
たれども昔をへつらへる心なれば卑しく碎けたるさまなり況や言葉に至りては言ひ
つくしてければ珍らしき言葉もなく目さまるふしもなし。殊なる秀逸なられば五七
五をよみて七々の句は空におしはらるゝやうなり。こゝに今の人歌のさまの世々に
よみふるされにける事を知りて更に古風にかへりて幽玄味を學ぶ事のいで來たるな
り云々。予輩は是まで歴代の勅撰歌集を評論するにつきて想の上よりも重に風
朧の邊に筆を着けたりき。かゝるは一に我が歌謡の風朧の變遷に比して含蓄せ
る感想の大かた『古今』以後不變なりしをもて再説する必要なかりしに依るなり。
詳言すれば我が歴代の歌人が主として歌へりし題目例へば月花のあはれをいひ
男女の相思ふ心を抒ぶ身を歎き人を悲しむなどのたぐひは『古今集』以來不變の感
想なれば一たび與へられたる解説を反覆せんは無用の辨なりと思惟たればな
り。然りかゝる主題のみを唯一の天地としかゝる感想のみを常の心として只其

の中に踟躕し如何にせば是等の主題につきて是等の感想を至適に抒し得べきか
とばかり努めたる歌人に對して其の感想の變遷を評論する必要があるべしやは。

其の四 『古今集』以後重要な歌人

『古今集』以後の歴代の歌集に其の名を列ねたる歌人の數はいと多かりしが特に其
の名を擧げて史上に録すべきは甚だ稀れなり。就中名手を以て一世に現れしも
のは殆ど數ふるに足らず僅に大中臣能宣、源順、清原元輔、藤原公任、源經信、源俊賴、藤
原顯輔、同基俊、同俊成、宮媛に和泉式部、赤染衛門、相摸、大貳三位等數人あるのみ。今
是等の人々に就きて精細なる評を加へて各自の特質を發揮し彼此の優劣を比較
せんは極めて趣味あるわざなれども是等の人々とても悉く異采ありしにもあら
ねば其の評論の精細ならぬかぎりにては大かたは其の名を列ねたる歌集の特質
を以て蔽ふを得べし。故に予輩は此の中にも特に往昔より人口に膾炙せる藤
原公任、源俊賴朝臣及び藤原俊成卿の三人のみを擧げて簡略なる批評を試むべ
し。學者予輩の解説が『古今集』及び其の集中の歌人に厚うして是等に薄きを咎む
る勿れ予輩が志かなせる故は後の歌集は全く彼の集に則りて撰ぜられ其の摸型

の中に消長せしものなれば彼れに厚きは畢竟是れにも厚きと同じ結果ありと信じたるによるなり。

さて藤原公任卿は小野宮太政大臣實賴公の孫三條太政大臣賴忠公の長子にして村上天皇の康和三年に生る母は三品中務卿代明親王の御娘なりき。公任卿天元三年清涼殿にて元服を行ひし時天皇躬ら冠を授けさせ給ひ正四位に叙せられて侍従の職に任ぜられしが後累進して大納言となりぬ。世に彼れを四條の大納言と呼べり。人となり聰明にして學は和漢を兼ね諸藝一として通ぜざるものなかりしが和歌及び筆跡は特に其の長技として名聲高く世に聞こえたり。『八雲御抄』に曰はく公任卿寛和の頃より天下無双の名人にて既に二百餘歳を経たり在世の時は云ふに及はず經信俊賴以下近く俊成存生までは空の月日の如く仰ぐ云々。又『悦目抄』にいはく人々遍昭寺にて月見侍りけるに山家秋月といふ事をよみける其の中に範永朝臣が其の夜しも殿上の番にてまからざりけるを主上うらやましく思ふらんと仰せ下されて料の御馬を給りて乗りて山へ罷りて山家秋月といふ事をよみ侍りけり。

とふ人もなき山里の秋の夜は月の光もさびしかりけり

件の懐紙の草案どもを中納言とりて公任卿の出家して籠りみられたりける北山の長谷といふ所へ見せにやれりければ範永が歌を深く感嘆して草案のはしに範永誰人哉和歌得其躰と書きつけられたりけるを範永あまりの感に堪へずして其の草案を乞ひとりて錦の袋に入れて寶物として首にかけて持ちたりけり。公任卿當時といひ後世までも推重せられしこと想察すべきなり。其の歌は

九月晦日の日秋のかけは雨の中につきぬといふことを

いづかたに秋は行くらむ我がやどに今宵ばかりは雨やどりせよ

嵐の山の下をまかりけるに紅葉のいたく散りければ

あさまだき嵐の山のさむければもみぢの錦きぬ人ぞなき

春日にまうで給ひけるにけぶりたつ山里をこれなん駒の里と人の

聞こえければ

あさまだきあさある雲と見えつるはこまのゝ里の烟なりけり

の如く詞姿優婉にして着想の奇なる中に何となき風韻あるが此の人の得意とするところなり。されば『後拾遺集』の中にも彼れの詠のみは稍幽玄の趣ありて文字に表れたる意味の外に連想の感を誘起せしむるものあり。是はあもふに卿みづからよき歌になりぬれば其の詞姿の外に景氣の添ひたるさまのあるにや、たとへば春の花のあたりに霞のたなびき、秋の月の前に鹿の聲をほのかにきき、垣根の梅に春風の匂ひを誘ひ、峰の紅葉に時雨の打そよぎ、村雨の晴れ行く空に時鳥の聲うちしほれ、籬の荆の霜枯れたるにはだれもだにつもる雪且きゆるけしきなどする様なる事のうかびて添へるなりといへる如く常に詠歌するに當りて只管餘韻あらん事を期したりし鍛錬の功なるべし。まかれども其の詠には強ひて意味を深からしめたる跡なく自然の調をなして流麗に吟誦の間に妙味を感じしむること業平の詠歌の意味深きために往々考察を須ひて趣あるとは其のさま異れり。情操潔白想像は深刻ならぬども新奇なり。感想の種類は云ふべき必要を見ず歌集につきていへりしと大略同じければなり。公任卿万壽元年最愛のむすめを失ひしのは致仕して大和長谷の別荘にこもり

て髪を剃り獨居して閑寂を樂みぬ。此の頃無常の感を佛經中の句に寄せて歌へるもの趣からず且又秀れたるもあり。長久二年七十六歳にて薨去しぬ。

其の著書に『北山鈔』和漢朗詠集』和歌九品論議』新撰髓腦』前五十番名所和歌集』深窓秘鈔』金玉集』前後十五番歌合』三十六人歌合』等あり皆後世に傳へて珍重せらる。

卿の自詠を集録せる書に『公任卿集』と名つくるものあり是は卿の自撰にあらず從者などの書きあつめたるものならんといふ。

其の子定頼卿も歌に巧にして又能書の聞こえありき。父の卿とおなじく和漢の學才にも長じて孝心深かりきと云ひ傳へぬ。

其の頃公任卿と殆ど時代を同うじて源經信卿といふもの存りき博學多藝にして就中和歌を能くし公任と其の名を齊うせり。其の第三子に俊頼朝臣といふあり父につぎて和歌の名匠たりき。堀河鳥羽崇徳の三朝に歷仕し初め右近衛少將に任ぜられ遂に木工權頭右京大夫を兼ね從四位上に叙せられぬ。其の歌を詠ずる沈思熟考經營慘澹として楳く筆を下さず一首成るとに反覆朗詠して改竄するところあり意に適するに及びてはじめて之れを人に示しぬ。故を以て其の詠ず

るところ懸崖の跡なく着意新詞姿はた温雅なり而して其の性行も着實なりしかば時人歸服するもの多く一代の宗として推重し朝廷及び諸家の歌會には必ず其の判者と仰ぎぬ。俊賴常に曰はく和歌を判ずるものは十徳を備へざるべからず所謂門地徳望明辨強記の類是れなりと阿世の徒にあらざりしこと察するに足る。

其の著す書に『山木髓腦』『無名鈔』『俊賴口傳』等あり家集を『散木棄歌集』と云ひぬ。蓋し散木とは莊子の語を假りて無用の木といふことを表し謙讓の意を寓せるなり。『金葉和歌集』を撰進せるよしは既に述べたるどころなり。生誕終焉の年月を詳にせず。

其の歌は藤原定家卿の『近代秀歌』の中に此の朝臣の歌を載せて歌躰を評せるところ以て其の大概を窺ふに足る則ち寫して其の一斑の例とせん。定家卿いはく

「山ざくら咲きそめしよりひさかたのくもみに見ゆる瀧の白糸

おちたぎつ八とうぢ川の早き瀬に岩こす浪は千代の數かも

是は晴の歌秀歌の本躰と申すべきにや。

うづら鳴く眞野の入江の濱風に尾花なみよる秋の夕ぐれ

ふる郷はちるもみぢ葉に埋もれて軒の志のぶにあき風ぞふく

是は幽玄におもかげかすかにさびしき體なり。

明日も來ん野路の玉河萩こえていろなる浪に月やどりけり

思ひ草葉末にかゝる白露のたま／＼きては手にもたまらず

是は面白く見どころありて上手の志ごとく見ゆ。

うかりける人をはつせの山おろしはげしかれとは祈らぬ物を

どへかしな玉ぐし事の葉にみがくれて鵲の草ぐきめぢならずとも

是は心深く詞心にまかせてまねぶともいひつゝけがたく誠に及ぶまじき姿なりと。同情の感横溢して言々肺腑より出づるが如き風情はなきも想像といひ情感といひ平靜着實にして措辭流暢なるが此の人の體なり。されば想の變化に乏しく姿の一律に傾ける嫌はあれども繊細巧緻若しくは繁縟の人をして厭はしむるに至らざること其の長所とも見るべけれ。

俊賴の子俊惠亦斯道の名匠を以て稱せられぬ。藤原俊成卿この父子を評して曰

はく俊頼の歌は鍛錬精巧にして疵瑕の指摘すべきなし俊惠の歌亦巧なりと雖も其の父に及ばざること遠しと。

俊成卿は御堂關白道長四代の後裔大納言忠家の孫權中納言俊忠の第三子なり母は伊豫の守敦家の女とも又顯隆の女ともいへり。俊成仁安三年正月正三位となり承安二月二月皇大皇宮大夫となり安元二年九月六十二歳にして髪を剃りて釋阿と號し文久元年九十一歳にて逝りぬ。俊成はじめは六條顯輔に養はれ顯廣と名乗りしが六條家の風體に慊らず去りて基俊朝臣に就きて和歌を學びぬ。彼れ常に歌を詠ずるものゝ心得として云はれけるは「歌は必ず才覺をふるひて繪師の繪の具をつくし作物司ツクモノシの木の色をさまざまに割りすゑたるやうにはあらざるべし只よみわけ打ながむるにげにと覺えてをかしくも聞こゆる姿あるべしと。此の故に彼れの撰進せる『千載集』には詞姿流暢にして而も韻致に富むもの多きなるべし彼の詠にも次の例にて明なる如くかゝる傾あり。俊成居常歌を作るには古き淨衣を着けて端座し桐火桶を擁しながら心を凝らして懈怠の色毫もなかりき。嘗て自己の信ずる絶巧の作といふものあり

夕されば野への秋風身にしみてうづら鳴くなりふかくさの里

といふされども世に普く傳唱して其の妙を稱へられしは

おもかげに花の姿をさきだてゝいく重こえ來ぬ峰の白雲

といふ歌是れなり。其の風格自然にして雅健、其の旨遠く詞姿圓熟して粗笨の風なきどころ恰も古き淨衣を着して端坐し桐火桶を擁して刻思するさまにも似たり。故に世の人かゝる風格なる歌を指して桐火桶の體といへりとぞ。猶一二の例を擧げん。

攝政太政大臣家に五十首歌よみ侍りけるに

またや見ん交野まじりの御所の櫻がり花の雪散る春のあけぼの

九月盡

暮れはつる夕の空を啄むれば雲こそ秋の名残りなりけれ

俊成人となり温厚にして君子の風ありき。其の師基俊俊頼と相善からず隨うて其の徒互に門戸を張りて相毀傷せしに俊成ひとり軒睡を加へず基俊の學力を稱すると共に俊頼の風格を賞美せり。後鳥羽天皇深く俊成を愛し建仁三年此の卿

九十歳になられければ嘗て光孝天皇が僧正遍昭に賀を賜ひし先例に倣はせ給ひて和歌所にて九十の賀を賜はり屏風褥を設け御製の歌と鳩の杖とを賜はせられき。卿の光榮如何ばかりぞ卿は諸子に扶けられて殿に昇り之れを拜せりとぞ。其の著すところ『古來風躰抄』あり我が邦古來歌躰の變遷を論じたるもの大要を知る料とすべし。家集を『長秋詠草』といふ長秋は皇太后宮の御所の漢名なるより我が官職の皇太后宮大夫たりしに因みて名つけたりと云ほゆ。子に成家定家あり共に和歌を能くす殊に定家は一世の名手たりき子孫亦相つぎて一派を構へ朝に仕へて永く斯壇の牛耳を執れり。されども是等は共に鎌倉時代の事なれば又其の期に至りて論述する折りあらん。

第五章 散文

第一節 總説

宣命文 假名書之文章 歌序之文 日記及び紀行之文
 物語之文 消息之文 草子之文 歴史之文 翻譯之文
 説明之文

常期の初つ方は漢學の流行につれて獨り詩賦のみ盛行はれ歌謡は太く衰凋の姿を呈せしかども七八十年を経て又やうく復興の機運に會し終に『古今』時代の盛時をも見るに至りしよしは前章に於いて叙べたるどころなりしが漢學の流行は啻に歌謡の衰凋を來たしに止まらず又散文の發達をも阻碍したりき。前期に於いて散文は稍其の體用を具備するまでに發達せしもの、此の期に入りては學者率ね漢文に熟し凡百の餘事は大方漢文を以て物する有様なりしかば前期より相傳せし祝詞宣命の如きも次第に國文の格を放れて彼の文格を混すること多きに至りたり。蓋し此の頃既に片假名の發明あり平假名の製作また相次ぎてありしかば國文をもものするには其の便宜往昔の比にはあらざりきと雖も舊慣の久しき一朝にして打破しがたかりしと當時朝廷に於いて専ら漢學の獎勵を努めしがために之れを重んずるきはみ假名文字をば女文字として一般に排斥せる傾向ありしとによりてさては假名書之文章をば見るを得ざりしにこそ。此の期の初つ方に成れる宣命は『續日本後紀』『三代實錄』等に載りて殘れり。是等を前期の散文の單に漢字音を假りて國語の格に寫したるに比すれば漢文の格を混交するこ

と極めて多し。

其の後一方に漢學の獎勵次第に廢れ他方に假名文字の便利漸く承認せられ其の反對に漢字音を假用する不便を覺知するに至りて遂に假名の文章世に出づるととなりぬ。想ふに私に控へおく日用の帳簿などには尙早くより假名もて録する事は行はれたらんと思はるれども始めて一の體裁を備へて世に公にせられ今の時にも傳はるは『古今和歌集』の序『土佐日記』等なり。是等は共に紀貫之の作に係りぬ。されば散文が盛運の階に昇りそめしは醍醐天皇の朝にして恰も歌謡の再榮と其の時期を同しうせり。尤も或學者の中には『伊勢物語』は在原朝臣業平の自記なりといへば『土佐日記』等の前に出でたるべく又『竹取物語』は物語文の祖なりといへば勿論『伊勢物語』よりも早く隨うて『土佐日記』等よりも遙に遠き以前に成りたるものなるべしと云ふものあり。げに『伊勢物語』が業平朝臣の手に成りしこと正確ならんには假名文の世に出でそめしは陽成天皇一五三四七の御宇以前にあるべしと雖も如何にせん斯かる説は單に考證家の一私言に止まるのみならず却りて其の反證(和文評釋中の『伊勢物語』評釋緒論參看)の信すべきものさへあるなれば

強ち『土佐日記』等の以前に出でたりとは断定しがたきを。又『竹取物語』は古きものには相違なかるべきも果して『土佐日記』の前に出でたりとは断定すべからず。現に本居宣長翁なども其の『物語』は誰れがいつの代に作れりとは知られぬども太く古きものとも見えず延喜御宇醍醐天皇の年號の年號御宇などよりは此なたの物とぞ見えたること云はれたり。されば是等の書どもに勿論多少時日の先後はありしとするも其は事々しく取り上げて云ふに及ばず大方同じころの作と見做すかた總當の見なるべし。又予輩が『古今和歌集』の序『土佐日記』等を假名文の始として擧げたるも強ち『竹取』『伊勢』等を其れより以後の作と見たるに非ず殆ど同じ頃のものと思ふが故に年代を知らん必要より著者の分明なるを撰みたるなり。『古今和歌集』の序の莊嚴なるを措きては是等は孰れも其の文章簡古にして前時代の質樸の風何處となく遺りたらん趣あり。是れより相踵ぎて諸種の物語世に出でしが今に遺れるものに『空穂物語』『落窪物語』等あり想像を馳せ意匠を凝らして全く架空の事實を構成し純ら快樂を讀者に與へんがために作れるものなり。されば從來我が邦の散文が多少美文の性質を帯びざりしにあらずと雖も其の目的單に實用の一方に

止まりしに今や漸く美術的の方面に其の領域を擴張せんとす當に一大進歩と謂ふべきなり。此の頃又蜻蛉日記と云ふものありき。消息文もまた此の頃より漢文の書牘に交りて假名文にて物すること始まりぬ。是は云ふまでもなく實用一過のものなるべき筈なりしかど多くは歌謡の序詞めきたる文牘にて餘程文學的趣味を帯びたり。蓋し斯の文の實際には實用よりも寧ろ風流の媒介として用ひられたるに因るなるべし。後數世を経て一條天皇の御宇よりは未曾有の發達散文の上に現れ名流大家蔚然として起り文の園生は俄に梅櫻桃李の葩美を一時に見るに至りぬ。作者には誰れも知れる紫式部、清少納言を始めとして和泉式部、大貳三位、讃岐典侍、菅原孝標の女、源隆國、藤原爲業等相紹ぎて輩出し其の名最も現はれき。著書に『源氏物語』の小説なる『枕草子』の隨筆なるは殊更に云はずもあれ『源松中納言物語』、『堤中納言物語』、『狭衣』は小説的物語として艶麗優美の筆を以て人情を描くを主とし、『今昔物語』、『宇治拾遺』、『榮花物語』、『大鏡』、『今鏡』等は事實を直寫するを旨としたれども筆花又面白く見所ある史的物語なり。是は彼の前期に出でたる六國史杯の如き漢文の勅撰國史跡を絶ちたれば私に其を繼がんとする意にても

ありしなるべけれど散文隆昌となりたる餘りのすさびにてもありしなるべし。『紫式部日記』、『和泉式部日記』、『更科日記』、『讃岐典侍日記』等は自己の經歷を録したるものから其の文學者の手になりし程ありて孰れも斯壇に列する價值優に見えたり。其の他序文に『拾遺』、『後拾遺』、『全葉』、『詞花』等諸歌集の序、翻譯文に『唐物語』、『説明文』、『新撰髓腦』、『和歌十鉢』、『奥儀抄』、『悦目抄』等最も秀でたり。

さてかくも此の平安朝は諸種の散文一時に發達して各其の榮を極めたりしかば奈良朝を和歌時代と呼ぶに對して世に散文時代の稱あり。今日單に和文とし云へば殆ど此の期の散文にかざる特別の名稱なるかの如き觀あるを見ても如何ばかり平安朝の文學が散文に秀でたるかを窺ふに足る。而して爰に特に記載せざるべからざる一事は此の盛大なりし散文が或二三の作を除ける外はすべて宮媛才女の胸底より溢れ出でたる産出物なりし事は是れなり。是は例の漢文が一時世を風靡したる結果男子は尙假名文をもものすることを耻ぢたりし故にぞあるべき。彼の紀貫之の氣概あるも現に『土佐日記』を起草するに當りてはさながら婦女子の手に成りしかの如く假托せし事跡は明かに以上の如き傾向ありしを證すと謂ふ

べし。邇莫又當時女流の文學者を出だし、所以は當朝の中頃より藤原氏漸く朝廷に權力を得て皇后を初め中宮女御大かた其の一族より出で、榮花を盡しければ女子を持てるものは是れに宮仕させん事を希ひ皇后及び中宮女御たちも亦學才あるを抱へて他に誇らんと願ひしかば仕ふるものは孰れも心を傾けて内外の文學を研鑽したりしにも依るなり。かゝれば當朝の散文には内外の文學研鑽の結果として支那文學の影響若しくは佛教思想の混交少々ならざるを見る。散文家が歌人の名譽をも併せ有せるもの多かりし事は我が後世の文學者には敢へて珍しからぬ事實否殆ど押しなべての傾向なりければ此の朝の文學者が歌人を兼ねたりとて殊更に記する要なきに似たれど其の例を作りしは全く此の朝に始まりきと思はるゝと共に此の朝の文學が後世に影響せし一端を卜知する便りにもとて附記しおく。

文章は質實豪放殆ど前期の精神を其の儘なるも稀には見ゆれど概しては歌記の上にも云へりし如く繊細巧緻婉約優美などの評語を下すべきもの多し。是は既に前にも叙べたる如く當朝の社會の好尚一般にさる風を愛し花朝月夕只管艶美を競ひければ其の世態の反映と見て可なり。是れにつけても艶麗優美は當朝文學の全軀を蔽ふべき至切の評言なりと謂ふべし。

予輩は今此の期の散文を細評するに當りては其の煩瑣を避けんがために其の内包並びに外形の性質軀裁より大略を類標して

物語の文 歌序の文 日記及び紀行の文 草子の文 歴史の文

の五種に分かちて論評せんとす。此の外尙消息の文、翻譯の文、説明の文などあれども是等は別に項目を設けて細論する程の必要なければ消息の文と翻譯の文とは其がおのづから屬すべき物語文の項に附記すべく説明の文は全く略して載せざるべし。其は歌謡の章にも聊か云へるところありしが其の外別に大體に就きては云ふべき事なければなり。

第二節 物語の文

小説的物語 史的物語 『竹取物語』 『伊勢物語』 『空穂』 『落窪』 等の物語 『源氏物語』 其の餘の物語

物語とは話説の義なること古來の通説なり。さればこそ『日本書紀』にも談といふ

文字を物説とは訓ませたれ。怪奇なる話説の往々『紀』等の古書中に散見せるによりて考ふれば早き頃より物説といふもの書冊にこそは載せざれ口頭に傳承して世に持て囃したりきと覺ゆ。畢竟物説といふ名も其の出所は口頭に話説したりしによりて起これるにこそ。初めて其が一種の體裁を具へて書冊に編まれしは何時の代なりけん能くは知られぬと今に遺れるものにては『竹取物語』を最も古しとす。其れに次ぎては『伊勢物語』なるべし。『源氏物語』の出でたるは其れよりも亦遙に末一條天皇^{千代六百}の御宇なりき。其の頃の前後には種々の物語世に出でたりと覺しくて『源氏物語』の中にも其の名許多見えたれと今に傳はれるは甚だ稀なり。只僅に『空穂物語』『住吉物語』『落窪物語』『濱松中納言物語』『大和物語』『狭衣』『とりかへばやの物語』『多武峰少將物語』等の數種あるのみ。されば『住吉物語』と『多武峰少將物語』とは後人の偽作なりと云ふ説さへあれば真正に其の頃の作とすべきは尙少しと知るべし。此の外『朝倉物語』『交野少將物語』『ねごめ物語』『井手中將物語』『梅壺少將物語』自ら悔ゆる物語』『あし火たく屋の物語』『ふせごの少將物語』等其の名の聞こえて其の書の全く傳はらぬもの三十餘種あり。

是等の物語には其の文辭も其の脚色も素より種々ありて一様ならず早く出でたるは其の文辭口語のまゝを寫せるに近く其の趣向はた簡單なり時世やう／＼進みて諸種の物語續出する頃となりては其の文章は華美優麗となり脚色布置もまた次第に緻密精巧となりたり。記するところは或は事を虚に構へて専ら作者の想像を旨とせしもあり或は瑣末なる事件を鋪張して小説に附會したるもあり或は外國の物語を翻譯して此の國風となしたるもあり。されども歸着するところは當時の世態を描き人情を寫して娛樂に供するを目的と志たる皆同じじかりき。かゝれば其の主題を撰擇するには孰れも時好に投ずるを以て專一の要務となしたるやぶのづから明瞭なり。即ち當時の優柔靡浮なる風俗人情の中に就きて殊に面白き又は哀れなる事件をとり蒐め多少の意匠を加へて作爲せりしなり。蓋し優柔靡浮の風は先にも屢云へりし如く當代に於ける縉紳の常態なりしからにかゝる物語を讀みけるものは一様におのが身上に引き較べて物のあはれを感じたりしなり。然るに是等小説的物語を以て其の目的専ら訓誡諷諭にありきと説くものあり所謂勸善懲惡主義を以て小説の目的を攝せんとするものなり。是

等の解説はいたく古來の學者を風靡えたりき。されども是等の説は當代の狀勢を知らざると小説の何なるかを理解せざるとより出でし僻見にして探るに足らず。若しそれは等の物語は専ら寫實を旨とせしからに正史の筆の及ばざる人情風俗を知る料となるべしと云ふは正當の考察なるべし。但し是は云ふまでもなく後世より下したる見解にして當時既に作者の胸中に此の如き考案ありしにあらず一に其の目的娛樂に供せるものなりきと知るべし。此の頃また別に物語と名つくる書冊にして小説の如く想像を交へず唯當代の出來事をありしまゝに記載するを目的とせしものもありき。是は小説的物語に對して史的物語(物語は單義に混同すべし史的小説)ともいふべき者なり。其の形跡こそは物語の風を具へたれども内容は全く異りて實事の記録を主としたればなり。史的物語に就きては別に歴史の文と題する項下に評論する筈なれば此處には單に小説的物語にのみ就きてを掲載せん。因にいふ此の朝の物語には作者の不明なるもの多いため作者によりては事を叙しがたし。故に此には便宜のために著作の年代を追うて物せんとす。されど其れも亦不明なるもの多きを以て精細なること能はざるべし。

し。されば大凡は皆知られたるを以て其の中最も明瞭に且つ最も傑作と許されたる『源氏物語』の作者紫式部を以て此の期の中宗とし其の以前の作と以後の作に分けて聊か細論の筆を試むべし。

其の一 紫式部以前の物語

物語の中にて最も古きは『竹取物語』なりとは古來の定論なり。されど何時の世に誰れの作れるかは詳かならず。或は大同一後延喜以往の著作ならんといひ或は嵯峨天皇より清和天皇の頃までの間に成りたるものならんともいへり。また源順朝臣の作なりとの傳説もあれど信ぜられず。唯『源氏物語』の中に『物語の出で來はじめの祖なる『竹取』とあるによりて此の『物語』は物語文の祖なる事さては其の著作せられたる時代の古きも推し測らるゝのみ。

『物語』の筋は、かぐや姫といふ一美人竹の中より生まれ出で竹取の翁夫婦に養育せられて久しく人間の痴情を迷はす種となりしが此の姫實は月界の天女にして宿世の定業によりて生を此の人間界に托せしものなりしかば穢土の交りを欲せずとかくするほどに八月十五夜に月界より下りし迎ひの使と共に再び上天すとい

ふにあり。一篇の骨子は勿論怪誕無稽の事件に過ぎず。其の趣向は専ら事の面白きを主としたれども平板なるを免れず又人物の性格等には毫末の注意だにも及ぼしたる跡なし。されは其の間に皇族大臣などいふやんごとなき朝緋が一女子のために掌中に弄せらるゝあたりは痴情に驅らるゝものゝ真情を熹微の間に髣髴せしむるものあるが如し。併しながら是れ大體の見のみ其の細節につきて云へば或は人物の行爲あまりに愚痴に過ぎて讀者の心に一種のをかしみを覺えしむることなきにあらず。例へば石の上の中納言（中納言）燕（燕）のもたる子安貝を取らんとて大炊寮の官人くらつ磨を語らひて燕の巢を探ぐる條に中納言みづから我れ上りて探らんと宣ひて籠にのりてのぼりて窺ひ給へるに燕尾をさしげていたく廻るに合せて手を捧げて探り給ふに手にひらめけるものさはる時に「吾れ物握りたり今はあるしてよ翁（翁）志えたり」との給ひて集りて疾くおろさんとて綱をひきぐして綱絶ゆる即ちやしまの鼎の上へのけざまに落ち給へり。人々あさましがりて寄りて抱へ奉れり。御目はまらめにて伏し給へり。人々御口に水をすくひ入れ奉る。辛うじていき出で給へるにまた鼎の上より手とり足とりしてさげおろし奉る。からうじて御心ちいかにおぼさるると問へば息の下にてものは少し覺ゆれど腰なん動かれぬされど子安貝をふと握りもたれば嬉しく覺ゆるなりまづ脂燭（燭）さして來（來）此の貝顔みんと御頭（頭）もたげて御手をひろげ給へるに燕のまりおける古藁（藁）を握り給へるなりけり

とある如き特に其の一例とも見るべし。世に此の物語を解するもの曰はくかく愚痴に過ぎたる狀を憚りなく物せしは是れ作者が最も深意を寓せしどころ即ち當時の世態に慷慨するところありて諷規せんがために爲したるなりと。予輩は作者が果して此の說者のいふ如く當初より諷規の意ありて此の物語を起草せりとは思はずされど心を留めて見る時は自然に讀者をして痴情に迷ふことの愚にして憐むべきを思はしむる者あるが如し。此の書の結構は大體『寶樓閣經』『普曜經』『太平廣記』『搜神記』等種々の佛經又は漢籍中に散見したる怪譚を翻案撮合して作りたりといふ舊說あり。此の說はた穿鑿に過ぎたる嫌ありと雖も此の事また必ずしも絶無なりとせんや。然れども尙怪譚異說を好むは上世の人の常なればおのづから我が邦人の口碑などに傳はる舊譚を骨子として潤色したりしやも

知るべからず。要は彼れも一説此れも一説として見るべきか而も此處には深く考證すべき必要なきを以て擱きつ。

其の文章は彫琢を加へたる痕跡絶えて見えず押しなべて平淡なり。章句簡樸なる點は何處となく祝詞宣命の遺風ありて、おのづから古文の趣具はれり。就中哀怨思慕の情思を寫せるあたりは殊に簡強の文辭に纏綿激越なる意を持たせて文致の味ふべきものあるを覺ゆ。

『竹取物語』に次ぎて世に出でしは『伊勢物語』なり。『伊勢物語』の作者は伊勢の御なりといひ或は在原業平朝臣なりといふ。此の二説古くより傳はりたれども共に徵證なき臆測に過ぎず。今は業平朝臣の日記やうのもの遺りしに後人の他事をも加へて作爲したるものなるべしといふ説書中の事實に徴して一般に信ぜらるゝに至りぬ。されど其の書き添へたる人の誰れなりしかは勿論知るべきよすがなし唯簡潔なる文辭に深長なる趣を寓せるによりて必ず凡庸の作家ならざりしを知り得るのみ。もし又孰れを自記の文いづれを追記の條などいふに至りては斷ずべからず時代の違へるくだりを追記となさんは勿論不可なかるべし。此

の書の體裁は物語の名はありと雖も他の物語の如く全篇を通過したる脚色あるにあらず言はゞ極めて簡短なる事件を數多集録したるものなり。每章必ず一首若しくは數首の歌を附して其の章の意を完成せり。其の例次の如し

昔東の五條に大后（おほきさき）の宮おはしましける西の對に住む人ありけり。それを本意にはあらで志深かりける人行きとぶらひけるを正月の十日ばかりのほどに外にかくれにけり。ある所は聞けど人の行き通ふべき所にもあらざりければ猶憂しと思ひつゝなんありける。またの年の正月に梅の花盛りなるに去年を思ひ出で、彼の西の對にいきて立ちて見居てみれど去年に似るべくもあらず。打ち泣きてあばらなる板敷に月の傾くまで臥せりて去年を思ひ出でよめる

月やあらぬ春やむかしのはるならぬ我が身ひとつはもとの身にして
とよみて夜のほのくゞと明くるになくく歸りにけり。

されば其の文はさながら其の歌の由來を明らかにするたりの詞とも見え通常の歌のはしがきに似てやゝ長きものなり。さはれ大やうは業平朝臣の閱歴めく書

きさまにて虚實相錯へ且つ男女の情交を旨と記載し親子の間にありては殆ど誦讀するだに憚るべき事項をも點綴せり。即ち此の『物語』の記事は主として業平朝臣の事とせしものから尙荷田春滿の言へる如く男女のたはくるひが事のみ舉げたる歌或は時代異なる歌をもて贈答を作り或は歌の本は『萬葉』を用ひ末は『古今』をとりて一首の歌としあるは古歌の一言一句をかへて意を異にしあるは全くあげても端の詞をかへて異とせりとあるは世談み人をも異にし時代官位の次序をもたがへなどしつゝをさくひが事ならぬはあらざりけらし。故に此の『物語』の題號はひが事物語の義なりといふ説古くより行はれたり是は伊勢人はひが事すといへる古談に因めりとなん聞こえし。かゝれば世人は此の物語を以て誨姪の媒介たる書と見做して嚴肅なる家庭には之れを手にするだに禁せりといふ。此の故にまた偶之れを繕きしものも多きは單に其の文辭の妙を愛せしのみにて其の意を採りしはなかりしが如し。藤原定家卿いはく強不可尋其作者只可玩詞花言葉而已と。是れ歌文を以て消閑の一具と心得たる當世の人の言なれば深く留意するに足らずといへどもまた以て古來一般に作者の意向を問ふことなく純ら

章句の流麗なるにのみ眼を注ぎたりしを想見するに足る。

げに其の文章は『竹取物語』にもまして簡潔適強其の詞少うして其の意餘れる、古文
中恐らくは此の右に出づるものなかるべし。前に掲げたる例につきても見よ或
は巧に短句を用ひ或は助辭を省略して餘情を含めたる筆法極めて古雅なるを。
又竹取物語は平談の風ありしが是れは後に出でたる他の物語文の如く絢爛の姿
なきも稍、艶麗の氣味あるに似たり。これ想の情事に係るもの彼れに比して一段
濃厚の趣あるによるか、されば事の怨恨悲愁等に亘れる場合に於いて殊に優婉の
風あり歌に於いて更に然り。若し又歌に稍、過巧繁縟なるものと理窟に過ぎたる
沒趣味のものと多く見えたるは作者が強ひて事を面白からん様に牽強附會した
る自然の餘弊なるべく文に詞足らずと思はるゝは今人の見なるべし。

『伊勢物語』に次ぎて世に出でたりといひ傳ふるは『住吉物語』と『宇津保物語』となり。
二書共に其の著者と年代とは詳かならずと雖も清少納言が『枕草子』に『住吉物語』は『住
吉』『宇津保』の類とあるによりて古きものなるべしといふ説今は學者の定論とな
りぬ。さはいふものゝ今世に傳はる『住吉物語』は『枕草子』に『住吉物語』には

あらず其の名を假りて後人の偽作せしものなるべしといふ説はた等しく動かすべからざる定論となれり。此の『住吉物語』も其の著作の年代分明ならざれどもいたく近世のものにもあらざるべし。其の筋は昔中納言にて左衛門の督を兼ねたる人の女繼母に憎まれて幾多の辛酸に苦められしが遂に住吉の浦なるゆかりの尼の許にさすらひ行きて其の難を避け果てはおほいに富み榮えたるに繼母は之れに引きかへて不幸の中に逝りしよしを述べたり。其の文章拙からず脚色また同時代の他の物語に較べては井然として意匠も落想も見るべきものあり。因果應報の理よく一貫して所謂勸善懲惡の主意分明に認識せらる。嵯峨野の子の日の條、繼母がむくつけく女をたしなむるくだりなど殊に行文自在にして且つ精細、其の狀勢滌として見るが如し。

『宇津保物語』は『住吉物語』に比すれば趣向も文章も稍劣りたり。清原俊蔭といふ人遣唐副使となりて唐に渡らんとして海上暴風のために吹き流されて佛界に至りて琴を習ひて歸りきといふ事より其の娘の落魄して山中に隠れ木の空穂を住家として果敢なき世を送りしが遂に大政大臣なる人の若君の北の方となりて榮えきといふ事柄を叙べたる物語にて全躰の結構に變化の妙なく至りて無味單純なり。されば當時に在りても餘り世の嗜好を惹かさりけん今に傳はる書には益魚の害を被れるところ少からず又さなきも誤脱錯落ありて解すべからざる節多し。文章は『住吉物語』よりも簡樸にして『竹取物語』に次ぎて自然の風あり。世に此の物語を『竹取』よりも新しく『住吉』よりも古かるべしといふも一には此のゆゑなるべしと思はる。此の頃又は稍後の作として『落窪物語』漢松中納言物語』今に傳はれり。『堤中納言物語』も亦此の頃或は稍後の作として數へらる。是等の物語何れも其の作者詳かならずして古來諸家の考證多端なり。中に就いて『落窪物語』は源順朝臣の作なりといひ傳ふれども信偽知るべからず。現に加茂眞淵翁の説には此の書は冷泉院の頃に作れるにて書中に道順の大臣と書けるは藤原忠平公の事なるべし子息たちの官途昇進の順序いよいよ似たりといへり。昔中納言なりし人の娘數多もてるが中に異腹の女一人いたく繼母なる人に惡まれて、寢殿の放出の又一間なる落

窪なる處の二間あるになん住ませ給ひ落窪の君と呼ばれて詫びしき月日を送りくらしけるが藏人の少將なりし人に思はれて遂に其の家を脱れ出で共に住まひて未遂に榮えたりといふ筋を寫せり。措辭簡明にして筋よく透り餘情多き書きぶりなるが事を主とせし跡は到底蔽ふべからず。

『濱松中納言物語』は中納言なる人唐の國へ渡り彼の國の皇后とかたひひ子を設けて我が國に歸りしといふことさては其の子の母を慕ひて佛道に入りしことなどを叙べたり。『濱松中納言物語』といふ名は其の第一卷に「日のもとのみつの濱松こよひこそ我れを戀ふらし夢に見えつれ」とある歌によりてつけしならんといふ説あれど其の作者は全く詳ならず。

『堤中納言物語』は世に藤原の兼輔の作なりといひ傳ふ。兼輔は冬嗣公の曾孫なり延長醍醐天皇御宇年中從三位權中納言となり承平三年朱雀天皇御宇に逝りし人なりき。此の人鴨川堤の下に寓居せしかば世に堤中納言の名ありき。此の『物語』を彼の作なるべしといふも其の名に因めるにやあらん。異説には書中の記事に彼の作として全く年代の合符せざる點ありとて尙後世の作ならんとも云へり。

此の『物語』は同代の他の物語とは多少其の趣異にして短篇の物語十帖より成り各篇に題するに風雅なる名目を以てせり。曰はく

- 花ざくら折る少將
- 蟲めづる姫君
- 逢坂こえぬ權中納言
- おもえぬかたにとまりする少將
- はいずみ
- このついで
- ほとくの懸想
- 貝あはせ
- はなたの女御
- よしなしごと

是れなり。おもふに是れ後に出でたる『源氏』『狭衣』さては『榮花物語』等の各篇に雅號を冠せしも此の書の例に倣ひたるにこそ。物語の趣向も諧謔滑稽あるは風流を旨とし而も其の文章高雅にして趣味深き書きさまなり。但しいま世に存するもの寫本のみにて誤脱錯簡多く文意の通徹しがたきところあるは遺憾といふべし。

右の外尙此の程の作といひ傳ふるものに『大和物語』あり。其の作者を或は業平の二男なる滋春なりといひ或は花山天皇なりともいへど其の徵證の確實なるもの

なし。まかのみならず藤原清輔朝臣の『袋草子』にも作者不詳と見えれば其れにして概くかた穩かなり。されど大やうは延喜の帝を先帝といひ貞信公を大政大臣、清慎公を今の左大臣など見えれば既に天曆の頃より何人かの書きさしたるを花山院の頃の人又所々書き加へたるものなるべしと先哲のいへるは書中の記事に徴するに理りある説なりと覺ゆ。全篇の結構体裁すべて『伊勢物語』に類し見聞したる事柄を列らねたるものから歌話に近きものなり。此の書『八雲御抄』には必ず歌人の見るべきものどやうにいひたれど文も歌も『伊勢物語』に比べては太く見劣りせらる。彼れは其の文簡潔遒強なるに是れは冗漫なるどころ薄弱なるふし往々見えて要するに彼れよりも粗笨なり。さて以上叙述せるにて明なる如く此の頃の物語は文章の外に未だ取上げて精細なる攻究を値ひするものなきが如し。即ち此等の物語は押しなべて人物の性格に注意することもなく又一定の理想を寓せしにもあらず單に一時の娛樂に供せんがためにせる筆のすさびに過ぎぬ觀あればなり。されど我が邦最古の物語文はかゝる状態より發達したりと思へば勿論看過すべきにあらず况や今日まで空

前絶後の大傑作と公認せらるゝ『源氏物語』はかゝる搖籃中に生長せしものなるをや。『源氏物語』を攻究せんとするものは須らく先づ是等の物語を通讀すべきなり。いでや予輩は此の物語の著者而して絶世の文豪として世に稱へられたる紫式部につきて稍々精密なる觀察を試みん。

其の二 紫式部

かくの如く此の頃に出でたる物語は皆一樣に趣向淺薄にして文辭もさまでは妙なるもの趣かりしに幾程もなくて嶮然主角を當時の詞壇に抽で而して長へに國文界上に芳ばしき名を傳へしものあり。彼の有名なる『源氏物語』の作者紫式部すなはち是れなり。紫式部の名は今日にありては殆ど幼童すらも其の何人たるかを聞知するほど世に高し而も其の正確なる傳系は多く湮滅して唯、わづかに推定の記事あるのみ。故に予輩が式部の事をものするに當りても古來の註釋家が與へし幾多の評論並に推測の中に就き最も正確なりと思はるゝものゝ一斑を掲ぐべし。

紫式部は閑院冬嗣公の御六子贈太政大臣良門公五世の裔孫越前守藤原爲時

四子にして藤原宣孝の室たり母を常陸介爲信の女堅子と云ひぬ。紫式部とは其の本名にあらず所謂呼名といへるものにて始めは其の姓の藤原なるによりて藤式部といへりきとぞ。其の紫式部と稱ふるにつきては或は『物語』源氏物の中に若紫の巻を作れる甚深なるゆゑ此の名を得たりといひ或は藤式部の名幽玄ならずとて藤の花のゆかりに紫の字に改めらるるといひ或は一條院の（藤式部を）御乳母の子なり上東門院に奉らしむとて朕がゆかりの者なりおはれと覺しめせ（紫の）に武藏野の草は皆がらおはれとぞと申さしめ給ふ故とも『源氏』一部の中に紫の上女主人の事をすぐれて書きなしたる故に藤式部の名を改めて紫式部と號せられけりともいひて傳説多端にして孰れを是と定めんに由なし。されど當時の事情を察し式部の性質を推して考ふる時は萩原廣道がいへるが如く紫の上の事をすぐれていみじくかゝれたる故に他よりおして紫式部とはつけたりとこそ覺ゆるなれ。式部が幼時の教育は如何なりしか知られぬとも父爲時は菅原文時が高足の弟子にして漢學に精通しかねて歌にも秀で兄惟規伯父太皇太后宮亮爲頼等はた歌を以て名ありしものなればおのづから其の誘掖感化を蒙りしこと蓋し秘

少なざりしならん。資性穎敏にして強記好みて學を嗜みぬ式部曾て童女たりしをり（コノカミ）兄式部丞といふ人のわらはにて『史記』といふふみよみし時きしならひつゝ彼の人はおそく讀みとり忘るゝ處をも怪しきまでさどく暗記したりきといふ。年長ずるに及びては博覽衆に超え我が邦の物曆日記歌集の類は云ふに及ばず三史五經佛書の立理さては香合繪合歌合彈琴裁縫の諸藝に至るまで一として通曉せざるはなかりき。さればおもふに彼れが後年の傑作は天稟の詞才に依るは勿論なりと雖も遁般の博覽又幾多の詩材を供せしや疑ひなからん。况や式部は單に典籍に依りて居ながら其の誦を養ふを務めたるのみならず女子としては驚くまでに名勝古跡を歴遊して其の詩囊を豊富にするを力めたるをや。安藤爲章嘗て其の著『紫家七論』に七事共具と題して式部が詩材の由來を尋ねて判叙したるものあり頗る参考となすに足る曰はく

父爲時は菅三品文時の弟子にして高名の學者又うたなもよみて集にも撰ばれたり是れを父として生まれ 其の一、兄惟規も『後拾遺』よりはじめて末の集にも入りたる歌人なりそれが物ならひつゝやうくよみさりかつ忘るゝ所をも式部あつしきまでさとり

しを見れば聰明おのづからの神童なりけらし 其の二、幼きほどにさかしきさても女は學問さげがたきものなるに彼の學慮のさまを思ふに打つべき和漢の積書をよみ音楽以下の樂に怠らざりしと見ゆ干載集に曰はく上東門院に侍りけるを里に出でたりける比、女房のせうそこの序でに筆つたへに脂でんさいひて侍りければ遣はしける紫式部

露しげき蓮がもとの虫のれをおぼるげにてや人のたづねん

此の筆の傳授にても其の樂才おしはかるべし 其の三、禁裏院中攝家の御かたに参り遊びて元日節合よりは下め道難に至るまで恒例臨時一とせの公事或は歌合給合香合蹴鞠など優なる事のかざりに其のまなこ明きたり 其の四、時代もあまりかみつかたならず又衰世ならず中葉にして文質かれたる世に生まれたり 其の五、須磨、明石、住よし、難波、初瀬、いし山、宇治、大原野、嵯峨野、にし河、ひがし河、江口、神崎のわたり小野のおく、くらまの谷、ひみの山、鳩のみれなど女にてはあまりあるまで名所舊跡を歴遊したりと見ゆ是れみな才氣のたすけとなり彼の鹽津山にてよめる歌は父が任國へ下りたる時などの作なるべし 〔古云、鹽津山をいふ道を行くに股の紫式部をいふやらしきまゝになくほい鹽津山にふる道はからき物に玉かづらの巻に常陸の事を書けるは外祖常陸介爲信或は母の物がたりを開きたるにや 其の六、一部の意と聞き男にては新しくこまやかならぬものを女なればこののおもひも、らぬ事まで筆をわたしたり女にても上の品たる人は下さまのわざを知り給はずまして下のきざみは如何上を思ひおよばんや式部たま／＼中の品に生まれておもひ到らぬくまなし 其の七。

と以て紫式部が詩材の豊富なりし所以を窺ふを得べし。

さて紫式部はかく學殖豊にして才藻衆に勝れたりきと雖も當世の士女が淫蕩靡浮なるには似ず謹慎以て事を奉じ謙遜以て人に接するを常としたりき。即ち自ら其の『日記』の中に記して、襟能うすべて人はあいらかにすこし心掟ココロサキヤのどやかにあち居ぬるをもと／＼してこそゆゑもよしもをかしくうしろやすけれといへるは蓋し式部が處世の要訣として平素心肝に刻銘せしところなるべし。されば其の素行のすべて謹慎にして謙讓を旨とせしも皆此の心おきてより自然に出でたるを知るに足る。又『日記』に

すべて人をもどく方は易く我が心を用ひんとはかたかべいわざをさは思はで先づ我れさかしに人ななきになし世をそしる程に心のきはのみこそ見えあらはるれ

といひて人を非としおのれを是とする驕慢自負の心を斥け

男だに才がりぬる人は如何にぞや花やかならずのみ侍るゆるさやうく人のいふも聞きさめてのち一さいふ文字をだに書きわたし侍らすいと不調法に淺ましく侍り暇みし文などいひけん物目にも止めずなりて侍りしにいよくかゝる事式部を日本紀、事局を名つけし事を聞き侍りしかば如何に人も傳へきいて悪むらんを耻づかしさに御屏風の紙に書きたることをだにえ讀まね願し侍りし

と云ひて謙讓の意を表せり。されども紫式部は決して因循姑息妄りに世に媚ひ人に阿るが如きものにあらず能く中庸の徳を守りて節を完うせんことを欲へり。「などか必ずしもおもにくくひき入りたらんが賢からん又などかひたゞけてさまよひさし出づべきぞ能きほどに折々の有様に從ひて用ひんことこのいと難きなるべし」と書きたるにても容易に之れを推測するを得。此の外にも斯かる例證尙いと多し。

かゝれば紫式部は夫宣孝に事へても貞淑能く婦道を盡したりしや知るべきのみ。長保三年四月宣孝逝きての後は其の女と共に寡居して専ら風月の樂しみに哀悼悲愁の情を紛らしぬ。其の後寛弘二三年の頃より一條院の中宮上東門院彰子に仕へて侍講など折々務めたるよし其の『日記』に見ゆ。世或は傳へて此の頃、時の

關白にして中宮彰子の父なる藤原道長公の妾となりしといふも勿論訛傳にして『日記』を見ず式部を知らざるもの、僻見たる毫末も疑ふを要せじ又若かりし時に西宮左大臣高明公と私通せりきと云ひ傳ふるはた辨ざるまでもなく時代相違せり。式部が終焉の年月また審ならぬと大凡後一條天皇の長元四年の頃なるべしといふ。二女あり長は賢子世に大貳三位とて『狹衣物語』の作者なり次を辨、局といへり。

そもく紫式部が其の大作たる『源氏物語』を著はし、は何時の頃にてありけん是れにつきても種々の臆説傳はりたり。一には即ち式部が上東門院に宮仕へせし頃村上天皇の皇女大齋院選子内親王より上東門院にめぐらかなる物語やあると所望ありしに『うつぼ』『竹取』やうの古物語は目馴れ給ふべければ新らしく作りて奉るべきよし式部に仰せ給ひぬ。かくて式部は上東門院の仰せ蒙りしかば石山寺に參籠して此の事の成功を禱りけるに折りしも八月十五夜の月湖水に映りて心澄みわたりたるまゝに物語の風情心にうかびければ其の趣向忘れぬさきにと佛前に在りける大般若經の料紙を請ひうけて先づ須磨「明石」の兩卷の稿をぞ起

こしける。其の後式部次第に稿を續ぎて五十四帖になして上東門院に奉りしを
 上東門院更に當時能書家の聞こえありける權大納言藤原行成卿に清書せしめて
 大齋院にまゐらせたるものなりといふ説是れなり。されども古人も既に云へり
 し如く此の物語の名作なりしより更に其の縁起を尊くせんとして案出せし虚構の
 説なること辨ずる要を見ず。隨うてまた世に此の物語は觀音菩薩の冥助により
 てなれりなど云ひ傳ふるもあらぬ僻言なるを知るべし。故を以て最近の學者の
 推定には長保の末寛弘のはじめ式部寡居して私第に在りけるころの徒然に作爲
 せるものならんと云へるを正確なる説とせり。此の書式部生前にも既に世に持
 てはやされて趣からざる賞讃を受けしと見ゆ。即ち一條院御覽ありて不可説の
 物なり式部は『日本紀』をこそよく見たりけれと仰せられしより彼れが日本紀局
 と號けられたる如き又は左衛門督公任あなかしこ此のわたりに若紫やさぶらふ
 と云ひつゝ式部をうかひたりし如き孰れも以て例證となすに足る。
 此の物語一部の趣向は帝王三代及び源氏の君一生涯に亘る物語にて全篇すべて
 五十四帖を以て成る。五十四帖とはすなはち

桐つば	はゝき木	空蟬	夕がほ	わか紫
末摘花	紅葉の賀	花の宴	葵	柳
花散里	須磨	明石	薄標	蓬生
關屋	繪合	松風	薄雲	朝顔
少女	玉かつら	はつ音	胡蝶	螢
とこ夏	線火	野分	御幸	藤袴
楨柱	梅が枝	藤の末葉	若菜上下	柏木
横笛	鈴虫	夕霧	御法	幻
雲隠	匂宮	紅梅	竹川	橋姫
椎の本	總角	早わらび	やどり木	あづま屋
浮舟	かげらふ	手習	夢の浮橋	

をいふなり。此の中「雲隠」の巻は巻の名のみにして文なし、さるは光源氏の薨去せ
 られし趣を暗示せしものなるべしと云ふ。されば、今の世に又別に「雲隠」の巻と稱
 するものあるも全く後人の假作に出でしにて見るに足らず、山路の露として、夢の浮

橋の巻の末にあるもまた同じ。さてかく此の物語は全篇五十四帖を以て成りぬと雖も大體より云ふときは其の結構脚色は二段に分ちて見るをよしとす。即ち前なる四十四帖は専ら光源氏の君と紫の上とを男女の主人公として雑多の人物と事件とを配合鹽梅し後の十帖は源氏の子薫大將及び匂の宮を以て男主人公とし之れに配するに大姫君、中君、浮舟の三女を以てしはた許多の人物事件を錯出して敘事の變化を務めたり。故に古來此の後の十帖をば前なる四十四帖より引きはなし別名を附して「宇治十帖」といへり。但し「宇治十帖」を以て紫式部の作にあらずして其の子大貳三位の手になれりなどいふは取るにも足らぬ僻見に過ぎず。

さてかく敘述し來ればこゝに講述の順序としては此の物語の梗概をあぐるをもて正當なりと信ず。されども此の物語が久しく世上の賞讃を博せしより「藤紫田舎源氏」又は「源氏物語忍草」の如き翻案若しくは梗概やうのもの普く俗間にまで弘布して人々の熟知する所なれば今更之れをものせん必要もなく且つは浩翰なる物語の事として其の大體の筋目に書かんもかゝる略史の能くすべきにもあられ

ねば全くこれを省略しつ。されば尙未だ本書を繙かざる人にして梗概のみにても知らんとするものあらば須らく前に擧げたる「忍草」又は「源氏小鑑」十帖源氏」などに就きて之れを見るべし。

されども紫式部は如何なる主意をもてかゝる物語をば著作せしか従來世人は此の物語に對して如何なる稱讃を與へしか又實際の價值は如何に等の數項に關しては尙聊か記載せざるべからず。蓋し是等の數項は古來幾多の評釋家が論難辨析して而も今日に至るまで未決に屬するもの「源氏物語」を觀察攷究するに就きては此上なき重大の問題なりと信ずればなり。

そも「紫式部」が此の物語を著作したる主意に就きては古より種々の説ありて或は是れを以て勸善懲惡の趣旨を明かにせんとするにありきといひ或はこれを假りて好色の禁戒を諷示せんとするにありきといひ甚だしきは是れによりて儒佛の玄理を談ずるがためなりきとも云へり。要はあしなべて小説若しくは詩歌の類が其の直接の目的とする觀美の快感を促すことをば二の町にして或種の理窟を寓するにありきと解するものゝ如し。然れども是れみな此の物語の中にな

まゝ漢學若しくは佛教の思想又は當代の風俗習慣等の痕跡の多少見ゆるによりて揣摩したる附會の説たるを免れじ。おもふに式部が此の物語を著作するに當りては別に前述の如き判然たる寓意ありてにあらざ當代に流行せし他の物語と等しく單に消閑の具にとりてものしたるに過ぎざりしなるべし。『源氏物語』の中に著者が作中の人物を假りて物語に對する自家の所見を表白せしと思はるゝ句あり即ち蓬生の卷に

はかなき古歌物がたりなごやうの御すまび事にてこそつれなくをもまぎらはしか
る住居をもなぐさむるはざなめれ

といひ又盛の卷にも

長雨例の年よりもいたくして晴るゝかたなく徒然なれば御かたなく給物語などのす
まみにて明かしくらし給ふ

といへるなど以て式部かすべての物語に對する見解を知るべく又併せて其の『源氏物語』を著作せし意趣をも窺ふを得べし。即ち彼れが『源氏物語』を著作せしは往昔世人の云へりしが如く勸善懲惡のためにもあらざ好色を禁戒せんの意にもあ

らざ又儒佛の道理を談せんがためにもあらざ唯他の消閑の一具たらしめんと欲せしなり。故をもて若し讀者の心中に反省若しくは悔悟の念など起こすことあらば其は著者なる式部にとりては洵に豫想外の結果たりしのみ。かく式部は此の物語をもて消閑の具たらしめんと欲せしかば勢ひ其の作の面白からん事を求めしは理の當然なり。或は人情の熹微に入りて其の妙を寫し或は運命の數奇なる次第を描きて讀者の同情を促し且つは多趣ならんことを務めぬ。盛の卷に

かゝる世のふるこそならでは實に何をかまざるゝ事なき徒然をなぐさめましさても
此のいつはりごもの中にげにさもあらむさあはれを見せつきんくしう續けたるはた
はかなし事さ知りながら徒に心うごきらうたげなる姫君の物思へる見るにかた心つ
くぞかし又最さあるまじき事かなさ見るくおどろくしくさりなしけるがめおど
ろきてまづかに又開くたびはにくけれごふきをかしきふしあらはなるなどあるべし

といへる如く虚構なる事柄の中にも讀むものをしておのが身に引きくらべてあはれどもをかしたも感ぜしめんとを旨としぬ。かるが故に式部は『源氏物語』二部を通じて本居宣長が所謂物のあはれを寫すことを力めたり。蓋し物のあはれと

いふことは何れの世如何なる人にも志かあれ殊によるづ優柔を旨としたる當代の上達部殿上人さては宮嬪などの輩にとりては同情を促す最上の要件たりしを以てなり。而して彼れ式部は又此の物のあはれを寫すに主として戀の一事を採りぬ。これ物のあはれの最も強く烈しきは戀に去くはなく剩へ其の時代の浮靡浮蕩なる讀者にとりては無上の趣味を感じしめしならん。或は戀ふべからざるを戀ひてかなはぬ戀に浮身を寢し或は思ふべからざるを思ひてはかなき戀に心を痛むるは如何に當代の人士が見て以てあはれと覺えし事なりしぞ。式部は能く是等の消息を知りしが故に當代の人士が命と頼みたる戀の一事をもて物語の主眼とし當代の人士にあり得べき又は想像し得べき事件を點綴してあはれを感じしむべく一部の趣向を作りたりと覺ゆ。又蓋の巻に

その人のうへまで有りのまゝに云ひいづることこそなけれよきもあしきも世に經る人の有様の見るにもあがす聞くにも餘ることな彼の世にも云ひ傳へさせまほしきふしづくを心にこめがたくて云ひおきはしめたるなりよきさまに云ふさてはよきことの限りをえり出で人にまたがはんさては又あしきさまの珍しきことを採りあつめた

る昔かたぐひにつけたる此の世の外のことならすかし

といへり。これぞ彼れの作中に當代の風俗習慣等の著く見えたる所以にて又後世の評釋家が准據など稱へて彼の物語の主人公たる源氏の君は西三條右大臣源光朝臣又は廣幡重光少將又は西宮左大臣高明公又は在原行平納言在五中將なるべしなど云へりし所以なるべき。されども是はたま／＼其の境遇の相類似せるによりて牽強したる臆測にて式部の本意は右に掲げたる如く當代の實事をさながらに現せんと期せしにあらざること分明なり。源氏の君の聰明敏智にして容顏はた美はしく詩歌管弦朗詠の道なれどつ足らはぬどころなく心ばへさへこまやかに情ふかく物のあはれを思ひ知れる又紫の上のらう／＼しくかたちのめでたきのみならず物のあはれ知りながら萬につげて爛雅なるなど孰れか式部が所謂「よきさまにいふ」としてはよきことの限りをえり出でたるにあらざらむこと、に於いてか知る式部は其の物語の材料としては當時の社會の狀態を採りしものから尙作中の旨とある人物は孰れも彼れが理想に従ひて醇化せしものなるを。『紫家七論』に「紫の上のらう／＼しくおほどかなるものからあもりにして用意

ふかく明石のうへの心たかきものからへりくだり、花散里の物ねたみせず、藤つばのきさきの過を悔いて早く入道し給へる、朝顔の院の深く名を惜しみ給へる、玉かつらの上の言よく人々の悪想を逃れ、總角の君の父宮の遺戒を守りたるなど様々の婦徳をえるし殊に品定めにあだなるを返けて實なるをすゝめまばく警戒を示したるは式部の心おきてなりといへりし如く彼れが理想とせしところ茲に現じたりと見るを得べし。

かく『源氏物語』は大牀の上より見れば寫實的なるよりは寧ろ理想的なる傾向を有せりといへども彼の馬琴の『八犬傳』に見えたる八犬士が悉く抽象的想念を着衣せしめたる如きとは全く異なりて孰れも世間的の人物たらざるはなし。随うて彼れのは道義の化身なるからに其の人物完全無缺の性情特質を有して秋毫の非難すべき點なしといへども是れのは淑徳の中にも尙醜惡伏し醜惡の裡にも尙淑徳の存するものあり。源氏の君の諸種の美性を兼ねたる中にもまゝ好色の癖ある又は未摘花の君のよろづふつかなる中にも氣高くして禮儀を失はざるなど其の一例とすべし。故に予輩は『八犬傳』を繕きては往々其の八犬士の不自然なる行動

に吃驚することありといへども此の物語をよみては唯、其の巻中の人物の自然にしてそのあたり世上の人に接する心地するのみ。是を以て此の物語は其の結構單純にして變化少きに似ず一たび繕けば興味津々として盡くるを覺えず轉々巻を措くに忍びざらしむる趣致あり。

これまことに式部が盤筆の趣くところものづから詩神の呼吸を得て人物の行動事件の變替景色の配合共に其の宜しきにかなひ前後照應齊一して自然の活動をなし露ばかりも斧鑿の痕跡を止めざるに依るべし。萩原廣道が此の物語に種々の法則ありとて論じたる條下は主として文章の上に就きてを云へるものから又物語の結構につきて式部の用意を想はしむるものあり。曰はく

さて其の法則のやうは如何にさいはんに先づ一部にわたりて一部の法則あり一卷ごとに一卷の法則あり一段ごとに一段の法則あり一章ごとに法則あり一句ごとに法則ありていさゝかなる事の末々まであやしきまでたらひたる法則あり。其の一部にわたる法則といふは時世年月の移るを經さし人事のゆきかはるを緯として物語の趣を作りなすに時世年月の移り行く經のかたにては上の條にもかつく云へる如くまづ桐壺の帝の大御代其の次に朱雀院の帝の御代其の次に冷泉院の帝の御代其の次今上と記したる帝の御代と定めおきて其の中間に必ず物語の空しき年をおかれたる是れ

法則なり。又源氏の君の年老いて生まれ給へるより大凡五十年餘の事を五十四帖に書きつらねて右の御代々々に相かなへて其の御代さまの趣によりて此の君の上は盛衰のあるさまを書き分けられたる是れ法則なり。かくて其れに従ひてさま／＼の人の上をも年老いて大方相かなふべく齡の程をおもはせたる是れ又法則なり。宇治の巻々には又斎君の齡をもて年をおいて句宮を並へ擧げたる是れ又法則なり。かく定めおきて扱人の世の行きかはり出でくる事どもを緯にあやどりて語りゆくにつけてさま／＼の法則あり其は上の條にも云へる如く先づ光源氏の君さいふを立て一部の主とし其れに對へてかゞやく日の宮中宮をとり出でたる是れ光さかゞやくを對へたる正對の法なり。然れども藤壺の宮の事はかくるへ事なる故に其の所縁に御姪の紫の上を取り出でたる是れ藤の花のゆかりに紫さいへるにて云はゞ藤壺の宮の代りの如きものなれば始終源氏の君に相偶ひたるはずべて此の紫の上なり是れ奇對さいふべし。かくなしたるは唯に光さ赫さ相對へたらんよりは今一きは心深く見えてかけても及ばぬ結構なりさいふべし。さて其の光る君の御末を語るに齋の大將さ句兵部卿宮を並べあげたる是れ光りのなごりに句ひさ齋りさをさり出でたる是れはた正副の對法にて且源氏の君のおもかげをうつしたる照應なり。又源氏の君に相副へて致仕の大臣をあらはして其の事どもを助けあやどりたる是れも正副の對法なり。又二條の大臣弘徽殿の皇后の事をあらはして源氏の君の御族さ御中のよからぬさまにさりなして物語の種子さしたる是れ所謂主客反對の法なり。さて又紫の上は何事

もめでたくたらひて物語の中の女の主さある人なる其の反に未摘花の君さいふかたちわるく心もおくれたる人を擧げて紫さ紅さむかへたる是れも反對の法なり。さて又人々の上を語り出づること其の人々によりて一樣ならず様々事をかへて書き出でられたる中に六條の御息所の事を書かれたるはいさ／＼めづらかなり。夕顔の巻に六條わたりの御忍びありきの頃さいひ出で其處に通ひ給へるさま又變化のそれによそへてあらはれたるさまなども書きながらいまだ誰れさも其の人をばあらはさず、はるかに末なる葵の巻に到りて始めて前坊の御息所なるよしを云はれたるなどは、いさ思ひの外の筆つきにていさ／＼めでたし是れいはゆる伏線の法の奇トキもの也。又朝顔の姫君は帝木の巻に空蟬の方にて女房どもの源氏の君を評する語のうちよにほはせおきてさて次々に願はしかゝれたる是れも同ト法なるに一人は御むすめの齋宮にそひて伊勢へ下り給ひ一人はみづから賀茂の齋院に立ちたまへるなど伊勢さ賀茂さ相對へたるにて件の伏線を引き動かしたる書きさまも知られたり。さて又葵の巻に賀茂の祭の車あらそひの事によりて御やすどころの生きすだまの事をいひ其れによりて葵の上はみまかり給ひしことより源氏の君の御息所をうさみ給ふを恨みて終に伊勢へ下り給ふなども伊勢さ加茂さ葵さ赫さ對へたるに似たり。さて物のまぎれのいさ／＼かしく御事なるに其れをしも書かれたるは作りぬしの心まらびありげに見ゆる事上の條にいふが如し。然るに其の事によりて源氏の君は太上天皇に准へられ給ひて此上なき榮えなきはめ給ふさまに書かれたる其の報應をかゝんさて

女三宮の物のまぎれをとり出でたる是れ照對の法なる中におのづから報應を示したるものなり。さる故に夜居の價部が冷泉院にほのめかし奉り辨のおもむが落君にあらはし申したるも共に同トき趣なるはわざと其の照對なるをあらはしたるにていさく心深きものなり。さて柏木の君は此の事の物思ひつもりてつひに失せ給ひ其の未々落葉の宮は夕霧の君むかへせり給ひ致仕の大臣の後は紅梅の右大臣方に定まれるなども皆此の報應のなごりを示せるなるべし。又夕顔の君のうかれたまひたるに浮舟の君のよるべなきをむかへたるも照對の法にて某の院と宇治の宮とをむかへ源氏の君と頭の中將と二かたなるに兼君と勾宮との二かたを對へ五條の宿の八月十五夜と三條の家の九月十三夜とを對へて共に御車に載せて出で玉ふさまに書かれたるも正しく照對を知らせたる也。さて一人は變化のためにせり殺され一人はこたまにかすめさられたるなどもすべて同ト筆づかひなる中にたてたる心なき女のよるまどき趣を匂はせたり。さて夕顔のなごりを玉葛にうつしても尙浮舟と對へたる法ありて筑紫と常陸と東西に對へ大夫の監と常陸の介とのむくつけくあらびたるをむかへ長谷寺と小野の庵とむかへたりと見ゆる事あり。さて又須磨のうつるひは源氏の君のまげしのおさるへを書かんためなるを早く若紫の巻に其の端を願はして北山にて真清に明石の上のこさを語らせたる是れ其の伏案にて遠く須磨明石の巻を書くべき結構の法なり。これを見ても彼の石山寺にて須磨明石の巻より作られたりなさいふ菫悦のみだりなるを笑ふべし。又花の宴の巻は桐壺の帝の御代のかぎりにて

源氏の君の若きさかりのきはみを願はしたるに櫻に匂ふ臘月もて内侍のかみの物のまぎれを願はしおきてさて其の事のつもりてつひに須磨にさすらへ給へるに明石の入道むかへせりていつきかしづき奉り其處より終に都へかへり給ふこさを秋の月によせて書かれたるに第三年の八月十五夜初めて参内し給ふよしを書かれたるは春の花に出で來そめたる福の秋の月にさけ果てたるにて盛衰の因縁を月花によそへて思はせたる是れ所謂首尾相應する法なり尙此の外にも源内侍の年老いてすきかましきに近江の君のまたごにはしたなきを對へ博士の女のさえがりたるに大學の儒者のかたくななるを照したるたぐひ聊のたはむれごの上までも其の法なしといふことなし云々。さて事が申にもいみつきは雲隱の巻を立てながらすべて詞を略せられたる此の事のみはいさくめでたくいさくめづらしくして、やまこもるこし古へ今にわたりてかゝる筆づかひのみどき書は他に又ある事なし是れ省筆法のいみつきものにてかへすくもめでたし。然るをさきくの註どもによしもなき佛説などを引いてさまく用なき事をば云はれたれど此の雲隱のさるべきよしを解かれたるものなきはいさ口をしうあかぬことなり、まして彼のつたなき物を作り出で、其の代りなど云ひし人は所謂大海の一滴だに作りぬしの心をえ知らぬものにていさく味氣なくかたはらいたし。そもく此の物語は桐壺の巻更衣の失せ給へるを帝のいたく歎き給へるより書き起こされたるに楊貴妃の例を引きいで、たづね行くまぼろししがなつてにても魂のありかをそこさ知るべくさ詠み給ひし事を載せたるよりつぎ

つぎに源氏の君の榮えを書きもて來れるが終に御法の卷に至りて紫の上の失せ給へる是れ物語の主とある人のまづ一人かくれたまへるにてやがて光源氏の雲隠れ給ふべき結構なり。さて幻の卷に至りて正月より十二月まで彼の紫のおんおもひにていたく歎き給ふよしを折柄時々の月花水草によそへて書き盡されたる趣いともく物かなしくして此の御歎きのゆゑに源氏の君はやがてかくれ給ふべきやうに書かれたる其の中に雲井をわたる雁を見て「おほ空をかよふまほろし夢にだに見え來ぬ魂の行衛尋れよといふ歌を詠みたまへるをやがて卷の名におほせたるは桐壺の末を結ぶものに似たりよしや此の論は當らすしもあれ、かくなしおきて源氏の君のかくれ給ふところを書くまじき結構させられたるはたがひなくぞ覺ゆる。彼の幻の卷の末に「物おもふと過ぐる月日もまらぬまに年も我が世も今日やつきぬるといふ歌を詠みたまへるよしあるは源氏の君の辭世めきたる歌にしてやがて雲隠れ給ふべきを示したるもの也。さて雲隠れの卷の中にそこばくの年月をこめおきて匂宮の卷のはじめに光りかくれたまひにしのち云々書き出で其の御末の事どもをついでられたる筆づかひいはん方なく心深くして更にくかけても思ひ及ばぬ事どもなりかし。すべて世にあらゆる作り物語ども大和もろこしを云はずいづれもく其のむねと立てたる人の上をば限りもなき榮えを極めたるさまにして終らぬはなし。されどもそこに至りては殊更に作りたるあさけさくさ見えていと不調法に見ゆるが常なるを此の物語は既に藤の末葉の卷に其の榮えのきはみを書きをへて又若葉の卷より其の報恩の事ども

を書き出で此處に至りて其の終りをつゝみ省かれたるからにいさゝかも作りこまめきたることなく實にありし事の如^下覺えて云ひまらぬ味ひあり。又舊説にも云はれたるやうに此のかくれ給へる事をかき出でんには此處にもかしこにも同トやうなる歎きのさまを書きあらはさざれば事足らず借ては同ト筋の重なりていさめづらはしかるべきを其れをば省きてなかくに幻の卷一帖に光る君の御歎きを盡したるなどいさもくめでたき文章の法と云ふべし

と。然れども前なる四十四帖の中に見えたる人物は其の性情特質率ね中和にして善惡共に極端なるものなく稀に多少の缺點を具へたるものありといへども未だ非常の災禍苦悶を作るまでに甚しからず。例へば源氏の君の藤壺の女御を犯せる如き固とわりなき戀情に出づと雖も相互の思慮分別により悲慘の結果をなさしめるのみならず却りて源氏の君が後榮の禰染たる越あり弘徽殿の嫉妬は桐壺の更衣を畏縮せしむるの餘り病死に到らしめ終には源氏の君をさへ須磨の浦輪の配所の月に世のうたてさを感じしめしことありといへども是れはた後に明石の上を得しむる伏線たるに似たり。かるが故に四十四帖を見渡せば時に隆替あり事に起伏あり人物はた盛衰浮沈なきにあらざると雖も打まかせて云へば諸の美

性才能を兼備したる王孫公子が壯麗なる平守城裡歌舞管絃の聲洋洋たるうちに華奢風流を盡くして優情放逸たゞ癡狂を事とし而も大なる罪過の以て非常の波瀾を生ぜしむべきものなし。尙くはしく云へば此の四十四帖に於いてはわりなき戀かなはぬ戀逢ひがたき戀又は見ざる戀に懊惱苦悶することありと雖も或は社會の制裁道義の衝突により大破裂を起すべき性情の素更に見えざるなり。故に是等の卷は紫の上の死を以て大局を結び幻の卷に於ける愁歎より引きつゞきて源氏の君の薨去をほめかしたりといへども是等は其の天壽を全うしたるものにて其の一生には大なる危難も非常なる憂苦激烈たる懊惱もあることなく思ふがまゝに其の希望を満足し爲すがまゝに其の願慾をかなへ幸多き運命の行路を過ぎ行くのみ。

志かる後なる宇治十帖はいたく是れと趣かはりて其の主人公の運命稍悲壯劇の素を有す。おもふに式部は前なる四十四帖の卷々に於いて光源氏一流の圓滿幸福の人物を描き終りたれば此の十帖にては其の反對の不完全なる生活の状態を寫さんの意にてもありしものか。彼れの主人公は諸の美性を兼備したる圓滿な

る人物なりしに是れのは稍偏僻なる性情を具ふ。即ち薫の大將の志めやかにして物のあはれ深き匂宮のあだしくして好色のくせある恰も物のあはれ深く人の情も且つ思ひ知りながらまゝすきくしくあだなる源氏の君の性情を折半したる觀ある是れなり。大姫君中君浮舟の君の如きも彼の紫の上とは大に異りて其の性情に幾多の缺點あり。こゝをもて此の十帖の物語はあつから彼の圓滿なる美性を兼備せる人物を主人公とせる四十四帖の趣とは異ならざるを得ざるなり。懊惱あり苦悶あり憂愁悲歎はた充満す。二者を喩ふれば彌生の空のうららかなるまゝ花散らす嵐はあれどまづ樂しきは前なる四十四帖なり冬枯の野邊の時に小春日和はなきにあらぬと見渡したるところ荒涼たるは此の宇治十帖のさまなりとす。廣道曰はく此の宇治の卷々は始めに薫君と匂宮との傳を匂宮の卷に云ひ出でおきて偕て橋姫の卷より八宮の姫君たちの御事を書き出でられたるに是れよりさき源氏の君の事を語りたる卷々とは其のさま太く事かはりていゝ志めやかに哀れ深く人の情のさりがたきかぎりの事共をいとく切に連ねられたるものにて八宮の世に詔びて宇治へ引きこもり給ひ差しつぎて北の方失せ給

ひ姫君たちの孤となり給ふをあふしたて給ふ御心づかひより起こりて佛の道に御志深くなり行ひなどせさせ給ふさま又薫君の柏木の君の事をほの聞き知りて身を味氣なく思ひなし給へるより終に佛の道に志深くなりて物學びにとて宇治へあはしたるさま又大姫君の中君をいかで世に在らせ奉らんとて我が身を棄てていたづき給ふさまなどいどくあはれ深くしてうち讀むに涙もはふれぬめり。さてかくとりくりに打ちおめりたる佛心の末つひに薫君大姫君に懸想し給ひしを言なくのがれんとて中君に逢はせ奉り給へるを尙あかずおもほして匂宮を誘ひて中君にあはせそめたまへるに大姫はかなくなり給ひしかば又中君に思ひうつりて取りかへさまほしく覺え給ふこと中君の其れをのがれんとて浮舟の君をかたしろにとすゝめ給ふ中に匂宮に事いできしこと其れより薫君の浮舟を宇治に据ゑて通ひ給ふを匂宮きゝ知りてひそかに通ひ給ふほどに終には顯はれて浮舟の君の身を投げんとせし事などいづれもくさりがたきあはれの限りにてことわりならぬもなきやうなるは彼の源氏の君の花やかよにぎはしかりし御さまとは此上なく昧をかへられたるものにて今一きは珍らかにあはれ深し。たゞ

匂宮をのみ源氏の君よりもあだしくにぎはしきかきなし其れにつけても物語の趣をかまう書きめぐらされたりと見えたるを其れだに浮舟の巻に至りてはいとほしきまでに見えたるはいともく上手の筆つきといふべし。大方源氏の君の御本性はあながちなる事をおぼしとむるくせはありながら又いと人の情をも思ひ知り物のあはれ深くして花も實もあるさまに書きなされたるさまは此の物語の主とある人なればなり。其の名残りを二かたに分けたる法なる故に薫君は源氏の君にもまさりてまめやかにあはれ深き御心ばへに書きなし匂宮は源氏の君にもまさりてにぎはしきあだめき給へるやうに書きなされたる是れ光るといひ薫るといひ匂ふといふ名につきて其の心ばへを顯はし分けられたるに其の人々の本性を心に入りて見たらんやうに書かれたるはいともく珍らかにてめでたしといはんにも餘りあり。さて浮舟の君の尼になりて小野に隠れ住むことを薫君の聞き知り給ひて常陸介の子の小君を御使にて小野へ遣はし給へるに浮舟の尼は耻らひてえしも逢ひ給はぬば小君の空しく歸りまゐりたるによりて薫君のさまくにあはばすことあるどころにてすべて一部を書きといめられ

たるは鬼神も得知るまじき筆づかひといふべし。かゝるこそ此の物語は讀み果てたる後も擱きがたく残り多くて又くりかへしくりかへして見れども幾たびも飽くことなくして餘情の極まりなきにはあれど能く宇治十帖の要を得たりといひつべし。

さてかくの如く『源氏物語』は前後其の趣を異にすされども其の人物の性情云爲事件の變替景色の配合等は共によく統一を保ちて自然の趣致あるは一なり。而して古來世の評釋家或は此の物語をさして晦淫の書となし或は諷諭の文となすものは戀より起こる動作を基礎として物語の趣向を設けまゝ云ふに忍びざる事件をも包含するところ尙よく自然の實情に合符して讀者の解釋に従ひて其のさまを別にするに依らざるなきか。若し此の推定にして誤るとなくば是の如き雜説の出でたりしはたまたま此の物語の現する天地の大にして美妙なるを證明するものと謂ふを得べし。

又其の文章は周到精密にして而も流暢能く其の想の巧妙なるに應じて毫も遺憾の點なきは殊更に云ふを要せず。『紫家七論』に曰はく此の物語のうち和歌並ひに詞とも『萬葉』『古今』『伊勢物語』『竹取』などの古跡を放れて而もおほどかにてやすらにやさしくおほかた我が邦の風流を盡くしたれば見る人をして倦む事知らざらしむ洵にやまどぶみの上なきものなり。全篇は富貴温潤の氣象にして官家の文章なれども中に山林出世あり市井田家あり貧困哀傷あり閨情風景は卷ごとに見えて情を寫し景に象とる事まのあたり其の人に向ひ其の所に遊ぶが如し。全体は傳にして又おのづから序の跡あり跋あり記あり論あり書ありて諸跡具はれり。彼の帯木の卷の品定は殊に奇妙なるものなり。爲章曾て其の章段を改め侍りけるとき序して云はく論破あり論承あり論腹あり論尾あり魚より細に入り俗より雅におもむき繁より簡に歸し波瀾頓挫照應伏案などいふもろこしの文法おのづから具はり其の氣脈は悠揚として寛裕に其の文勢は圓滑にして婉曲なり是品定のみならず一部に『史記』『莊韓柳歐蘇』にひとしかるべし女の筆にてはめづらかり此の忍をつくべし。『史記』『莊韓柳歐蘇』にひとしかるべし女の筆にてはめづらかりに怪しく式部は賊に古今獨歩の才と云へしと。げに情を寫し景を叙し事を論ずるに一として其の法を具へ其の妙を究めざるなし。就中優美溫柔の情操若しくは光景を描ける章はひとへに議論を旨としたる文よりも一層其の妙趣多きを覺

ゆ。是れおもふに優美なるは和文の長所にして溫柔なるはた式部の特質たりしに依るものならん。山水風月の景を細叙せる趣の時としては花やかに時としては物さびしく又哀別離苦の情緒を描寫せる次第の章句肺腑より出で、或は句ごとに涙あるを覺えしめ或は章毎に嗚咽の聲を感せしむるなど最も作者の伎倆顯著なる所なり。若しそれ廣道が春夏秋冬をりくくの景を叙せるところは皆其の時々にあらはせる人々の心にあはせ事物のあはれを深くせんためなりなど云へりし事の如きはわざ／＼云ふを要せんや。尙委しくは次の文例を讀みて其の玄妙なる趣致を會得すべし。爰に掲ぐるは桐壺の更衣逝去の後の條なり

野分だちて俄に肌寒き夕暮の程御心の常よりもおぼし出づること多くて観負の命婦といふを桐壺の更衣つかはす。夕づく夜のをかしき程にいだし立てさせ給ひてやがてながめおはします。かうやうのをりは御あそびなどせさせ給ひしに心ことなる物の音を掻き鳴らしはかなく聞こえ出づる言の葉も人よりはことなりしけはひかたちちの御につと添ひておぼさるゝもやみの現にはなほ劣りけり「おぼさるゝ」は玉のやみ古歌の現は定かなる夢にいくらもまはらざり

はち定めぬらぬ猫はのなれど此の命婦かしこの更衣にまかすて其の門かひき入るゝより氣色あはれなり。更衣はのやもめずみなれど人ひとりの一人の更衣御かしづきに家の内とかく繕ひたてしめやすき程にすゝし給ひつるを更衣給ふ心みやみにくくて臥し走づみ給へるほどに草も高くなり野分にいと荒れたる心地して月かげばかりぞ八重葎にもさはらざさじ入りたる。命婦南あもてにおろして母君に對面母君とみにえものも宣はすて云ひけるは「今まで生とまり侍るがいと愛きをかゝる御使の蓬生の露分け入り給ふにつけても耻づかしうなんとてげにえ堪ふまじく泣い給ふ。命婦の「まありてはい」とい心苦しう心きも盡くるやうになんぞ給ひし典侍のへ門奏し給ひしを我物おもひ給へ知らぬ心地にもげにこそいと忍びがたう侍りけれとてやゝためらひておほせごと傳へきこゆ。老ばしは夢かどのみたどられしをやうやう思ひまづまるにしもさむべきかたなく堪へがたきはひかにすべきわざにかとも問ひ合すべき人だになきを忍びてはまあり給ひなんや。若宮のいと覺束なく露けきなかに過ぐし給ふ心苦しう覺さるゝを疾くまあり給へ

などはかしくしうものたまはせやらず。むせかへらせ給ひつゝかつは人も心よわく見奉るらんとおぼしつゝまぬにしもあらぬ御けしきの心苦しさにうけたまはりも果てぬやうにてなんまかで侍りぬるとて御文たてまつる。

更衣の母「目も見え侍らぬにかく畏しきおほせごとを光にてなん」とて見給ふ。御文の「程経ば少し打ち紛るゝこともやと待ち過ぐす月日にそへていと忍びがたきはわりなきわざになん。いはけなき人もいかにと思ひやりつゝ諸共にはぐゝまぬおぼつかなさは今猶昔の形見になずらへて物し給へ」など細かに書かせ給へり。御門の

宮城野の露吹きむすぶ風の音に萩がもとを思ひこそやれとあれどえ見給ひはてす。更衣の母「命長さのいとつらう思ひ給へ知らるゝに松の思はんことだに耻づかしういかにしてありと知られ高砂の松の思われんもいづ思ひ給へ侍れば百敷に往きかひ侍らんことはましていとばかりおほくなん。かしたきおほせごとをたび／＼承りながらみづからはえなん思ひ給へたつまじき。若宮はいかにおもほしまるにかまゐり給はんこと

をのみなんおぼしいそぐめればことわり悲しう見奉り侍るなど内々に思ひ給ふるさまを奏し給へ思々しき身に侍れば斯くておはしますもいま／＼まうかたじけなくなどの給ふ。命婦又申「宮は大殿ごもりけり。見奉りて委しく御有様も奏し侍らまほしきを御門待ちおはしますらんを夜更け侍りぬべし」とて急ぐ。更衣の母は「くれまどふ心のやみもたへがたき片端をだにはるくばかりに聞こえまほしう侍るをわたくしにも心のどかに罷でたまへ。年ごろうれしくおもたしきついでにのみ立寄り給ひしものをかゝる御消息にて見奉るかへす／＼つれなき命にも侍るかな。更衣生まれし時よりもおもふ心ありし人にての故大納言いまはとなるまで只此の人の宮づかへの本意必ず遂げさせ奉れ我れなくなりぬとて口惜しう悪ひくづぼるなどかへすがへすいさめ置かれ侍りしかばはかしくしう後見おもふ人なきまじらひは中々なるべきことと思ひ給へながら只彼の遺言をたがへじとばかりに出だしたて侍りしを身に餘るまでの御門御心ざしよろづに添けなきに人げなき耻をかくしつゝ交らひ給ふめりつるを人のそねみ深くつもり安からぬ

こと多くなりそひ侍るに其の最横さまなるやうにて遂にかくなり侍りぬれば御寵愛の却りてはつらくなんかしとき御志を思ひ給へ侍る。これもわりなき子故の思心のやみになんと云ひもやらす咽せかへり給ふほど夜も更けぬ。命婦又上も志かなん。わが御心ながら強ちに人目おどろくばかりにおぼされしも長かるまじきなりけりと今はつらかりける人の契りになん。世にいさゝかも人の心を曲げたることあらじと思ふを只此の人ゆゑにてあまたさるまじき人のうらみをおひし果てははかう打ちすてられて心をさめんかたなきにいと人わるくかたくなになりはつるもさきの世ゆかまうなんとうちかへしつゝ御志はたれがちにのみおはしますと語りてつきせず。命泣く夜いたう更けぬれば今宵すゞさず御かへり奏せんとて急ぎまゐる。月は入りがたの空清うすみわたれるに風いと涼しく吹きて蟻の虫のこゑこそ催しがほなるもいと立はなれにく草のものとなり。命婦の歌鈴虫のこゑのかぎりをつくしてもながき夜あかす降るなみだ哉に車えも乗りやらす。更衣の母

いとしく虫の音まげき淺茅生に露おきそふる雲の上人かごとも聞こえつべくなんといはせ給ふ。をかしき御贈物などあるべきをりにもあらねば只彼の御形見にてかゝるようもやと残しおき給へりける御装束一くだり御やしあげの調度めく物そへ給ふ。若き人々かなしき事は更にも云はず内わたりを朝夕にならひていとさうくしく上の御有様などおもひ出で聞こゆればとく参り給はんことをそののかし聞こゆれど君はかくいましくしき身の若宮そひ奉らんもいと人ぎうかるべし又若宮見奉らでまばしもあらんはいとろめたう思ひ聞こえ給ひてすが宮とも若宮を参らせ奉り給はぬなりけり

此の文例は素より此の物語中の妙所として掲出したるにあらず只是れによりて此の物語の文脉と又文致とを想察せしめんと欲するのみ。

附説 予輩は以上に於いて『源氏物語』に關する大脉を説明し終れり而して尙こゝに附説として記載しおかんと欲するは其の註釋書の事是れなり。おしなべて中古の文學は後世の學者の欽慕する所となりしを以て何れの書も大

方數種の註釋書なきはあらざる。就中此の『源氏物語』は古より我が國文學上の至寶として珍重せられしが故に之れが註釋若しくは評論めぐる書冊極めて多し。『群書一覽』に見えたるもののみにては既に五十九種に及べり此の外にも尙許多あらん。堀河院の註釋を加へ給ひしをばじめとして藤原定家卿の奥入同光行卿の『水源抄』西辻善成公の『河海抄』素寂法師の『紫明抄』二條兼良公の『花鳥餘情』牡丹花宵柏の『咲花抄』西三條公條公の『細流抄』同實澄公の『明星抄』九條植通公の『孟津抄』里村紹巴の『紹巴抄』中院通勝公の『岷江入楚』能登永閑の『萬水一露』安藤爲章の『紫家七論』契沖法師の『源註拾遺』北村季吟の『湖月抄』加茂眞淵の『新釋』本居宣長の『玉の小櫛』熊澤蕃山の『源氏外傳』萩原廣道の『評釋』等はその重なるものなり。今宣長の『玉の小櫛』に見えたる重なる註釋書に關せる略評を引用して其等の性質の是非を甄別し尙聊か予輩の判断をも併記して此の物語を精密に攻究せんとするもの、栗とせん。さて『玉の小櫛』に曰はく

註釋は『河海抄』で第一の物なる。それよりさまざまに是れ彼れとあれども、委らざるを彼の抄は川木居士カキノキの撰りたるものなり。の書どしを讀く者へ出だして何

事もなきく、殘れるくまなく既きあきらめられたり。さては『花鳥餘情』あり『河海』の誤れるところを辨へ漏れたる事どもを考へ加へなごすべてたよりきなる事いと多し。此の二つの抄は必ず見ではかなはぬものなり。但し誤りもいと多く、附の註などには殊にひがごのみ多くして用ひがたし。其の後『咲花抄』『細流』あり『河海』『花鳥』の誤りを正し彼れ是れと考へ加へられたり。さて又『明星抄』『孟津抄』『岷江入楚』『萬水一露』『湖月抄』など尙くさまざま、頭書や何やと多かり皆さまざまの抄どもを引き出でさしも異なることなく只すこしづゝ變れるのみなり。其の中に今世の中に普く用ふるは『湖月抄』なり。げに此の抄はさまざまの抄どもを普くよき程に頭と傍らとに引き出で師既今按をも交へすべて見るにたよりよきさまにぞ書きなしたる。さて又契沖法師の『源註拾遺』といふ物八卷あり悉く註せるにはあらで只、諸の抄にのれたる事誤れる事共に此處かしこ辨へ解きたる物也。此の人は世に異なるささりありし人なれば珍らしき事多し。すべて此の人の著はせる書どもは近き世の浮きたる既をば更にさらで何事も古き書を讀として新に見明めたること多きなり。又さきにも云へる『紫家七論』といふもの一卷、これは註釋にはあらす只此の物論の大むれを論じ紫式部が才氣など日記を引き出で、委しく考へ昔より妄説マヤコトどもを辨へなご様かはりて一ふしあるものなり必ず見べし。但し其の大むれ唯もろこし人の書ども作れる例のみ思ひて物語といふ物の趣を思はず物のあはれをむき書ける事なば未だ知らざるものにして風俗と見たる

は尙爾者心にぞありける。又吾師藤居の書も此の物語の新釋といふ物あるといはやくより聞けれど未だ其の書を見ず且其の『講考』といふ二巻を見たり。其の趣大かつ契沖爲章がいへるに似たり。新釋の例をも舉げられたり。又熊澤了介といふ人の『外傳』といふものなどもあれどひたぶるの儒者心のまわざにて物語のために更に用なし。是等をおきて世に知られぬものども尙あるべき也。そもくかくまるべの書ともはいさ許多あれども尙うはべの一わたりのことそのあれ文章のこまやかなる意作りぬしの深く心をこめたる趣など委しきくまなくまでは未だ行き足らぬものみ多かれれば只註釋にのみすがりて事の意の聞こゆるなきにして止むべきにはあらず尙細やかなることを奥深く尋ねれば得云はぬ味ひのある書ぞかし。

是れ穩當なる批判なりと謂ふべし。而して又『玉の小櫛』はさすがに宣長の手に成りしこととして正當適切なる解説多し。然れども廣道の『評釋』の精確にして且つ本文までも兼ね備へたるには及ぶべからず。只をしむらくは此の書僅に『花の宴』に終り未完に屬するを以て今日にては全篇を通じて本文を引き合せ見んとせば『湖月抄』に依らざるを得ず。『源註拾遺』『玉の小櫛』さては『評釋』等の諸書によりて是れの誤謬若しは遺漏を補ひたらば殊によからん。

五六年前大坂に於て出版したる『湖月抄』の翻刻は全く此の旨意を取りたるものか前の三書は勿論鈴木朗の説なども掲げたり。就中『國文全書』と題する集書の正篇として出でたる『湖月抄』の合本八巻は剩さへ其の第一巻に『評釋』の發端に出でたる諸の評論解説を附し第八巻に『玉の小櫛』に見えたる『源氏物語系圖』と爲章の『紫家七論』とを附したり。植字疎漏にして往々魯魚の誤りあるは飽かぬ心地すれど一書にして數書を兼有する便宜あるをもて先づは此上なき重寶の書と謂ふべし。

『源氏物語』の外紫式部に尙一の著書あり『紫式部日記』といふ。是は既に其の書名の表明する如く日記に屬すべきものなるを以て之れが評論と解説とは其の條下に譲りてこゝに全く之れを略す

其三 紫式部以後の物語

紫式部世を去りてのしちは小説的物語の創作頓挫して落日の觀あり。世に聞こえしは勿論さらぬだにも殆どなく只『狹衣』とりかへばや』の二篇僅に其の餘光を保ちしのみ。否是等とても大作『源氏物語』を見來りしのちの眼にはとかうの批判を

下すべき價値を認むるを得ず。故に予輩は講述の順序として止むなく是等の物語に就きて記するところありと雖も只かごとばかりの概略を擧ぐるのみ。

『狭衣』の物語は大貳三位の作なり。三位は前にも云へるごとく紫式部が藤原宣孝に嫁して生みたる長女にして名を賢子といへり。其の大貳三位といへりしは後に太宰、太貳高階成章に歸嫁し後一條天皇の御乳母となりて三位を賜はりたるに依る。『狭衣』を著作せし年代は審ならねど大凡『源氏物語』の以後四十年ばかりなるべしといふ。一部八卷狭衣の大將といふを男主人公に源氏の君を女主人公に立て、結構せり。而して其趣向は大體『源氏物語』に酷似せるを以て世に此の物語をば全く彼の物語の模倣に過ぎずと見做すを常とす。それかあらぬか此の物語をもて『源氏物語』に比すれば其の趣向は勿論文章はた雲泥の相違あり只其の中に散見せる歌ばかりぞ或は辛うじて彼の物語のにも比つべき。さは云へ若し是れを『源氏物語』以前の諸作に比するに豈に些少の傑れたる點なからんや。而も『竹取』等に比して世の此の物語を顧るもの拙きは此の物語が彼れに劣れるが故にあらで其の時代を異にせしが故のみ彼れは物語文の先驅にして是れは『源氏物語』に

後れて出でたればなり。比喻を假りて再言すれば彼れは未だランプの燈光を知らざるもの、行燈の光をも明るしとする如く是れは電氣燈下を出でし者の瓦斯燈の光をも尙暗しとするが如くならん。『狭衣』よりのちに世に出でたりと傳ふるものは『とりかへばや』の物語なり。されど此の書は作者も年代も詳かならず。權大納言にて大將かけ給へる人に北の方二人あはしけるが其れの生み給へるに男女二人の子あり其の容貌態度共に美しけれど男女其の性質を異にし男は女の如く物はづかしげに振舞ひ女は男の如く雄々しくほこりかたにはせしかば父君と^{りかへばや}との給ひて男君を姫君に姫君を男君にまなし給ひけり。此の二人の子のち仕官して實の姫君は權中納言となり實の男君は宣耀殿の女御となり給ひけり。此の二人は即ち此の物語の主人公にて書名もやがて父君のとりかへばやとの給ひしに出づ。作者は力めて物あはれげに書きなしたれど大體の結構既に滑稽の風を帯びたれば讀み行くも情のうつらぬ心地す。文章悪しきにあらねども又さまで優れたるにあらず極めて尋常の筆致なり。

此の物語よりのちには小説的物語といふべきもの全く其の跡を断ちて今日には

一も傳はるものなし。たゞ物語の名を冒す作ありと雖も其は前にいはゆる史的物語と名づけたる歴史上の作にして想像を主としたるものにあらず。おもふに斯く小説的物語の其の跡を断ちて傳はれるものなきは現在せしもの、悉く湮滅したるにあらず創作するもの、全く絶え果てたりしにこそあらめ。かゝれば此の朝の末つ方と覺しき頃に至りて『唐物語』と題する翻譯の物語世に出でたり。其の譯者も年代も審ならずといへども西行の筆とて傳はるものあれば其の以前の作たること疑ふべからず。こは支那の話說のくさくさを集めて和文に翻譯せし書にて全篇を貫通する趣向やうのものなし。されども其の種々なる話は多く男女の愛情に關する事柄を旨とす。いつれも短篇なるからに取らわきて多趣味なるものを見ず。文章は全く和文の脈にていさゝかだにも漢文の臭味なし若し強ひて云は、前に擧げたる諸作よりも多少今人にとりて解し易きふしありと思はるゝと翻譯のもの、故とも見るべき。尙其の話說の種類と翻譯の文体とを示せば左の如し。

かゝる程に此の世に楊貴妃のいかならん巖の中なりとも覺束なからぬ御住居

なればいと心苦しからず思しけるに思ひの外に命絶えぬべきにやと邊からぬ別れの涙すしほの紅よりも尙色深くて眩方なく見え給ひながら尙帝に目をかけ奉り給ひてかくれさせ給ふまで顧み給ひる御有様何に譬ふべしと見えず。撫子の露にぬれたるよりもらうたぐ青柳の風に隨へるよりもなほまらかなり大波の芙蓉未央の柳に通ひ給へるをしも情なく道の邊の寺の中一室にして練衣を御頸に引きまどひつゝ遂にはかなくなし奉りつ。物の哀を知らぬ草木までも色かはり情なき鳥獸さへ涙を流せり。

何れもこの世にかはらぬ色ぞなかりける縁の空も四方のけしきも御供にさぶらふ人心あるも心なきも狂きもたけからぬも昔涙にまぼれて行くかたも知らず。又帝の御心のうちには

何せんに玉のうてなを磨きけん野邊こそつひのやどりなりけれ

唯、御袖の下より紅の涙ぞながれける。御心感ひにや馬の上も危く見えさせ給へば人々表裏に添ひ奉りてやう／＼行かせ給ふに兵士ども糧盡き力疲れて帝に隨ひ奉らんこと二心なきにあらねば陳玄禮も留むべき心地せず。か

入る程に益州といふ國より貢物敷しらす運べりけるを御前に積みかかせて
 侍ふ人々に別ち賜はせての給はく我が政事の清み濁れるを知らざりしより
 今日此のみたれにあり我が身一つによりて去りがたき親兄弟にも別れ二
 なき命をも捨てし我れに隨へり我れ又石木ならねば憐む心深し早くこの
 物を賜うて各故郷へ歸りねと宣はする御抽の上秋の草葉よりも露けく見ゆ。
 予輩は以上に小説的物語に關する大要を叙べたり。いでや其の中に散見せる消
 息の文例を擧げて此の節を結了せん。消息の文とは今日に所謂手紙の文といふ
 なり。其の物語の文章と異なる點は彼れの言文一致に近きよりも是れは寧言文
 一致にして且つ特に敬語を挿入する事多きにあり。さて通信の事上古はすべ
 口頭を以てし漢學傳來の後は漢文を併用せり假名文をもてするは此の期を嚆矢
 とす。「落窪物語」に見えたるあこぎより其の叔母の許に贈れる文例を
 急々事侍りてなん昨日今日開こえざりつる。今日明日の程に消けならん重
 をとめ求め出で給へ。そこにもよき重あらば一人二人かじ給へ。あるや
 は對面にきこえん。あからさまにやはせよ。

其のかへし
 あぼつかなさは是れより聞こえたりしかばはやうすさまじきあざして逃げ
 給ひにきとて使をもほどく打たれぬべかりけるをからうむてなん逃げて
 來りしかばいかならんと思ひ給へ歎きつるに嬉しく平らかに物し給へる事
 今案内して聞こえん。こゝに侍ふはかゝしき者なし。此の守の從弟にて
 こゝにおはすることさやうに物しつべけれ。
 源氏物語に見えたる紫の上より源氏の君の須磨の配所に遣はせる文
 あさましくをやみなき頃のけしきに空さへどづることちしてながめやる方
 なくなん。
 浦風やいか吹くらんもひやるそで打ちぬらしなみなきころ
 其のかへし
 かへすいみじきめのかきりをつくしはてつる有りさまなれば今はと世
 を思ひはなる心のみまさり侍れどかゝみを見てもと宜ひし面影のはる
 よなきをかくあぼつかなくがらやとこゝらかなしきさまのうれはしさ

はさしめかかれて
 はるかにかた思ひやるかな知らざりし備よりをちらうらづたひして
 夢のちちなる心地のみして覺めはてぬほどいかたひがごとおほからん。
 多少文學的趣味の交れるを見るは特に物語の中に載れるものなるに依るところ
 多からん。さはれ其の文脉の何となく歌のはしがきめきて花やかなるは以て當
 代人士の悠長なる風を見るべく又重に風流韻事の上に用ひられたるをも推しは
 かり得べし。後世の女用文章の起源は全く此の假名の消息文にあり。

第三節 歌序の文

歌集の序 歌の小序 『古今集』並びに『大堰川行幸和歌序』其等
 の文脉 『古今集』以後諸歌集の序
 大凡歌序とは歌集の撰ばれたる由來又は歌の詠まれたる所以を説明するものな
 り。故に歌序と名づくる文にそのづから二種の別あり、歌集の序と通常に歌のは
 しがきと唱ふる小序と是れなり。是等のもの『萬葉集』の時代には純ら漢文にて物
 せられしが此の朝に至り『古今集』の序文よりぞ始めて假名もて述ぶることとなり

にける。されば假名文の歌序は醍醐天皇の御代延喜五年の頃より出で來たりし
 を知る。されど又野々口隆正翁の説には、大堰川行幸和歌序といふもの『古今』の序
 よりも尙先ちて出でたるか『古今』の序にある延喜五年四月十八日は此の集撰めど
 命じ給へる時なれば實際に撰みあげて奉りしは延喜の末なるべきに此の序は醍
 醐天皇延喜七年九月大堰川に行幸ありし日群臣によましめ給へる歌の序なれば
 どやうに云はれき。此の説の是非容易く断言するを得ずと雖も亦一説として見
 るべし。

其はとまれかくもわれ歌序の中にて最も世上に名高きと『古今集』の序と大堰川行
 幸和歌序とす。『古今集』の序はいふまでもなく集の序にして大堰川行幸和歌序は
 またく歌の小序なり。是等は共に紀貫之朝臣の作に係りぬ。二者等しく假名も
 て和文の脉に連ねたれども其の文脉を吟味する時は彼の『竹取』『伊勢』等の純和文
 脉なるとは太く異りて其の中ちのづから漢文の格調あるを見る。殊に又當時に
 行はれたる『文選』などの文體を踏襲せりと覺しく四六駢體にして莊重なる中にも
 華麗なるを力め稍繁蕪に失する嫌あり。二篇共に云ふまでもなく散文なるもの

から縁詞、疊韻對句を並べ冠辭を用ふる辭あり。然れども是れがために聯調自然に齊一し文勢に緩急昂低ありて恰も音律を具ふるが如き觀なきにあらざ。『古今集』の序は既に第四章に引用しつ、尙次に掲ぐる大堰川行幸和歌序に就きて見よ思ひ半ばに過ぐるものあらん。

あはれ我が君の御代長月の九日ときふいひて残れる菊を惜み給ひ又暮れぬべき秋を惜み給はんとて月の桂のこなた春の梅津より御船よそひて渡守を召して夕月夜をぐらの山のほとり行く水の大堰の川邊に行幸し給へれば久方の空にはたなびける雲もなくみゆきをまち流るゝ水底には濁れる塵なぐて御心にぞ協へると詔して仰せ給へることは秋の水に浮びては流るゝ木の葉と過たれ秋の山を見れば織る人なき錦とちもほえ紅葉のはの嵐に散りて曇らぬ雨ときこえ菊の花の岸にのこれる空なる星と驚き霜の鶴河邊に立ちて雲のよかるゝかと疑はれ夕の嶺山のかひになきて人の涙をちとし旅の雁雲路にまどひて玉章と見え遊ぶかもゆ水に栖みて人になれたり。入江の松幾世經ぬらんといふ事をぞ詠ませ給ふ。我が筆短き心のこのもかのもに

まどひつたなき言の葉吹く風の空にみだれつゝ草の葉の露とともになれしき涙ちち岩根と共に悦ばしき心ぞ立ちかへる。もし此の言の葉世の末まで残り今を昔にくらべて後の今日を聞かん人海人の栲細くりかへし忍ぶの草の忍ばざらめや。

此の外庚申夜奉和歌序は源順朝臣の作にして『古今集』の序につぎて優れたりといふ評あり。平兼盛朝臣の子日行幸和歌序後一條天皇の御宇文章博士善滋爲政の奉りたる高陽院行幸之時應制奉和歌序又は藤原通俊卿の書かれたる『後拾遺集』の序など見るべきものあり。かく假名文の歌序世に出でし其の數少からず傳はれども其の目的とする所は前に云ひし如く歌集の撰ぜられたる由來又は歌の詠まれたる所以を説明するに止まるものなれば其の内實にさしたる玄義妙想のあることなく其の外形に亦異なる趣致變態を見るを得ざりき。而して『後拾遺』以後のに至りては所謂權に依りて胡蘆を描ける類のみ思想も文體もあじなべて前者の模倣に過ぎざりき。故に前に引用したる『古今集』の序又は大堰川行幸和歌序を記誦せしものは大方に歌序の

如何なるものなりしかを推知するを得ん。さはいへ世の下るにつれて其の文章ますます冗漫に傾き氣力又次第に初めの如くならず。『千載集』の序の如き當時一流の歌人藤原俊成卿の筆になりしものから『古今』の序の莊重なる趣もなく大堰川行幸和歌序の飽なる風もなく全篇たゞ無味枯燥の文字古文の型により寫されたるのみ。

第四節 日記及び紀行の文

『土佐日記』『蜻蛉日記』『和泉式部日記』

『紫式部日記』『更科日記』『讃岐典侍日記』

當時日記と題せし書にも亦二種の別あり折々の出來事を記録したるものと旅行中に見聞若しくは遭遇したる事柄を寫したるもの即ち紀行と是れなり。『蜻蛉日記』『和泉式部日記』『紫式部日記』『讃岐典侍日記』は前者に屬すべきもの、『土佐日記』『更科日記』は後者に屬すべきものなり。但し是は勿論大體の類別にして精密には『更科日記』の如き或は兩者を混有せりとも謂ふべし。さて日記及び紀行の文は前掲の如く作者が見聞若しくは遭遇したる出來事を或

は其のまゝに或は所感をも打交へて記録するにありき。故に是等の書中の記事は縦令種には作者の僻見あるにもせよ大方は實事と見るを得べし。然れども其の文章は通常の歴史の如く專一に實用を期せしものにあらずれば彼れの醜陋なる風なく又物語の如く純ら他の娛樂に供せしにもあらずれば彼れの飽麗なる態もなし。乃ち此の種の文は單に作者が私の筆すさみに書きなしたるものなれば鍛練刻思の點こそは見えぬ天眞の性情自然の筆致さすがに妙趣鮮しとせず。而して手廻は今此の種の文を列叙するに當りて日記及び紀行の區別をあく程の要を認めず故に唯便宜にしたがひて最古のものより順次に説明せんとす。則ち第一に『土佐日記』よりはじめて『蜻蛉日記』にうつり以下次第に年序を追ひてものすべし。

『土佐日記』は純實之朝臣が延長八年土佐守となりて赴任し五年の後承平四年に任滿ちて歸京せし時の船路の紀行なり。全篇亡兒の悲みを貫めつゝ時としては海賊の難を風波の中に見せ時としては滑稽の筆を徒然に弄するなど五十餘日の記事を充たす。而して先づ其の發端を男もすといふ日記といふものを女もして見

んとてするなりといふ句に開きぬ。これ當時漢學隆盛にして日記々録の類皆漢文を用ひ假名文は専ら婦女子の間にのみ限られたる有様なりしかば能く一女子に假托せしものなるべしといひ、或は最愛なる女子を失ひたる悲哀の情を盡くさんかためにもいふ。此の朝臣の文は前節にも擧げたる如く「土佐日記」より前に「古今集」の序大堰川行幸和歌序等ありて孰れも謹嚴莊重の體を盡くしたりしが、此の日記の文は大に彼等と其の趣を異にせり。瀟洒にして輕快利へ所々に諧謔の辭さへ加はりて二讀三讀更に飽くことなく興味ますく深きを感じざるぞ此の記の文の特長なる。例へば見よ

廿二日和泉の國までたひひかたにぬがひたつ。藤原の言實船路なれど馬の歩はなむひけず。上中下酔ひすぎていづれ怪しく潮海の邊にひかされかへぬ。いひ又

廿七日大津より浦戸をさして漕ぎ出づ。かくあるうちに京にて生まれたり。あはれ女子といひて俄に失せにしかば此の頃の出立ちいぞきを見れど何事もいはず。京へ歸るに女子のなきのみぞ悲み戀ふる。ある人々もえ堪へず。

この間にある人の書まで出だせる歌

都々ともふもものかなしきは歸らぬ人のあればなりけり
 又ある時には
 あるもの忘れついなほなき人をいつらと問ふぞ悲しかりける
 といひける間に鹿兒の崎といふ所に守の兄弟又他人これかれ酒など持て追
 ひきて磯にあり居て別れ難きをいふ。守の館の人々の中に此の來る人々を
 心あるやうにはいはれほのめく。かく別れ難くいひてかの人々の口綱も諸
 持にて此の海邊にて荷ひいだせる歌
 をしとちもふ人やとまると華鴨のうち群れてこそ我ればきにけれ
 といひてありければいといたく愛で行く人のよめりける。
 棹させと底ひ知られぬわたつ海の深きこゝろをきみに見るかな
 といふ間に機取もの哀も知らずのれし酒をくらひつれば早く往なんと
 て潮みちぬ風も吹きぬべしとさわげば船に乗りなんとす。この折りにある
 人々折節につけて唐歌ども時に似つかはしきをいふ。又ある人西國なれど

甲斐歌など歌ふ。かくうたふうちに蓬麻の塵も散り空行く雲もたいよひぬと
 といふなる。今宵蒲戸にとまる。藤原の言實橋の季衝こと人々追ひ來たり。
 といへるを。筆に隨うて言湧き意に隨うて句をなすところ諧謔はたわざとなら
 ずおもまろし。殊に諧謔の中又折りにふれて悲哀の至情をかすみ行くなど其の
 を微なる筆致いふべからず。後世に紀行を草するもの其の模範を此の記の文に
 採りしもの多きも理なりや。記載の事柄につきては歴史の遺漏を補ふこと殊更
 にいふを要せし。これを當時作られたる紀行文の最上なるものとす。此の後大
 凡百餘年更科日記書がれし頃まで世に紀行といふべきもの更になじ。
 而して『蜻蛉日記』は右大将藤原道綱卿の母の記せるもの。道綱卿の母は正四位下
 藤原倫季の女にして東三條攝政兼家公の室なり。其の名傳はらず其の傳はた詳
 ならず。唯此の日記に依るに天曆八年兼家公いまだ右兵衛佐なりし頃より歸
 らひせめて翌年の八月に道綱卿を生み後遂に其の室となれりきと見ゆ。此の書
 は即ち天曆八年に兼家公の通ひそめ給ひし頃より書き起して道綱卿出生の前
 後さては其の殿上元服の事などを記し終に天延二年道綱卿二十歳の程の事まで

を書けり。此の内天徳三年より應和元年に至る三年間の記事開けたれと概して
 は村止冷泉圓融三帝の御代をかけて廿一年の間に亘る。其の跡載『土佐日記』の
 次の事件を記載せるは異にして

六月になりぬ。朔かけて長雨いたうす。見出だして獨言に
 我が宿のなげきの下は色深くうつろひにけりながめふるまに
 などいふほどに七月になりぬ。絶えぬと見ましかばかりに來るれば勝勢な
 ましなど思ひつゝくるをりに物したる日あり。物もいはねばさういふ
 なり。前なる人あかし下葉の事を下葉に秋にあふ色こそましてわびし
 歌の事。物の序にいひ出づれば聞きてかくいふ。
 そりならで色つきにける紅葉は時にあひてぞいろまさりける
 どぞ書きつくる。かくあり續き絶えずは來たれども心のとくる夜なきに荒

れまさりつゝ來ては氣色悪しければ一向に立山と立ち歸る時もあり。近き
 隣に心ばへ知れる人出づるに合せてかくいふ。
 葉盛焼く烟の空にたぬるはふすべやまつるくゆる思ひに

などいなり。さかしらするまでふすべかはして此の頃は殊に久しう見えず。たいなりし折りはさしもあらざりしをかく心あくがれていかなるものか其處にうち置きたる物の見えぬ癖なんありける。かくて止みぬらんそのものと思ひ出づべき便りだになくぞありけるかと思ふに十日ばかりありて文あり。なにくれといひて帳の柱に結びつけたりし小弓の矢とめてとあればこれぞありけるかと思ひて解きあらしめて

思ひ出づる時もあらじと思へどもやといふにこそ驚かれぬれどてやめつ。かくて絶えたるほど我が家は内裏より参り罷出る道にしもあれは夜中曉とうちしはぶきてうち渡るも聞かじと思へどもちどけていぬ睡られず夜長うして睡ることなればさながらと見聞く心ちは何にかは似たる。今はいかで見聞かざだにありにしかなど思ふに昔好色せし人も今はおはせずとかなど人につきて聞こえごつを聞くをものしう物憂のみ覺ゆれば日暮れば悲しうのみ覺ゆ。子供あまたありと聞くところもむげに絶えぬと聞く。あはれましていかにばかりと思ひてとぶらふ。九月ばかりの事なりけり。

あはれなど驚く書きて

吹く風につけても問はんさゝか此の通ひしみちは空に絶ゆとも
かへり殊にこまやかに

色かはるこころを見ればつけて問ふ風ゆゑしくも思はゆるかな
どぞある。かく常にしもえいなびはてし時々見えて冬にもなりぬ。
などの如く單に年月の重なる事件若しは所感を録するのみ。文章は此處に掲げたる如く知らるゝ如く安らかにして而も又これぞといふべき妙所なり。されど歌には優れたるもの多し殊に長歌の所々に見えたるは爾餘の日記に異るところ、あつから一種の体裁を具ふるものとやいはん。

『和泉式部日記』は和泉式部の書けるものにて又『和泉式部物語』ともいふ。和泉式部は紫式部と同時代の人にて、越前守大江雅致の女なり、和泉守橘道貞の妻となりしことあるを以て和泉式部の名あるなり。夫道貞死にての後は上東門院彰子中宮に仕へけるが後終に藤原保昌の妻となり小式部内侍を生みぬ。式部天性和歌に巧みにして兼ねて諸學に通じ佛經をも極めき。保昌に嫁してのち夫に従ひて丹

後の園に下りぬ。一夜保昌狩獵の準備なしけるに鹿鳴甚だ悲しかりければ式部之れを聞きて憐愍の情に堪へず

ことわりやいかでか鹿の鳴かざらん今宵ばかりの命とあもへばと詠じて遂に夫が狩獵の念を止めきとぞ。されども其の素行は修らざりけん『榮花物語』に依れば上東門院に宮仕せし頃冷泉院の第三、第四の皇子爲尊、教道の二親王に前後懸敷に通したりきよし見えたり。彼れの日記は即ち爲尊親王薨御の翌年長保五年四月の頃より其の弟宮教道親王式部のもとへ通ひたまひしこと、始終を書きつけたるものなり。歌もよく文章も輕妙なるどころ多けれど次に舉ぐる『紫式部日記』の精到にして流麗なるには到底及ぶべしとも覺えず。特に此の日記の破倫の行爲をも尙憚からず記載したる、縦令當代一般の習俗として恕すべしとするも彼の『紫式部日記』の謹慎謙讓の美事を以て充つるとは尊皇の達同日の比ならんや。

さて『紫式部日記』は紫式部が夫宣孝に後れて同むく上東門院に宮仕へせし頃の記録なり。書中に中宮御懷妊の時より後一條天皇及び後朱雀天皇の御誕生までは其の御祝ひの次第等を記せり。またみづから日本紀の局の稱を得し事、御堂關白道長公に懸想せられしを程よく斷りて貞節を全うせし時の贈答の歌なども載せたり。されば其の記事は紫式部の性行爲を知るに此上なき材料たるのみならず又御堂殿の權勢、御産の儀式などを知るにも好資料たるを得。其の文章は『源氏物語』の如く絢爛の姿はなしと雖も閑雅優美の風を具ふ。素より彫琢の工を加へたりとも覺えぬにちのづから趣致多きは所謂暖睡珠をなすものか。紀行中の『土佐日記』と相對して是れを日記中の白眉とす。尙發端の一節を抄載して如何に閑雅優美に如何に精到なるかを示さん。

秋のけはひのたつまいに土御門殿のありさま云はんかたなくをかし。池のわたりの梢ども遣水のほとりの数あのかじし色つきわたりつゝ大かたの空も飽なるにもてはやされて不斷の御讀經ミキヨウの聲々あはれまさりけり。やうやう涼しき風のけしきにも例の絶えせぬ水のおとなひ夜もすがら聞きまがはさる。御前にも近うさぶらふ人々はかなき物語するを聞こしめしつゝ惱ましうあはしますすべかめるをさりげなくもてかくさせ給へり。御ありさまな

どのいとさらなることなれど、うき世のなぐさめにはかゝる御前をこそ尋ね
まゐるべかりけれど、現心カウシノコをばひきたがへたとしへなくよろづ忘るゝにもか
つはあやしき。また夜深き程の月さしくもり木の下をぐらきに御格子ま
りなばや女官はいまださぶらはじ藏人まゐれなどいひまろふ程に後夜の鐘
うちあどろかし五壇の御修法ときはじめつ。われもくくどうちあげたる伴
僧のこゑく遠く近く聞きわたされたるほどあどろくくまきたふとし。觀
音院の僧正東の對より廿人の伴僧をひきめて御加持まゐり給ふ。足音渡殿
の端のどいろく踏みならさるゝさへぞことくのけはひには似ぬ。法
住寺の座主は馬場殿ウマノエ遍昭寺の僧都は文殿などうちつれたる淨衣すがたま
でゆましくしき唐橋どもをわたりつゝ木の間をわけてかへり入るほど遙
に見やらるゝ心ちしてあはれなり。さいさ阿奢梨も大威徳を敬ひて腰をか
いめたり。人々まゐりつれば夜も明けぬ。渡殿の戸口の局に見いたせばほ
のうちきりたる朝のつゆもまだあちぬに殿ありかせたまひて御隨身召して
遣水はらはせ給ふ。

『更科日記』は以上の諸記とは異なり始めの半ばは紀行の如く、をはりの半ばは日記
に似たり而して始めは細かに終りは粗なり。作者は菅原道真公六世の孫右中辨
菅原孝標の女なりといふ。此の女はむめは祐子内親王の女房なりしが後橘俊通
に嫁して肥後守仲俊を生めり。幼少なる頃より文才あり殊に詠歌に秀でたりき。
『更科日記』は治安三年作者が父孝標と共に上總の國より京に上りし時に筆を起こ
して夫俊通の病歿せしまでの事をあらましに録せり。まかれれば此の間殆ど四十
年の長日月に亘りぬといへども中には三四年間記事なく過ぐるもありて實際に
は尙少しと知るべし。始めに

東路の道のはてよりも猶奥つかたに生ひ出でたる人いかばかりかはあやし
かりけんをいかにあもひ始めけることにか世の中に物語といふものゝあな
るをいかで見ばやと思ひつゝ徒然なるひるまよひゐるなどに姉繼母などやう
の人々の其の物語かの物語ヒカトシ光源氏のあるやうなところく語るを聞くに
いとゆかしさまされど我が思ふまゝにそらにいかにかでか覺え語らん。いみ
じく心もどなきまゝに等身に薬師佛を作りて手洗ひなどして一間ヒトマにひそか

に入りつゝ、京に疾くのぼらせ給ひて物語の多く侍ふなる有るかぎり見せ給へど身を捨て、額をつきいのり申すほどに十三になる年のぼらんとて九月三日門出して今立といふ所にうつる。

など書きいだしたるをふと見れば此の書作者が幼稚の頃より漸次に書きつけたりと思はるれども始終の文跡又は前後舛載の一致たる共に一時の作たるを證明す。おもふに作者晩年に及び往時を追懐する餘り日記など基礎として書きつゝりたるものならん。それかあらぬか前後の事實餘りにかかはなれて其の意の通じがたきところも尠からず。『更科日記』と名つけたる理由は何か其の義定かならず、或はいふ夫通俊信濃守となりて任國に赴き歸朝してのち或夜甥某のたづね來りし時、月も出でやみにくれたる狭捨になにとて今宵たづねきつらんといふ歌ありしに更科は信濃の地名にて昔より月に名高き處なれば其の歌などよりや此の名を負はせつらんと。文章に稍見處あるは前に引用したるにても大方推知するを得ん。

『更科日記』に次ぎて世に傳はるは『讚岐典侍日記』なり。此の記は堀河天皇に奉仕したる讚岐典侍の書けるものなり。嘉承二年五月堀河天皇御惱及び崩御の事より引きつゞきて鳥羽天皇の踐祚の事大嘗會の御有様など記きたり。かゝれば其の記するところおのか家の記ならで専ら公事に關すと知るべし。文章も奇を求めし痕なく明快にしてよし。就中堀河天皇御惱の事を記せるあたりは筆法細密にしていとも哀深き趣あるを見る。

此の外に尙『須磨記』松島日記といふものあり。『須磨記』は菅原道真公筑紫へ左遷せられし時の須磨の浦までの道の記なりといひ『松島日記』は清少納言其の傳記性が老年に及びて奥の松島に下りける旅の日記なりといひ傳ふ。其の文章舛載等大方以上の諸記に似たりと雖も近き程古學をするものゝ作りたるものなるべしといふ事今は學者の定論なれば載するに及ばしめて省き捨てつ。

第五節 草子の文

草子と隨筆と清少納言其の閑歴及び性行『枕草子』古來草子といふるに數説あり、或は草子は双紙にて紙を双べて書きたるといふるな

りといひ或は冊子の書便なりともいへど、今は草稿草案の義にとりて未だ清書し
 あへぬ下がきの意といふに定まれり。即ち後世に所謂隨筆、漫錄、漫筆などと同じ
 く公衆に示す目的ありて書けるにあらず、唯作者が見るまゝ、聞くまゝ、又は感ずる
 まゝに書き下せる私の筆すさみをいふなり。而して此の時代に草子と呼ぶるべ
 きものは唯「ありしのみ即ち其の名世に名高き」枕草子」これなり。其の作者は清
 少納言。
 清少納言は「後撰和歌集」の撰者として世に知られたる梨壺の五人のひとり清原元
 輔の女なりき。生誕終焉の年月はさておき其の本名だにも詳かならず。後一條
 天皇の皇后定子に仕へて女房となり父の元輔少納言たりしかば其の姓をかけて
 清少納言とぞ云ひし。父に似て歌文をよくし才學殊にすぐれたり。一日大に雪
 降りし朝皇后定子香爐峰の雪は如何ならんと問はせ給ひしに清少納言直ちに起
 ちて際高く捲き上げたり。皇后を初め人皆大に其の敏慧を感賞せりといふ。蓋
 し唐の白樂天老後香爐峰の山麓に住まひし時の詩に「還愛寺鐘敲枕聽香爐峰雪授
 簾看」の句ありしを以てなり。かゝれば皇后常に清少納言を愛寵せしこと衆に超

え内侍にも進めんとすの御沙汰ありき。まかると其の後程なく皇后の御父關白道
 隆公薨じ給ひ其の弟道長公之れに代はり給ふに及び伊周公隆家卿配流の事あり
 て皇后の權勢又昔日の如くならざりしに引きつゞきて皇后もかくれさせ給ひし
 かば遂に其の事なくて止みぬ。「榮花物語」に清少納言、皇后の御妹淑景舎に宮仕へ
 せし由見えたるは其の後の事にもありしか。淑景舎の君も亦程なく失せ給ひ
 ければ是れより少納言いよく時を失ひて遂に寄邊なき落魄の身となりぬ。老
 後には四國に下りきとも又奥羽のあたりにさすらひきともいへれど確かならず。
 「元輔がむかし住み侍りける家のかたはらに清少納言住みける頃など」新古今集」に
 見えれば尙都のほとりに閑居せしこと正説ならん。終るところを知らず。或
 は云ふ清少納言誓願寺にて出家して帝の御かへりみを蒙りいみじき往生を遂げ
 て彼の寺に墓ありと是非定めがたし。さて清少納言嘗て破屋に閑居せし程の事
 とかや或日年少の公達四五人車を驅りて其の前を過ぎけるに軒朽ち壁破れて見
 るかげもなきさまなりしかば嘲笑して少納言も無下にこそなりけれと云ひけ
 れば少納家より簾をかくけて顔さし出だし駿馬の骨を買はずやと答へけりとな

九。故事来、古八死馬の骨を五百金に買ふ期ならざして千里の馬至るもの三つと
 あるをふまへてあゆめれば年既老ひたりとけり。清少納言は學才の富に
 至らんとはいへる意を顯し世しものならむ。是れを見ても清少納言は學才の富に
 俊れたるのみならず敏慧にして識見高く奇骨ありしこと想察するに足るべし。
 されども子輩はまは彼れの博學を街ひ才能を弄する傾きありて内行脩まらざり
 しを惜む。少納言みづから其の草子に得意げに書い付けて曰はく

水通中宮職の大進生昌が家に宮子の出でさせ給ふに東の門は四つ足になしてそれ
り御典は入らせ給ふ。北の門より女房の車ども陣屋宿直の武の居れば入りなんやま
 思ひて髪つきわるき人もいたくもつくるはず。寄せておるべきものと思ひあなづり
 たるに板廊毛の車などは門ちいさければさはりて得入れれば例の鑑道まきておる
 にいさにくい腹だまけれどいかいせん。殿上人地下なるも陣に立ちそひ見るも
 れたし。宮御前に参りてありつるやう啓すれば中宮の「こゝにも人は見るましくやは
 なごかはさしも打ちさけつる」笑はせ給ふ。清少納言「されどそれは昔めなれて侍れば
 よく仕立て侍らんにしこそ驚く人も侍らぬ。さてまかばかりなる家に車入らぬ門
 やはあらん。」生昌見れば笑はんなどいふほどにしも來た「これまぬらせん」さて御現な
 ざさし入る。清少納言いでいさわるくこそおはしけれなどて其の門狭く造りて住み

給ひけりぞいへば生昌笑ひて「家のほど身のほどに合せて侍るなり」と答ふ。清少納言「され
 ど門の障りを高く造りける人も聞ゆるは」といへばおなほそろしと驚きて「それは千
 定國がここにこそ侍るなれ。ふるき進士などに侍らずば承り知るべくも侍らざりけ
 り。たましく此の道にまかり入りければかうだに辨へられ侍る」といふ。「其の道も
 かじこからざめり鑑道敷きたれば皆おち入りて騒ぎつるは」といへば「雨の降り侍れば
 實にさも侍らんよし」また仰せかくべき事も侍る。罷り立ち侍りなん」といぬ。
 宮「何事ぞ生昌がいみとうおぢつるは」と問はせ給ふ。「あらず、車の入らざりつること
 ひ侍る」と申しておりの。同卜局に住む若き人々などして萬の事も知らずれむたけれ
 ば皆賤ぬ。東の對の四の廂かけてある北の障子には鈎懸もなかりけるを其れも尋れ
 ず生昌家主なれば案内をよく知りてあけてけり。怪しうかればみたるもの、聲にて
 其處侍はんにはいかいさあまたいびいふ聲に響きて見れば几帳の後に立てたる燈臺
 の光もあらはなり。障子を五寸ばかりあけて云ふなりけり。いみとうをか。更に
 かやうのすきくしきわさゆめにせぬもの、家におはしたりさて無下に心にまかす
 るなめりと思ふもいさなか。我が傍なる人を起こして彼れ見給へ、かゝる見えぬも
 のあめるなといへば頭をもたげて見やりていみとう笑ふ。清少納言「あれは誰ぞ顯證に
 さいへば生昌あらず、家主八局主人と定め申すべき事の侍るなり」といへば「門の事を
 申しつれ障子開け給へ」とやはいふ。「なほ其の事申し侍らん。其處に侍はんはいかに
 く」といへば「いと見苦しきこと、更におはせとて笑ふあれば生昌若き人々おはしけり」

さてひきたてゝいぬる。後に笑ふこといみじ。あけぬさなれば唯まづ入りぬかし。消息をするに、いなりとは誰れかは云はるるに、げにながしきに、早朝の御前に参りて啓すれば、さるるにも、生昌の少納言聞て、えざりつるを昨夜のことに受て、入りたりけるなめり。あはれあれなほしたなく、いひけんこそいさほしけれと笑はせ給ふ。

又いはく、まきの御曹子は、定子のおの四おしての立部のもこにて、取辨行成の人と物をいさ久しくいひ立ち給へれば、納言さし出で、それは誰れぞいへば、行成の内侍女房のなりとの給ふ。少納言に、いはさし語らひ給ふ。大辨何人の情未詳、辨内見えばうち捨て奉りていなん物をいへば、行成いみじく笑ひて、たれか、いふことなさいいひきかせけん、それさなせそと語らふなりとの給ふ。

と。如何に彼れは學に誇り才を弄し人もなげなる舉動をもさし出で、行ひたりしか。其の中にも

七月ばかりに風のいたうふき雨などのさわがしき日、大方いさ涼しければ、扇もうち忘れたるに汗の少しが、へたる衣のうすき引きが、つきて、整頓したるこそ、なかしけれと書きつけつゝ、風吹き入るゝ邊に衣引被せて、晝寝したるを、此上なき快事としたる、事小なりと雖も、通常婦人の公言志がたき所以て、少納言が特質を見るを得。予

輩は彼れの草子に、這般の事なほ許多あるを見るごとし、「源氏物語」の著者紫式部の謹慎謙讓なりしに比し、當時閨秀文學者の粹と稱へられたる紫清二女の性質の太く背反したるに、驚嘆せずばあらず。

かゝれば『枕草子』一部は少納言が視聽に觸れたる社會の狀態、人心の有様さては、彼れが胸底に鬱積したる感懷等を、ある題目の下に筆に任かせて書きつゝりたる、断簡零篇の集合に過ぎざれども、當代の現象、勢鬪たる中に、作者の性質、隨知として隠見す。犀利なる筆法もて、或は公卿貴族の舉動を批判し、嘲罵し、諷諭し、或は緻密なる觀察によりて、四季の光景を寫し、殿上の有様を描き、時には人心に入りて、其の胸奥を刮出す。是れ皆彼れが口づから云ひ手づから行ひしところ。されば此の草子を讀み行けば、さながら少納言に接して、親しく其の豪放快活にして、まゝ輕卒なる風采を見る心地す。而して其の炬の如き、炯眼は能く事の真相を看取して、往々讀者の心を寒からしめ、又は快哉を呼ばしむ。就中裝束、冠帶、或は容姿、舉動を觀察描寫すること、精到周密を極む。

みつばかりなるちこのいそぎて、運ひくる道にいさちいさき塵などの有りけるを、眼敏

に見つけて、いさなをいじげなるお指にさらへておきなうごに見せたるいせうつくし。
あまにそきたる見の眼に壁のおほひたるを振きはやらでうちいたぶきて物など見る
いさうつくし

といへる如きは着眼のもしろくしてやましき流石に豪放快活の中にも婦人の
性情瞭然たるを見る。之れを要するに『枕草子』一篇は『源氏物語』の中に紫式部其の
人を見る如く清少納言の條の紙上に現はれたるもの而も是れは彼れにもまさり
て一層顯然たり。

其の文章は前に引用したる文にても大方知らるゝ如く能く其の書中の記事と應
じてあるは細緻あるは流麗あるは簡勁にして且つ議論に叙事に其の筆を驅る如
き趣あり。特に一氣呵成の筆づかひと短簡の警語とを以て深長なる意を表明す
るは此の草子の他に其の比を見ざる所なり。是等亦清少納言の性質、或は滔々ど
して辨論し或は一言に喝破する底の風に應合するものとやいはん。尙一二の文
例を掲げてまのあたり其の特質の一斑を見る料とすべし。

春は曙やうく白くなり行く山際すこしあがりて紫だちたる雲の細くたな
びきたる。夏は夜月のころはさらなり闇もなほ盛飛びちがひたる。雨など

の降るさへをかし。秋は夕暮夕日花やかにさして山際いと近くなりたるに
鳥のねどころへ行くとして三つ四つ二つなど飛び行くさへあはれなり。ま
いて雁などのつらねたるがいとちいさく見ゆるいとをかし。日入りはてゝ風
のぶと蟲の音などいとあはれなり。冬は雪の降りたるはいふべきにもあ
らず。霜などのいと白く又さらでもいと寒き火など急ぎふとして炭もてわ
たるもいとつきくし。晝になりてぬるくゆるびもて行けば炭櫃火桶の火も
白き灰がちになりぬるはわるし。
淑景舎春宮に参り給ふ程の事などいかりはめでたからぬことなし。正月十
日にまゐり給ひて宮の御方に御文などはまげうかよへど御對面などはなき
を二月十日宮の御方に渡り給ふべき御消息おれば常よりも御志つらひ心と
どに磨きつくるひ女房なども皆用意したり。夜なかはかりに渡らせ給ひし
かは幾程もなく明けぬ。登花殿の東の二間に御志つらひはしたり。早朝
いとどく御格子まゐり渡して御格子あけ曉に殿公道隆うへ北のひびつ御車に
てまゐり給ひにけり。宮は御曹子の南に四尺の屏風西東に隔て、北面にた

て、御たゞみ、樽うちもきて御火桶ばかりまゐりたり。御屏風の南御帳の前
 に女房いと多くさぶらふ。こなたにて御髪などもあつて程の御景舎
 は見奉りじやと問はせ給へば、御少いまだいかでか。積善寺供養の日御うし
 ろと僅に聞こゆれば、其の柱と屏風との下によりて、我がうしろより見よ。
 いと美じき君との給はすれば、婿じゆゆかじさまきりていつしかと思ふ。
 御東の御紅梅の固紋浮紋の御衣どもに紅のうちたる御衣三重がうへに只ひま
 がさねて奉りたるに、紅梅には濃き衣こそをかしけれ、今は紅梅は着てもあり
 ぬえじ。されど萌黄などのにくければ、紅にはあはぬなりとの給はすれど、御
 色立の只いどめでたく見えさせ給ふ。奉りたる御衣にや、料で御かたねの匂ひ
 あはせ給ふぞ、何ごとよ、美人美人のまかぢやあはしますらんとぞゆかじき。
 てみざり出でさせ給ひぬれば、やがて御びやう風にもひつきてのぞくを女房
 のおひかめり、うしろめたきわさどきこまごつ人もいさをかじ。御障子の
 廣う明きたれば、いとよく見ゆ。うへ北の白き御衣ども、紅のはりたる二つ
 ばかり女房の装なめり、ひまかかけて奥によりて、東面にはすれば、只御衣など

ぞ見ゆる。淑景舎は北にすこしよりて南向きにあはす。紅梅どもあまた濃
 く薄くて、濃き綾の御衣、すこし赤き蘇紡のちり物の袷、萌黄の固紋の若やかな
 る御衣奉りて扇をつとさし、顔かくし給へり。いといみじく、げにめでたくう
 つくしと見え給ふ。殿道隆は薄色の直衣、萌黄のちり物の御指貫、紅の御衣ど
 も御紐さして、廂の柱にうしろをあて、こなたさまにむきてあはします。淑
 景舎なめでたき御有様どもを打ち咲みて、例の戯言をせさせ給ふ。淑景舎の
 繪に替きたるやうに、美しげにてゐさせ給へるに、宮いとやすらに今少しおど
 なびさせ給へる御けしきの紅の御衣に、匂ひあはせ給ひて、猶たぐひはいかで
 かと見えさせ給ふ。

此の書を『枕草子』と名づけたるは、此の書の奥にみづから宮のおまへに内のおと
 の奉り給へりしを、是れに何をか書かまし上の御前には、史記といふ文をなん書か
 せ給へるとの給はせしを、枕にこそは、志侍らめと申さしかば、さは得よとて給はせ
 たりしを、あやしきを、こよや何やとつきせずあほかる紙のかずを書きつくさんと
 せしにいと物おぼえぬ事ぞ多かるやと書かれし如く、枕にこそ志侍らめとて申し

ラけたる物にかゝれたる草子なれば後人のかくは呼べるなりといふ。されば最初は『清少納言の記』と云ひけりとぞ。因にいふこゝに枕にこそ志侍らめとは枕言マクシゴト書き侍らんといへる義にて枕言とは當時の俗語にて人にかくすべき言の葉の意なりといふ者あり。此の説果して真ならばよく『枕草子』といふ名にかなひたれども如何にや。而して清少納言が此の草子を書きしはおもに宮仕せし頃にて又晩年に及びて加筆せしもあるべし。

第六節 歴史の文

史的物語 『榮花物語』『大鏡』『水鏡』『今鏡』『宇治大納言物語』
 およそ國史は從來『古事記』を除く外『日本書紀』をはじめ皆がら漢文なりしこと既に述べたり。而して是等はすべて勅命を以て撰進するを例とはなせしが醍醐天皇の朝に國史官修の擧絶えにしかば國史といふもの久しく皆無の姿とはなりぬ。志かるに其の頃より小説的物語漸く流行し終に普く公衆の嗜好を風靡するに及び其等を模倣せる一種の物語此の期の末つ方より出で來にたり。此の種の物語は文章といひ總ての體裁といひ孰れも小説的物語に類するものから尙彼の

物語の虚構を主とせるとは全く異なり専ら世上の實事を記載せるものなるからに予輩はさきに史的物語と名づけおきつ。『榮花物語』『今鏡』等は即ち全く此の物語の躰なり。『大鏡』『水鏡』等はやゝ又異なるふしも見ゆめり而も大體の結構は同じく物語の躰を離れじ。按ずるに史的物語世に出でたるは一には小説的物語の世上に持囃されたる結果、二には『源氏』『狹衣』の如き大作出でたるのちには尋常一様の小説的物語は一般に世上の喝采を博するに足らざりし事等重なる源因なりしが如し。又假名文の流行に際してたま／＼『史記』等の講究盛大なりしかば彼の國史の備はれるを見て羨める餘り我が普通の文もて國史の缺を補はんとせしもありぬべし。『榮花』などの體裁の小説的物語に酷似せるは勿論『大鏡』の頗る『史記』の編躰に近似せるなど點檢し來れば予輩は此の推定の過當ならざるを信ず。かゝれば此の種の著作は其の文章大方流麗にして趣向はた面白きがために覺えず讀者を娛ましむるのみならず漢文の正史にもまして細密隱微なることにまでも限なく筆をつくるをもて當代の風俗言語を知るに適す。古來此の種の著作を雜史と名つけて文章の上より亦た事實の邊より等しく貴重せしも宜

ならずや。

『榮花物語』は宇多天皇の寛平年中に筆を起こして専ら村上天皇以後の事蹟を描寫し堀川天皇の寛治六年に至る。其の記事多くは藤原氏の一族に關し殊に御堂關白道長公の榮花の有様を記載すると最も詳細なり。されば此の物語を榮花と名づけたるも即ち是れより出でたりと知るべし。此の物語は一に『世繼物語』ともいふ。世繼とは猶歴史と云はんが如く世繼物語はいはゆる歴史の義にて此の物語の外にも此の名を用ひたるもの尠からず。卷の數は四十帖、一帖毎に風雅なる稱號を以て卷の名とせる恰も『宇津保』又は『源氏物語』等の如し。著者は赤染衛門とも或は藤原爲業ともいへり。されども赤染衛門は平兼盛の女にて大江匡衡の室たりしもの、嘗て御堂關白道長公の室倫子に仕へたるものなれば其の生存時代以後の記事ある此の書作者とせんこと勿論非なり。又藤原爲業の作とせんにも此の人には別に『大鏡』と名つくる其の文章も其の結構も異なる著書ありてそれをも世繼と名つくるより混じたるにて誠榮花の作者と定めんこと其の證なし。されば安藤爲章、加茂眞淵等の説に従ひて此の物語をば何人か、紫式部、赤染衛門、

和泉式部等諸才女の日記家集などを取集めて書き連ねたるものなるべしといふを可とす。また伴信友の其の三十一段以下は全く別人の書きつけたるものなりと云はれたるも前後の文章の異なるによりて見るに強ち無理なる臆説にあらじと覺ゆ。

其の文章は流暢にして精到、叙事の體裁はたよく其の體を得たり。就中悲哀若しくは華麗優美なる事蹟を描寫したる邊に妙なる所多く人物も事件も稍躍如たる趣あり。されど之れを『源氏物語』『枕草紙』などの虚實又は順序等に關せざる文章の妙に比すれば實際の事蹟を主として記載したるがために及ぼさること遠きは勿論なり。蓋しかゝる文章には其の修飾を爲すに限りありて彼等の如く自由ならざりしにも依るなるべし。その文體に變化なく往々通篇一律に流れんとする傾向の見ゆる如きも亦これがためならん。尙委しくは和文評釋中の『榮花物語』につき見るべし。

『大鏡』は爲業の作なりといふ。爲業は崇徳天皇の御代を年の盛りにて生存したる人にて其の頃の皇太后宮の大進たりき。後年薙髮して大原山に隱遁し法名を寂

然と呼びたり。書中の記事は後一條天皇の万壽三年雲林院の菩提講に於いて百五十才なる大宅の世繼と百四十才なる夏山の茂樹とが對話を以て其の序を開き文徳天皇の嘉祥三年より當年に至る百七十六年間の事蹟を帝王の本紀と大臣の傳とに分ちて記したる紀傳體の歴史なり。其の序なる對話の末に云へるところ能く本書の由來と性質とを表明するに足る。いはく

まめやかには世繼が申さんと思ふことはござんたくは。只今の入道殿下の御有様の世に勝れておはしますことを道俗男女の御前にて申さんと思ふが、いと事多くなりてあまたの御門さき又大臣公卿の御上をつゞくべきなり。その中にさいはい人におはします此の御有様申さんと思ふ程に世の中のかくれなくあらはるべきなり。つてにうけたまはれば法華經一部を脱き奉らんさてこそ先づ餘經華嚴經、阿含經、般若經をば脱き給ひければそれを名づけて五時教といふにこそはあなれ。まかの如くに入道殿の御榮を申さんと思ふほどに餘經の脱かるゝと云ひつべしなごいふもわざ／＼まうござんたくしう聞こゆれどいでやさりとも何ばかりの事をかと思ふにのみトうこそいひ續け侍りしか。世間の攝政關白と申し大臣公卿さきこゆる、いにしへ今の時の入道殿の御有様のやうにこそはおはしますらめさぞ今やうのちごどもは思ふらんかし。されどそれともあらぬ事なり。いひもて行けば同ト種、一つすぢにおはすめれど門カ分かれぬれば人々の御心もちあはまたそれに従ひてこそござんたりなりぬ。この世はトまり

て後、みかどはまづ神の世七代をおき奉りて神武天皇を初め奉りて當帝ウツミまで六十八代にぞならせ給ひにける。すべからくは神武天皇を始め奉りて次々の御門の御次第を宛え申すべきなり。まかりさいへどもそれはいさき、耳遠ければ只近き程より申さんと思ふに侍り。文徳天皇と申す御門おはしましき。その御門よりこなた今の御門まで十四代にぞならせ給ひにける。世をかぞへ侍れば其の御門位に即かせ給ふ嘉祥三年庚午の年より今年までは一百七十六年ばかりにやなりぬらん。かけまくもかしこき君の御名を申すは辱く候へどもさて云ひつゞけ侍りき。

かゝれば結構を全く紀傳體に擬するものから『史記』等の嚴正なるとは異なり二翁の對話を記事の終結等にまゝ挿入して以て前後の文脈又は事蹟の連絡をなせり。これ無味乾燥なる史的事實に血肉を附與してあつから讀者に興味を促すもの。予輩は大鏡の体裁の創意を認識すると同時に一面に『史記』講究の結果を見、一面に小説的物語流行の餘勢を見る。時々記事の齊一ならざる點ありといへども予輩は尙本書の結構其のもの、既に文學的なるを認めずはあらず。况や其の文章には一種の特色具はりて時としては詩を引き時としては歌を點ずるも尙よく諧和して艱澁のところなく筆力剛健自在にして素朴の風を具ふるをや。これを『榮花』

物語に比すれば彼れは優柔にして細巧なるもの全く之れに正反す。菅公左遷の條は諸書に引きふるしたる例なれど古來歴卷と稱するところ掲げて以て此の書の如何なるものなるかを示す便りとせん。

右大臣菅原道才も世にすぐれめでたくおはしまし御心あきても殊の外にかしこくおはしまし左大臣藤原時平は御年も若く才も殊の外に劣り給へるにより右大臣御おぼえ殊の外におはしましたるに左大臣安からず思したる程にさるべきにやおはしけん右大臣の御ためによからぬ事出でて昌泰四年正月廿九日太宰權帥になし奉りて流され給ふ。此の大臣の子供あまたおはせしに女君達は婿どりし男君だちは皆ほど／＼につけて位どもおはせしをそれも皆かた／＼に流され給ひて悲しきに幼なくおはしける男君達女きんたち慕ひ泣きておはしければちいさきはあへなんとおほやけもゆるさしめ給ひしかば共にあて下り給ひしぞかし。みかどの御あきて極めてあやにくにおはしませば此の御子どもを同じ方にだに遣はさしりけり。かた／＼にいと悲しくおぼして御前の梅の花を御覽じて

こち吹かば匂ひあこせよ梅の花あるじなしとて春なわすれそ
又亭子のみかどに聞こえさせ給ふ

流れ行く我れはみくづとなり果てぬ君老がらみとなりて止めよ
なき事によりかく罪せられ給ふを長く思し歎きてやがて山崎にて出家せしめ給ひてけり。其の程きはめて悲しき事多かり。日比經て都遠くなるまゝにあはれに心細くおぼされて
君がすむやどの梢をゆく／＼どかくるゝまでもかへりみしかな
又播磨の國におはし着きて明石のうまやといふ所に御やどりせしめ給ひてうまやの長のいみじう思へるけしきを御覽じて作らしめ給へる詩いとかなし。

驛長無驚時變改 一榮一落是春秋

筑紫におはしましつきてあはれに心細くおぼさるゝ夕をち方に所々烟りたつを御覽じて

夕されば野にも山にも立つけぶりなげきよりこそもえまさりけれ

又雲のうきて深ふを御覽じても

山わかれ飛び行く雲のかへり来る影見る時ぞなほたのまるい

さりともと世をおぼしめされけるなるべし月のあかき夜

海ならずたよふ水の底までもきよき心は月ぞてらさん

これいとかしこくあそばしたりかし。げに月日こそは照らし給はめとこそ
はあめれ。賊におどろくしきことはさる物にてかくやうの歌や詩などを
さへいとなだらかにゆゑくしういひつつけ給ふと見聞く人目もあやにあ
さましくあはれにまもり居たり。物のゆゑ知りたる人なども無下に近く居
よりて外目せず見聞けしきどもを見ていよくはへて物をくり出だすや
うに云ひつくる程を賊に稀有なるや。繁樹山のら夏を拭ひつつけう居
たり。筑紫におはしますところの御門も固めておはします。大貳の居どこ
ろは遙なれども樓のうへの瓦などの心にもあらず御覽じやられけるに又い
と近く観音寺といふ寺のありければ鐘の聲をきこしめして作らせ給へる詩
ぞかし。

都府樓纒看瓦色

観音寺只聽鐘聲

これは文集の白居易の「遺愛寺鐘欬枕聽香爐峰雪撥廉看」といふ詩にもまさ
まに作らしめ給へりところ昔の博士どもは申しけれ。又かの筑紫にて九月
九日菊の花を御覽じけるついでにまだ京におはしまし、時九月のこよひ内
裏にて菊の宴ありしに此のおと作らしめ給へりける詩を帝ミカドかしこく感じ
給ひて御衣賜はりたまへりしを筑紫まで下らしめ給へりければ御覽するに
いと其の折りおぼしめし出で、作らせ給ひける

去年今夜侍清涼

秋思詩篇獨斷腸

恩賜御衣今在此

捧持毎日拜餘香

此詩いとかしこく人々感じ申されき。この事どもちりくくなるにもあらず
彼の筑紫にて作りあつめさせ給へりけるを書きあつめ一卷とせしめ給ひて
『後集』と名つけられたり。又をりくの歌を書きあかせ給へりけるをあのづ
から世にちりきこしなり。世繼宅のち大が若う侍りし時此の事のせめてあは
れに悲しく侍りしかば大學の衆のなきふがう然にはいますかりしを問ひた

づね暗らひとりてさるべき餌袋わりごやうのもの調じて打具してまかりつ
つならひとりて侍りしかど老いのけのはなはだしき事の皆こそ忘れ侍りに
けれ。是れは唯、頗る覺え侍るなりといへば聞く人々げにくいみじきすき
ものにも物し給ひけるかな今の人はさる心ありなんやと感むあへり。又雨
の降る日うち詠め給ひて

あめのまたかはける程のなければや着てしぬれ衣ひるよしもなき

やがてかしこにて失せ給へり。

『大鏡』と『榮花物語』とを歴史文中の双壁とす。次ぎて出でたる『水鏡』『今鏡』は全く
是等に倣ひて作れるものなり。就中『水鏡』は『大鏡』に『今鏡』は『榮花』に擬せしとこ
ろ多し。『水鏡』は『大鏡』に記載せる事蹟以前に溯りて神武天皇より仁明天皇に至
るまで歴代の變遷の大概を録せり。作者は中山内府忠親公なりと傳ふ。公は京
極太政大臣藤原師實公の曾孫にして二條天皇の永曆の初め藏人頭となり六條高
倉安徳天皇の三朝に歴仕し後鳥羽天皇の建久六年に逝りき。享年審かならず。
『水鏡』の結構は大和の龍蓋寺より泊瀬寺に詣で、經讀みける夜の夢に仙人の現れ

て物語りせし跡にもしたる彼の世繼の翁の事と相似たり。かく模倣なる故に
か全跡の結構も文章も彼れに比ぶれば大に劣り又記事も『六國史』などの概略を通
俗文に改めしと大差ありとも見えす。まかるに『今鏡』に至りては元來同じ人の作
とは云へれど『水鏡』にも優りて多少の見所ありと覺ゆ。其の書名は『大鏡』などに對
して今代の事蹟を録したる故にて又『小鏡』とも『續世繼』ともいふ。書中の記事は
後一條天皇の御宇より高倉天皇の朝に至る。天皇の本紀をすべらぎの巻と稱し
道長公の子孫の傳を藤なみと稱する等其の跡裁『大鏡』の如く又巻中を數段に分割
して風雅なる名目を題命したる凡べて『榮花物語』の風に似たり。

以上列記せる諸作は孰れも時代を追ひて順當に記載したる歴史跡のものなれど
も是等とはやゝ其の趣を異にして而も尙實事の記録たるは是等よりも先きに出
でたる『宇治大納言物語』なりとす。『宇治大納言物語』は大納言源隆國の作るどこ
る。隆國は源俊賢の第二子なり。此の人年長ずるに及びて體格肥大なりしかば
暑を詫びて夏日は宇治平等院一切經藏の南なる南泉房といふに寓居したりき。
世に宇治大納言といふも此の故なりとぞ。後冷泉、後三條諸帝の御代を経て白河

天皇の承暦元年七十四才にて薨じき。或時關白頼通公の邸を小馬にて出入し是れは足駄にて候ふ馬には候はずといひしかば公も亦強ひて咎めざりきといふ。以て其人と爲りを想ふべし。其の『宇治大納言物語』は南泉房に寓居せしころ菟を板上に敷きて涼みがてら大なる團扇もてあふがせなどして往來の貴賤男女をいはず呼び集めて昔物語せさせて自らは物蔭にひそみて竊に之れを聞き語るに從ひて書き留めおかれたるものなりといふ。かゝれば其の記する事には國の内外を問はず貴き事、賤しき事、面白き事、あはれなる事、實なる事、虚なる事さま／＼あり。まかれども其の事は悉く當代の見聞き傳へたる事柄を其のまゝに寫したるものなれば實事なるは勿論、虚事もまた當時の人情風俗さては感想を知る好材料たるべし。故に此の書は文學的著作として一讀の價值あるのみならず歴史考究の上にも重要な良書といふべし。而して文體は當時の普通語をさながら面白く書きなしたれば其の言詞の平易解明にして澹如たるうちに不可言の趣致あり。殊に漢語を交へたること他に是れまで其例なき程多きにも拘はらず能く不調和の痕跡を止めざるは俗語の變遷著るく此頃早う和漢混和體に趣きたるを證明す。

尙左に擧げたる文例にて事の奇怪なると文の他に異なる點多きを見よ。

山横川賀能地藏の事

これも今は昔山の横川に賀能知院といふ僧極めて破戒無慙のものにて晝夜に佛の物を取りつかふ事をのみまけり。横川の執行にてありけり。政所へ行くとして塔のもとを常に過ぎありきければ塔のもとにふるき地藏の物の中に棄て置きたるをきと見奉りて時々きぬかぶりしたるをうちぬき頭を傾けて少しく敬ひ拜みつゝ行く時もありけり。かゝる程にかの賀能はかなく失せぬ。師の僧都これを聞きてかの僧破戒無慙の者にて後世定めて地獄に落ちん事疑ひなしと心憂がり哀み給ふ事限りなし。かゝる程に塔のもとの地藏こそ此の程見え給はぬ如何なる事にかと院内の人々言ひ合ひたり。人の修理し奉らんとて取り奉りたるにやなどいひける程に此の僧都の夢に見え給ふやう此の地藏の見え給はぬは如何なる事ぞと尋ね給ふに傍に僧ありていはくこの地藏菩薩早う賀能知院が無間地獄に落ちし其の日やがて助けんとて相具して入り給ひしなりといふ。夢心地にいとあさましくて如何にし

てさる罪人には具して入り給ひたるぞと問ひ給へば塔のもとを常に過ぐるに地藏を見やり申して時々拜み奉りし故なりと答ふ。夢覺めて後自ら塔のもとへおはして見給ふに地藏誠に見え給はず。さばこの僧に誠具しておはしたるやと思す程に其の後又僧都の夢に見給ふやう塔のもとにおはして見給へば此の地藏立ち給ひたり。これは失せ給ひし地藏如何にして出で來給ひたるぞとの給へば又人のいふやう賀能具して地獄へ入りて助けて還り給へるなり。されば御足の焼け給へるなりといふ。御足を見給へば誠御足黒う焼け給ひけり。夢心地に誠にあさましき事限りなし。さて夢さめて涙留らずして急ぎおはして塔のもとを見給へば現にも地藏立ち給へり御足を見れば誠に焼け給へり。これを見給ふに哀に悲しき事かぎりなし。さて泣く泣く此の地藏を抱き出し奉り給ひてけり。今におはします。二尺五寸ばかりの程にこそと人は語りし。是れ語りける人は拜み奉りけるぞぞ。

其の後此の『宇治大納言物語』に書き入れたる書出來にき。彼の物語に漏れたるを拾ひ集めたりとの意にや『宇治拾遺物語』と名つけぬ又侍従を拾遺といへば『宇治拾

遺物語』といへるにやと古書に見えたり。いかにや是非知りがたし。但し此の書著作の時代は平安以後なるべしといふ説は正確なるが如し序でなれば記載しおきつ。

第四期 鎌倉時代の文學

第壹章 總論

年代の範圍 鎌倉時代に於ける文學の概況 言語文章

鎌倉時代の文學とは政治上の變革に従ひ後鳥羽天皇の文治二年(一八四六)に源右府頼朝頼府を鎌倉に奠めてより後醍醐天皇の建武二年(一九九四)に足利尊氏大將軍と自稱して謀反する頃まで凡百五十年間に於ける文學を指すなり。一層精密に云へば此の期の末葉二年の間は王政復古の秋なりきと雖も文學界の現象にはさまで小區劃を置く程の變革差異を認めず故にこゝには之れをも一括して其のまゝに鎌倉時代の文學といふ。

此の時代に於ける文學は大やう平安朝のに似而も異なるところ亦多し。歌謡の綺語を列ね只管ら艶麗ならんとを努めたるは特に此の時代なる歌界の現象なりきといへどもなほ平安朝の末期に於いて既に此の傾向見えれば此は只彼れのが追ふべき道を進行したるのみ。日記、紀行、歴史の文はた彼の舊路をとりて走る者特に著るき異象を認めず。されば是等諸種の文學をとりて平安朝のに比較す

るにちのづからなる趨勢を保持したりといふ外更に異なる點あるを見ず。志かのみならず是等の文學は彼の朝に於けるが如くひとへに貴族社會のなぐさみ草たるに過ぎざりき。然れ共此の時代に始めて現れたる戰記物語は特に其の異點として揭示すべき者あり。こは實に其の材料の斬新にして是れまで其の類例を見ざりしのみならず其の用語文章も亦太く異なるどころあり。通俗的傾向見ゆ。かゝれば鎌倉時代の文學は平安朝の、貴族的なりしに今一つの通俗的趣味をも加へたるものなりと謂ふを得。これ此の文學の平安朝のに似て而も亦異なるどころ多しとする所以なり。而して彼の文學の一般に優美なりしに引かへて是れに雄壯なる點多き又は彼の文學の概して樂世的なりしに反して是れの厭世的傾向を帯びたる共に著大なる差異となすに足る。是れ孰れも當代の初期に於ける兵亂闘争のちのづから人心をして勇武に傾かしめたると興廢治亂の定まりなきが自然に無常の觀念を鼓吹したるに依る。なほ委しくは次章に掲ぐる社會の概況と題する項を讀みて知りぬ。

作者には後鳥羽天皇、西行法師、鴨長明、源實朝公、順德天皇、慈鎮和尚、藤原定家卿、藤原家隆卿、源賴行朝臣、葉室大納言時長、辨内侍、阿佛尼、信濃前司行長等其の名最も高きもの。著書には『方丈記』『保元物語』『平治物語』『源平盛衰記』『平家物語』『十六夜日記』『新古今集』『新勅撰集』『山家集』等普く世に聞こゆ。

言語は前期に於いても既に漢學佛教の流行につれて外國語の混合漸く多かりしが此の期に入りては更に著るきものありき。戰記物語に於いて別して多し。剩へ此の時代は遣唐使並に留學生を廢して既に許多の年月を経過し又前期の末葉より兵亂頻りに起りて人々武事に忙まかりしかば漢學の講究次第に衰へ隨ひて措辭用語や亂雜なるものあるに至りぬ。而して戰記物などに至りては文の性質のづから雄壯剛強の語勢を要する故に其の用語に急迫の姿あるを擇びて撥呼促呼の音便を用ひたること多し。さかり(盛)をさかんといひずば(不者)をずんばといひまさき(眞先)をまつさきといふ如き是れなり。又此の頃よりこそあるなれをござんなれといひおはれをあつばれといひ落つる通ぐるといふを開く延ぶるといふなど一種武者詞とも云ふべき言語もありき。かゝれば是等の言語を用ひて書きつたりたる文學所謂平民的なりしこと云ふまでもなかるべし。

さて當時の言語はかくの如く種々雑多のもの行はれたりしにも拘はらず其の文章は能く巧に彼此を調和して從來よりも自由なるを得たり。雄渾偉大莊重謹嚴を要する時には専ら漢語を用ひ悲哀優美緻密を欲するをりには則ち佛語もしくは固有の國語をとりぬ。故に章句の間波瀾頓挫自在にして活動の妙具はりさながら自然の光景を寫すに堪へたり。以下章を追ひ節を重ねて説き分くるを見て之れを知れ。

第二章 社會の概況

武門並びに皇室 鎌倉武士の質樸 京都縉紳の奢侈

武士道 佛教の復興 漢學の衰弊 擬漢文

源右府頼朝平氏の一族を西海に滅してのち幕府を鎌倉に創設し諸國に守護地頭を配置し悉く其の家人を以て之れに任用し自ら總追捕使となり遂に征夷大將軍に任ぜらるに及び政權全く其の手に歸して朝廷いよ／＼衰へにけり。まかれども頼朝の薨後其の子頼家實朝相繼ぎて職を襲ぐに至り共に武將の器量なくて源家の嫡流は僅に三代にして亡びぬ。北條時政並びに義時常に外戚の威を弄して

狼戾の志を逞うしおのれ鎌倉の實權を得んがために源家の門葉をvari其が譜代の豪族を殲くし遂に實朝をも斃しけるなり。是に於いて義時は自ら將軍ともなり得べきをわざと源家に姻戚ある左大臣藤原道家の子頼經を迎へ立て、表面上鎌倉の主と迎ぎぬ。頼經此の時甫めて二歳の頃は是もなきに剩へ北條氏の迎立に關かるを以て在れどもなきが如し世はます／＼北條氏の世となりて僧上の沙汰次第に多く皇威日に月に微なり。後鳥羽上皇常に之れを愛憤せさせ給ひ和歌管絃の暇には只管武藝を講習して王政の復興を企て給ひしが端なく承久の亂となり却つて北條氏のために敗られて當時の天皇をはじめ奉り上皇たち悉く播遷せられ皇室の尊嚴地に墜ちて幕府の權威いよ／＼加はりぬ。是れより幕府京師の警固を名として南北兩六波羅に探題職を置き以て禁中の動靜に備へたり。其の後北條泰時時頼相次いで幕府の執權たるに及び二人努めて善政を布き勤儉を守りもつて下を率ゐしかば將士其の徳に服し民其の堵に安んじ幕府大に盛なり。時頼の子時宗職を襲ぎたる初め蒙古の事あり弘安四年彼の名高き元寇の役となりしも公武一致の力容易く之れを退け再び四海波靜かなり。然れども此の役は

國家多年の蘊蓄を蕩盡すると甚しく之れがために幕府の威權隆昌なりしにも拘はらず國用漸く缺乏して支辨苦しくなりけり。戰勝の將士其の勳功を申して恩賞を請へども應ずる能はず邊戍の防人軍資の缺乏を告げて支給を仰げども答ふるなし。永仁五年僅に徳政を名として賣買貸借の平均を命じ一時を彌縫せしかども徳政元來徳政ならず財産の安固を打破して武人の利を爲しに止まりしかば衆庶却りて之れを怨みぬ。此に至りて北條氏の權力は又昔日の比にあらざりしは勿論の事なりとす。加ふるに内に一族の權を爭ふあり外に守護地頭の勢ひを得て幕府の權力また收むべからざる有様あり。貞時を経て高時に至り暗劣にして其の任に堪へず幕府全く衆心を失ひたり。是れより先京都方にて亦後醍醐天皇のち皇統分かれて持明院大覺寺の兩派となりて皇位の競争絶えざりき。後醍醐天皇大覺寺派より出で、位に即くに及び英邁勇武幕府の衰弊に乗じて王權を回收せんと計りしが事中途に破れて姑くなぎさの月にさすらひ給へり。然れども世の勢運は北條氏に利ならず幾程もなく四方勤王の士雲霞の如く起り天皇また島山を出で給ひぬ。かくて元弘三年北條氏遂に亡び幕府また隨うて

斃れぬ。其後中興の業緒に就きしも將士の行賞平らならずして互に其の功を争ひ天皇又政治に倦ませ給ひて顧みざりしが茲に五十餘年の禍亂を醸成せり。其は足利尊氏の謀反に始まりしなり。

此の時代の初期に於ける京都公家の俗は大よそ前期に異ならざりき。春の朝に花を尋ね秋の夕の月にあくがるゝは勿論の事なり衣裝は綺羅を飾り飲食は膏粱を味ひ若菜摘野遊、川狩、萱狩、紅葉狩、さては香合、歌合、前裁合、蹴鞠、へんつき、雙六、圍碁、將棋等の會合に日も足らぬ様なりけり。まかるに鎌倉武士の風俗は遠く都を距りて僻陬の地に在りし故に未だ華奢遊惰なる都人士の風に染まらず質樸にして廉直を尙ひぬ。さる程に頼朝將軍をはじめ北條氏又率ね世々質素勤儉を以て將士を統御するを努めたりしかば上の好むところ下之れに倣はざるはなく一般に虚飾を嫌忌する風を馴致せり。遊戯の如きも都人士の如く詩歌管絃に日を暮すは少く流鏑馬、笠懸、犬追物、相撲等のあらゝしき技を練習し又公務の暇には隊伍を組み、て戰場に向ふが如く遠く那須野若しくは富士の裾野等の地に狩獵を催しつゝ一向尙武の氣性を鼓舞せんと計れり。然れば此の時代に於いて最も高く武人

を標致せしものは世に所謂武士道是れなり。武士道とは武人の質素醇樸は云ふに及ばず義を鐵石に比して然諾を重んじ廉直にして氣節高く苟くもものが家名を墜すことなからんとする氣性をいふ。是は元來此の時代に始めて發現したるにあらざり古よりありき。前々期に於いて奈良朝の俗は敬神の念忠君の志氣さては崇祖の情に富むと云ひしもの即ちこれに等し。されど此のもの世の降るにつれて浮華なる都人士の間には何時しか此の氣性打絶えて只邊土の田舎漢のみ是れを有するとなれり。故に當初邊土より起こりし者は孰れも此の氣性を有せざるはなし平氏の如き國を出で、久しく京都に留まり華胄公子の風に馴れて柔弱となり多少武人の本性を失へりしものも尙其の最期に臨みては一族擧つて西海の濛濛と消え失せぬ。是れ豈に武士道てふ氣性の残れるに依らざらんや。源家の一黨關東に起こり頼朝將軍以下北條氏に至る迄世々質素の風を養成し卑劣尾籠の振舞を戒む武士道の氣性前古無比の隆昌を極めしも亦宜ならずや。さて京都と鎌倉とは其のはじめ斯く其の風俗を異にせしかども承久の亂後京師の警固として兩六波羅の地に關東の武士許多駐劄するに及びては華美優柔なる

都人士の俗も殆ど之れに化せられて質素醇樸の風に移りぬ。射御狩獵の武技を演じ時に臨まば武人を凌がんとするものをも生ずるに至りぬ。而して武士道の氣性はこゝにも亦其の化を及ぼしたり。之れに反して鎌倉武士の風俗は將軍を京師より迎立するに及びて多少其の醇樸を失ひぬ。時頼の世營中に早晝番を置き和歌管絃騎射等の藝道に通ぜる士を擇びて採用せしかば關東の將士漸く文藝を弄するものあり。貞時襲職の頃よりは優柔風をなし宴樂のあまり家計窮乏して領地を典賣し田園を失ひて流浪せるもありきとぞ。高時の世となりては此の弊いよく甚しく浮浪の徒次第に其の數を増し相結黨して奪掠を爲し民家官舎に闖入して人を殺傷し財物を奪ふもありき。かくて武士道の義ほとんど求尋すべからざるに至れり。

かく鎌倉並びに京都の狀態の消長せる間に在りて絶えず其の風俗の上に莫大の影響を及ぼしたるは宗教の思想なり。是は源平の興亡は勿論皇室の陵夷其の他前期の季より天災地妖頻りに興りて人々不安の念を起こましに加へて頼朝將軍常に敬神崇佛をもて施政の一手段となしたるによりて榮えしなるべし。其の中

に就きて最も多く人心を刺戟聳動せしめたるは佛教の復興なりとす。さて佛教は前朝の末葉より其の弊を生じ僧徒戒律を守るは少く妄りに神輿神木を振りて嗷訴し殆ど世の害毒たる觀を呈したりき。まかるにかゝる衰弊は端なくも亦其の反動として數多の名僧を蹴起せしめ諸種の宗派を創始せしめたり。此の際京鎌倉に於いて上流社會に最も隆盛を極め併せて北條氏の喜ぶところとなりしは禪宗なりき。禪宗は早く嵯峨天皇の世唐僧義空來朝し東寺の西院に寄寓して其の教義を弘布せしが其の後一旦中絶したるものなり。此の時代の初期に及びてまた僧榮西の傳ふるところとなる。榮西は後鳥羽天皇の文治年中入宋し建久年中歸朝したる人、建仁寺等を創設せり。臨濟、曹洞等相次いで起る、皆禪宗の分派なり。建仁寺(建仁)は勿論、壽福寺(實朝)、建長寺、圓覺寺(以上北條)、南禪寺(龜山)、東福寺(原建家)等は皆禪宗の道場、如何に其の宗の盛大なりしかを窺ふに足らん。况や失意の徒は云ふまでもなく輕癪に罹るもの忽ち圓頂黒衣の法師となりて禪門禪尼と稱せしもの貴賤男女を通じて其の數多かりきと傳ふるに於いてをや。禪宗の外鎌倉幕府の一期間に起こりし諸宗派を擧ぐれば淨土宗あり一向宗あり法華宗あり

り時宗ありき。淨土宗は高倉天皇の御代に僧源空(法然上人)の弘むるところにして其の門徒甚だ多し。其の教義の要旨は男女貴賤を問はず只、南無阿彌陀佛の六字を唱ふれば往生の妙果疑ひなしと云ふにあり。此の宗旨元來この時に始まるにあらざ遠く天慶の昔僧空也の唱道せしところ、鳥羽崇徳兩帝の頃に僧良忍(聖應大師)阿彌陀如來の示現を感受したりとて又融通念佛を弘めたるに榮え源空に至りて淨土宗を開き専修念佛を唱へたるなり。一向宗はまた淨土眞宗ともいふ源空の徒弟範實(親鸞上人)の開始せる宗派なり。彌陀の一佛を念ずるによりて後世の佛果を得べしと説き僧侶の肉食妻帯あしからずと説きぬ。是れよりさき世既に天台止觀の教ありきといへども兵亂打つゝ世の中には靜念を凝らして法を觀ずるを得ず而して源平の興亡をはじめ世の急變は太く人心をして無常の感を起こさしめ只管宗教の力を借らんことを希はしむるに至りき。此の際に於いて唯、南無阿彌陀佛の六字を唱ふれば後世の成佛疑ひなしと説ける他力易行の法門ひらく天下の衆心豈に歸せずして止むべき。貴賤を問はず老若といはず大

早の雲霓を得たる如く踊躍喜悅して其の門に走りぬ。是に於いてか天台の徒大に憤激して之れを排斥し政府の力を藉りて之れを妨害したれども時勢の潮流は却りて其の反動力を増すのみにて益、彼の宗の鞏固を致すに過ぎざりけり。其の後、後深草天皇の御代に至り天台の徒に日蓮と呼ぶ僧あり、末法澆漓の時機に至りては觀念觀法は到底成就し能はざる所なれば下根下機に向つては唯、信心肝要なりといひ南無妙法蓮華經の七字を以て一切衆生の佛性を喚びおこす功德ありと説き鎌倉に下りて一宗派を開く。法華宗と呼ぶもの即ち是れなり。其の頃また僧道御といふもの、他力信心の徳を説く大念佛宗と唱へて世に行はれたり。同じころ此の流に又時宗の一派を生じぬ。こは僧知信の創唱せるところなり。知信一に一遍上人といひ又遊行上人とも云へり弘教のため諸國を遍歴せるに依る。そもく禪宗は言教文字に依らぬ自力難行の宗旨にして淨土宗等は他力易行の宗義なれば全然其の要旨を異にすと雖も外形を輕んじ努めて内心の安樂を得んとする點に於いて相同じ。故に諸宗相並びて流行し以て當代に於ける質素の俗と相合し相助けてますく其の美風を育成せり。されど延暦興福等の僧徒神人の暴威を逞うし殺伐を事として破戒無惡の行爲ありし事は尙前期と異ならざりき。即ち弘安六年に延暦寺の僧徒神興を奉じて禁闕を犯さしことありしを知らば他は云はずして之れを想察に難からざるべし。

おもふに佛教の盛大となりしは既に人心不安にして後世を願ふもの多かりしに依るといへども又其の教義に化せられて現世を果敢なむものなかりしを保せんや。兎にかく當鎌倉時代には世の無常を果敢なむもの多かりけり。世を果敢なむにつけて虚飾を厭ふは理の當然、此の時代の人々虚飾を忌み質素の風を維持せしも洵に宜なり。

漢學は前期の末より著るく退歩して京都の大學も諸國の國學も共に衰弊を來たしたり。此の期に入りては尙一層甚しきものあり國學さへも全く亡びて只正和五年の頃に至りて武藏國金澤に北條顯時の私設に係る金澤文庫ありて僅に全滅を防ぎたるありしのみ。其の間京師にありても明經明法の講究打絶えて上下一般に學を好むもの少く天皇も僅に御學問として是一部の群書治要を講明せさせ給ふに過ぎざりきとかや。されば此の期の初つ方より早く既に正格の漢文を作

り得るもの次第に減少したり。就中兵馬の間に戈をとりて馳騁せし武人は正格の漢文をば讀解し得るものたにもなかりしかば遂に和漢混合したる一種異様な擬漢文體を生ずるに至れり。其の頃出でたる『吾妻鑑』をはじめ『臺記』『人車記』『玉海』『明月記』『山枕記』『百練抄』『貞永式目』等其の他手簡の文悉く此の類の書さまなり。かゝれば此の時代に於いては新たに漢學の影響を蒙りしこと甚だ尠し而も漢學の講究既に年久しきに亘るを以て其の章句を摘み故事故典を其のまゝに用ひて文章の裝飾となせしこと未だ此の期に過ぎたるはなし。

以上叙べ來たりしところ更に要説すれば此の時代は概して一々質素尙武の風に富み且宗教的思想一般に彌蔓して時に厭世の聲あり而も宗教思想は世態の急速なる變化によりて發はれたり。人心の反映たる美術殊に文學上に顯はれたる思想は如何なるものなるべきか最早再説せずとも大かたは容易く推測するを得べけん。但し一概に鎌倉時代といふも精密には尙京都人士と鎌倉武士とありて當初には全然區別ありしかば文學また豈に多少の差異なしとせん。其は以下章を重ねて細説するに至らば一層明了となりぬべし。文章の事は大畧前章に述べたり、悉くさいるところはた次々に至りて明瞭とならん。今は只此の時代の世態と文學と如何に相涉るところありしかを知らば足る。

第三章 歌謡

第壹節 歌界の状況

歌謡の奨励『新古今和歌集』の撰定 其の歌思及び歌體

『新古今』以後の勅撰歌集 家集及び歌學の書

平安朝の末葉は兵馬倥傯の際なれば諸事滯滞せしものも多かりしに歌謡のみは尙依然其の舊勢を保續して上達部殿上人は云ふに及ばず武人にしても鬪諍の暇には風月に雅懷を寄するもの尠からざりき。されば矢叫びの聲漸く止みて政權遂に武門の手に遷りしのちなる當鎌倉時代の状態は大凡推測りても思はるべし。さらぬだに從來政治に關與すること稀れなりし大宮人はいよ／＼閑を得て風雅の道に心を委ねるもの多かりしが中にも歌よむことぞ一きは盛なりける。當期のはじめつ方藤原俊成卿尙世に在り後鳥羽天皇をはじめ奉り僧西行藤原隆信朝臣全其經卿源通親朝臣等既に高手として其の名聞こえたり。土御門天皇の御代

建仁元年(一八六一)に後鳥羽上皇和歌所といふを院中に設けさせ給ひ良經卿、通親朝臣、西行法師、俊成卿、慈圓僧正、隆信朝臣、鴨長明、藤原秀繼朝臣、源通具朝臣、藤原有家朝臣、全定家朝臣、全家隆朝臣、源雅經朝臣、寂蓮法師等十三人を撰びて寄人の職に補し専ら斯道の奨励を務め給ひしかば其頃名人として目せられし者無慮三四十人に及べり。即ち以上の外土御門順徳の二天皇源實朝將軍、慈鎮和尙、式子内親王、宮内卿(右京大夫師光の女)俊成卿の女等相次ぎて其の名世に高かりき。かゝれば當時歌合の會頻りに流行し孰れも全力を竭くして其の勝敗を競ひ一首の歌を批判するにも尙數日を消費するとありき。さればまた題詠に思考を構ふる事は前代に比して一層巧を加へ着想新奇にして複雑なるを賞びぬ。而してこは當代の歌謡が當に取るべき方向なるべし。當代の歌人は多くは前期の如く同じく平安城里に逸遊する公卿殿上人に過ぎざればなり。故に見よ此の時代に於いても鎌倉より出でたる歌人の詠には當時の詞壇のなべての風調を離れて稍古調を帯び其の想も雄渾壯絶如何にも武人の手に成りしを思はしむるものもありけるを。實朝將軍の如きは即ち此の種の歌人の最も俊秀なるものなり。

歌躰には長歌全く跡を絶ちて短歌ひとり榮え連歌と今様とはた稀に見ゆ。就中今様には催馬樂朗詠の一轉して専ら調曲を主とせる歌曲躰のもの大に流行せり。是はもとより前期に於いても散見せりと雖も此の時代に入りて一層隆盛となれるなり。

さてかゝる盛時に出で、古今の歌界に一の異采を添へたるを勅撰の歌集『新古今和歌集』とす。『新古今』は土御門天皇の元久二年(一八六五)に後鳥羽上皇の院宣によりて當時の名匠たりし通具朝臣、有家朝臣、定家卿、家隆朝臣、雅經朝臣等の撰進せるものなり。是れ『後撰和歌集』の撰者なる梨壺の五人に倣ひたるなりといふ。僧寂蓮も其の初め撰者の一人なりしが未だ奏覽を歴ざるに先ちて逝りぬ。撰者常に鳥羽の離宮に集合して撰ばせられしに上皇もみづから臨御まゝまして之れを總裁せさせ給へりきとぞ。卷の數は總じて二十部門の類別また略、前代の諸歌集と同じく春夏秋冬、賀、哀傷、離別、羈旅、戀雜、神祇釋教等の數項に分かてり。此の集上の七代の歌集に見えたるもの、外は『萬葉集』に出でたるのをまゝ網羅す。故に集中列載せる歌人には人麿、赤人をはじめ貫之も躬恒も凡そ是れまでの諸集に見え

たる名匠にして其の名の漏れたるはなし。

『新古今』の序に曰はく右衛門督源朝臣道具、大藏卿藤原朝臣有家、左近中将藤原朝臣定家、前上總介藤原朝臣家隆、左近少將藤原朝臣雅經等におほせて昔今時を別たす高き賤き人をきらはす目に見えぬ神佛のこころのほも鳥羽玉の夢に傳へたる事まで廣くもさめ普く集めしむ。各、撰びたてまつれるさころ夏引の糸の一筋ならず夕の雲のおもひ定めがたきゆゑに縁のほら花かうばしきあした玉のみぎり風すゞしきゆふべ離波津の流れを汲みて混みにされるを定め淺香山の跡を尋れて深き淺きを別けてり。『万葉集』に入れる歌はこれを除かず『古今』よりこのかた七代の集に載れる歌をばこれを載する事なし。但し詞の固に遊び筆の海を汲みても空飛ぶ鳥の網をもれ水に住む魚の釣をのがれたるたぐひ昔もなきにあらざれば今もまた知らざる所也。凡て集めたる歌二ちと二十卷名づけて『新古今和歌集』といふ。春船立田の山に初花を忍ぶより夏は妻戀ひする神なびの時鳥、秋は風に散る葛城の紅葉、冬は白妙の富士の高嶺に雪つもる年のくれまで昔をりに聞れたるなきけなるべし。加之、高き屋に遠きを望みて民の時を知り末の露もさの粟によそへて人の世をささり玉鈴の道の邊に暮ひ、あまさかる鄙のなが路に都をおもひたかまの山の雲井のよそなる人を戀ひながらの橋の浪に朽ちぬる名を惜しみても心うちにおもひ言葉外にあらはれずさいふこさなし。況や住吉の神はかたそぎの言葉を残し傳教大師は我が立つ柳の思ひを述べ給へり云々。

此の集に見えたる感想の如何につきては格別とり出でし紹介すべきほどの點あ

ることなし。即ち此の集の歌人が題目とする所は往昔の歌人が爲ましに異ならず月花のあはれを詠じ男女相思の情をうたひ身を歎き人を悲しむなどの類に過ぎざればなり。されども其の着想と措辭との頗る新奇にして餘韻深き、又其の句調の雄壯にして流麗なる前代無比優に一機軸を出だせる趣あるを見る。例へば

藤原家隆朝臣

かすみたつすゑの松山はのくくと浪にはなるよこぐものそら

大神宮に奉りし夏歌中に

太上天皇

ほととぎす雲井のよそにすぎぬなり晴れぬおもひのさみだれの空

百首歌たてまつりし時

藤原定家朝臣

駒とめて袖うちはらふかげもなし佐野のわたりの雪の夕ぐれ

の如き以て一斑を知るに足る。此の集を以て花實兩全の『古今集』に比す彼れは天然の雅致高く是れは人工の妙掬すべきもの多し。若しそれ此の集の歌のかく幽玄にして餘韻深きにも拘はらず時に詞華言葉を弄したる一種の藝術なるかの如

く卑野なるもの、見ゆるは奇を求むるに過ぎたる餘弊なるべし。かるが故に其の歌一見誦者の心を動かすものも熟思する時其の纖巧の甚しきに飽かしむるものなきにあらず。

石原正明の『尾張の家づこ』に曰はく『新古今集』の頃の歌は一首の口調をめでたくさゝのふる事を本意として調の上に心を残して餘韻を深くこめ一首のつゞけさま幽玄にしてあらはに淺まなる所なく情を深うし韻勢をいたはり、たけ高くも、まめやかに、つよくも、やはらかにも百般の姿あり。たゞまほく、ぐたぐたとするをきらひて詩人のいはゆる雄偉流暢豪壯新奇といふしらべを常に思ひためり。かの新奇なるあまりにこまやかに理を云はばすこしいかにぞやと思はるゝふしなきにしもあらねどそれはた瑕ありとも玉さならん事を願ひて全き瓦を思はざりし物なり」と。

村田春海の『歌がたり』に曰はく『此の姿好める人は其の頃の人に優れたる歌あることを思ひもわけて其の世にひそふし詠み出でたる手ぶりをのみ面白き事に思へるは違へり。其は上手のこまやかに取りつくるひたる物なれば一わたり打ち見てえも云はずなかしきか如くなれど古の歌より見れば心の鹹少くして調麗なるに過ぎて卑しげなり。『新古今』を讀まんには主として此の差別を思ふべし」と。

此の集の歌が古今の歌界に一新機軸を出だせりしこと上來叙述したるが如し。かゝれば隨うて此の集には古調の歌をも新らしく改竄し以て當時の風調に合せ

んとせり。例へば『萬葉集』に持統天皇の御歌とて

春過ぎて夏來たるらし白妙のころもほしたり天の香具山

とあるをば

春過ぎて夏來にけらし白妙のころもほすてふ天のかぐ山

と改め赤人の富士の嶺を詠ずる歌に

田子の浦ゆうち出で、見れば眞白にぞ富士の高嶺に雪はふりける

といへるをば

田子の浦にうち出で、見れば白妙の富士のたかねに雪はふりつゝ、

と改め人麿の歌の

久方のあめにしらるゝきみゆゑに月日も知らず戀ひわたるかな

とあるを

久方のあめにしをるゝ君ゆゑに月日も知らで戀ひわたるかな

となしたる類是れなり。蓋し夥多ある中には古歌をよみあやまり覺えたがへたるもあるべけれども兎も角も其の句調當時の風を帯びて何となく麗はしく新奇

なるを見るべし。而して此の集の歌に古詩又は古歌の意若しは句を其のまゝにとりたるもの多きは例の題詠に巧を競ひたる否むしる詞花言葉を弄したる結果とも見るべし。右衛門督通具の千五百番歌合の歌に

梅の花誰が袖ふれし句ひぞと春やむかしの月に問はゞや

といへるは『古今集』に色よりも香こそあはれとおもほゆれ誰が袖ふれし宿の梅ぞもとあると又月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身ひとつはもとの身にしてとある二首の歌の意と詞とをとりて詠ぜるものにあらずや。藤原俊成卿のほととぎすを詠ぜる歌に

むかし思ふ草のいほりの夜の雨になみだな添へそやまほととぎす

といへるは白樂天の詩に闕省花時錦帳下廬山夜雨草庵中とある句を引きたるものなるべし。此の外かゝる例なほいと多し。就中釋教と題せる部門は大抵佛經の意を翻案したるもの皆此の類なり。此等の歌一首の意全く理に落ち詞はた平語めきて歌謡としも云ひ得ざるものなきにあらずと雖もなべては巧妙の程遙に前代諸集のまゝ露骨なるに比して優るところあるを覺ゆ。攝政太政大臣の歌に

「家に百首歌よみ侍りける時十界の心よみ侍りけるに縁覺のこゝろを

おく山にひとりうき世はさどりにきつねなき色を風にながめて

といひ前大僧正慈圓の歌に分別功德品或住不退地の心を

わしの山けふきく法のみちならでかへらぬ宿に行く人ぞなき

と詠ぜるを見ても知るべし。此の外神祇歌と題して夢想の歌さては神佛の詠などいどり出で掲げたる歌としては素とよりすぐれたるふしなしと雖も亦以て當代の人士が信仰の如何を卜知するに足るものありと信ず。

『新古今和歌集』の歌は右述ぶる如く其の想の上に格別の變化を見ざるも其の格調の邊に一種特殊の所あり思ひつき言ひなしさまの面白かりしかば一世を風靡し後世の稱賛をも博するを得たり。然れども其の姿よき必ずしも其の心よきにあらず詞艶なるに比して心の誠少なきが故に後世之れを學ねぶもの往々にして纖巧に流るゝに至れり。况や其の後承久の變は朝廷に大恐慌を惹起し次いで和歌所の廢止となりしかば歌界の繁盛また昔日の如くならず。かくて新古今の以後廿六年を経て後堀河天皇の御代貞永元年に定家復勅命を蒙りて『新勅撰和歌集』を